

鶴翔会

令和3年10月1日発行 2021年 131号

岡山医学同窓会報



衛生学実習



緒方益雄

表紙の写真



おがた ますお
緒方 益雄 (1891~1976)

明治24年東京生まれ。大正6年東京帝国医科大学卒業。同10年、医学博士の学位を授与された。続いて、同12年ドイツ留学、欧米視察の後、同14年6月、同9年に細菌学教室と分離した岡山医科大学衛生学講座に初めての主任教授として就任した。

主任教授として岡山医科大学に着任する以前には東大医学部三田教授の下で血清学を専攻した。大正12年ベルリン大学衛生学教室に留学し、Korff-Petersen教授の下で、Physikalische Abteilungにおいて住宅衛生や被服衛生などを中心とする環境衛生学の研究を行った。したがって、教授時代の当教室の重要な研究業績は、血清学、免疫学の分野と環境衛生の分野とに大別できる。

Forssmann氏抗体や血清沈降素の分離に成功し、従来広く利用されていたUhlenhuth氏法による沈降素測定値が抗体価を示すものではないことを究明した研究成果は、その後十年余り後にTeveli Z.により追試確認され、Zeitschrift für Immunitätsforschungにも取り上げられた。

その後、細菌凝集素の分離を行い、抗体分離に際し補体結合性抗体、過敏症抗体も同時に分離しうることを証明した。さらに、過敏症の能動性、被動性いずれにおいても、また局所臓器過敏症においてもその沈降素の量と質によく並行し得ることを明らかにし、沈降素をGrundimmunitätの形で捉えて従来の沈降素の定量の不完全さに起因する数多くの未解明のままになっていた問題を究明し、蛋白抗原による沈降反応、補体結合反応、生体過敏症反応が互いに一致することを証明した。また、動物実験によって抗体が一部胎盤を経て母体よりその仔体に移行するとともに、抗原の一部が仔体に移行し仔体自身能動性に抗体を産生し得ること、また一部母乳によって経口的にも移行することを明らかにした。

抗体の特異性、臓器特異性に関しても数々の新しい知見を報告し、電気泳動法による血清各成分の抗体産生を証明した。また、過敏症の発生機転により抗原抗体の結合を阻止する方策を研究し、その経過の中で生体においては飢餓時には過敏症反応が減弱するという事実も解明した。

これら血清、免疫学の研究とともに住宅衛生の分野においても、壁の保温作用を熱学的に検討し、照明に関する数々の研究成果も報告している。

気象医学の分野では、冷却度に関してカタ寒暖計とFrigorimeterとの比較検討を行うとともに、岡山地方の気象の実態を明らかにすべく一年間にわたって冷却率を測定し報告した。また、Fischer教授の教えにより組織培養を緒方、大田原、本並等によって教室の研究分野に加えられ、次期大平教授の下にも応用された。これと関連して日本人に適用し得る皮膚温の算定方式を確定し、冬季に女性が男性よりも皮膚温の低下することを証明した。

血清、免疫学の実験的成果の社会的応用として、沈降反応による微量尿蛋白の測定を用いた疲労測定の方法を考案し、Donaggio反応の不備を改善した。

新制岡山大学の発足後は、これまでの血清・免疫学の広範な医学各分野への応用が挙げられるが、とりわけ日本脳炎委員会の中核となって、岡山県及び近県に流行した日本脳炎ウィルスの新株分離に成功したことは特筆すべきである。

また、瀬戸内海総合研究を分担して、主として住宅環境を中心に実態を調査し、地域における保健活動の資料として寄与するなど、極めて大きい働きをした。

(参考：岡山大学医学部百年史)

巻頭言	1
鶴翔会会長（医学部長） 豊岡伸一	
ご挨拶	3
岡山大学学術研究院医歯薬学域腫瘍微小環境学分野教授就任 富樫庸介 岡山大学学術研究院医歯薬学域放射線医学教授就任 平木隆夫 岡山大学病院薬剤部教授就任 座間味義人 川崎医科大学放射線腫瘍学教授就任 勝井邦彰 川崎医科大学運動器外傷・再建整形外科学教室教授就任 野田知之 広島大学病院広島臨床研究開発支援センター教授就任 平田泰三 藤田医科大学医学部公衆衛生学講座教授就任 太田充彦 島根大学医学部泌尿器科学講座教授就任 和田耕一郎 島根大学医学部外科学講座教授就任 山根正修	
医学部創立150周年記念事業	10
岡山大学医学部創立150周年記念事業プログラム	
会員動向	11
人の動き（受賞者、人事異動、役員異動など） 学位授与 令和2年度岡山医学会賞受賞者 会員訃報	
クラブ報告	15
クラブ紹介 鹿田茶道部 孫崎恵美 医歯薬男子バレーボール部 山本温輝	
同期会だより	17
昭和34年卒「ねぶち会」の令和2年 瀧谷泰博	
随想	18
96歳老生の青春懐古 小河博之 慶州ナザレ園慰問 難波正義 妹尾前鶴翔会事務局長お疲れ様でした 坪井修平 目医者をつぶやき「連携」 松尾俊彦	
新聞より	23
岡山大学医学部・岡山大学病院並びに鶴翔会会員に係る新聞記事など（2021.3.1～2021.9.1）	
海外だより	27
サンフランシスコ便り～2人のリーダー～ 佐野俊二	
歴史の広場	31
医師養成の歴史と岡山大学医学部—その7 棕野 洋	
書籍紹介	42
自書紹介 『世界の美しい病院 —その歴史』 石田純郎	

教室だより

43

海外への留学生一覧

岡山より

70

岡山医学会・鶴翔会・岡山大学関連病院長会合同総会（書面総会）の報告
事務局からのお知らせ

ご寄付・ご寄贈いただきました

おひとり“3,000円”の年会費が鶴翔会の活動を支えています！

令和3年度卒年次別会費納入状況

鶴翔会だより 『教育研究を進めるもの』 山田雅夫

岡山大学病院医科系診療科別役付職員一覧

鶴翔会会報 投稿内規

編集後記

77

今号の格言・名言（選者：読み人知らず）

We cannot solve our problems with the same thinking we used when we created them.

Albert Einstein

巻 頭 言

医学部長 豊岡伸一

岡山大学医学部同窓会会員の皆様におかれましては、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

東京2020オリンピック・パラリンピックも終わり、早いもので令和3年度も後半となりましたが、皆様ご承知の通り、我が国はいまCOVID-19の第5波の真っただ中にあります。本学の医学部学生や大学院生の皆さんは、オンライン授業や感染対策に十分配慮した実習・実験並びに部活動など、これまでとは全く異なった大変ストレスフルな学生生活を余儀なくされています。本学においてもワクチン接種の活動を推進していますが、岡山地域の新型コロナウイルスの蔓延自体をくい止めるまでには至っておらず、各関連病院や医療関連施設におかれましては多大なご負担を強いられている状況と拝察申し上げます。新型コロナウイルスの新しい変異株の出現は今後も続くことが考えられ、COVID-19に最新の注意を払いながら様々な活動を行う工夫も必要です。その一環として第4波の最中ではありましたが、同窓会関連の行事として6月には昨年度COVID-19のために中止となった岡山医学会主催の新任教授講演会と岡山医学会賞の授賞式が、リノベーションされた旧生化学棟（鹿田会館）講堂において現地の参加人数を制限したハイブリッド形式で行われました。この場を借りまして鶴翔会事務局をはじめご協力いただいた関係者に厚く御礼申し上げます。また、その際、7名の新任教授による講演がありました。各教授とも優れた業績とビジョンを持った人財であることが感じられ、岡山大学医学部の発展を予感させる講演会でした。残念ながらその後の懇親会は中止となりましたが、コロナ禍での同窓会の大きな活動が再始動した1日となりました。

また、本131号の同窓会誌には新しく他大学の教授に就任した6名の同窓会員のご挨拶が掲載されています。岡山大学医学部で学び、あるいは業績をあげた同窓会員が学内のみならず他学の教授に就任することは、岡山大学にとって名誉なことであり、本学医学部で質の高い研究や教育が、また臨床系であれば診療が行われていることの証と言えます。そして、結果として、その同窓会員が着任した大学や地域に貢献し、次の新しい人財を育てることができれば、岡山大学医学部のDNAがより広く次世代へ引き

継がれることにつながります。すなわち、COVID-19に象徴される今後の変動・不安定・不確実時代においても、岡山大学医学部が引き続きその存在意義を果たし、地域・世界に貢献できる存在であり続けるためには、優れた人財や指導者を育成・輩出し、研究・教育さらには診療のより一層の底上げを図る必要があると言えます。ご参考までに、吉野医学部長時代に本学医学部と文部科学省との間で再定義された本学医学部のミッションは、「優れた医学研究者・医師の養成を積極的に推進する。地域社会のみならず、国際社会への貢献、学部から大学院・卒後臨床研修を包摂したプログラムによる研究医育成する。」と明記されています (https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/houjin/1342097.htm)。なお、ここで言及されている大学院は主にARTプログラムを指していますが、残念なことに、医学部を含めた岡山大学全体において、大学院入学人数が年々減傾向にあり、大きな課題となっています。皆様ご承知の通り、本学は研究大学であり、ミッションにある「優れた医学研究者の輩出」のためにも大学院の定員充足は是非とも達成しなければなりません。大学院志望者の減少には様々な要因が考えられますが、優秀な学生を数多く獲得するために私たち医学部がすべきことは、岡山大学医学部で優れた研究・医療技術開発を行い、その成果を世界に発信していくことに尽きると思います。中でも海外からの留学生は、より良い研究環境を求めて留学候補施設の研究力を比較検討し、志願先を決めており、卓抜した研究力は国内だけでなく海外の優秀な学生の獲得につながることを期待されます。この点からも、先に述べた岡山大学医学部の「研究力の一層の強化」は喫緊の課題であり、様々な角度から研究力の更なる向上を実現するための現状把握と対策を行っていく必要があると言えます。COVID-19をきっかけに、我が国と世界との研究競争力格差が明確化されるとともに、国立大学の存在意義が広く再認識された現状を踏まえ、私たちは地域・世界並びに同窓会の皆様からのご期待に応えるためにも、いわば不退転の決意で研究力強化に臨むべき状況にあると考えています。

最後になりましたが、COVID-19という新しい因子の状況を注視しながらの日常がまだ続きそうですが、

同窓会員の皆様におかれましてはどうぞお身体をお願
いください。また、このような状況の中でも同窓会員
の皆様からの更なるご指導・ご鞭撻、そしてご支援を

賜ることができましたら幸甚です。どうぞ宜しくお願い
申し上げます。



ご挨拶

岡山大学学術研究院医歯薬学 域腫瘍微小環境学分野教授に 富樫庸介氏 ご就任



ご挨拶

2021年4月より新たに教授を
拝命いたしました富樫と申しま
す。当教室は1960年度～附属癌
源研究施設代謝研究部門、同生
化学部門に流れを持つ伝統ある
教室で、初代小田教授、2代目
関教授、3代目加藤教授、そし
て私で4代目の教授となりま

す。

私自身は2006年京都大学医学部医学科を卒業し、呼
吸器内科医として働いている中で、肺癌のEGFRチロ
シンキナーゼ阻害剤の開発、特にEGFR遺伝子変異肺
癌への劇的な効果を目の当たりにし、臨床的な疑問を
解決でき患者さんの治療に繋がるようなトランスレ
ショナルリサーチ (TR) /リバーストランスレショ
ナルリサーチ (rTR) に携わりたいと考え研究の道に
進みました。ヒトの臨床検体が最も病気の真実に近い
という考えから、マウスや細胞の実験に加え、実際に
患者さんの臨床検体を用いた癌のゲノム解析の研究か
ら、近年注目されているがん免疫療法に関わる腫瘍微
小環境の研究まで幅広く行ってまいりました。現在
は腫瘍免疫・微小環境の基礎研究からTR/rTRを主な
テーマとし、特に、不均一な組織の微小環境を明らか
にするために、臨床検体の1細胞レベルの解析に取り
組んでいます。伝統の中にもこのようなcutting edge
を取り入れた基礎研究からTR/rTRを推進したいと考
えております。

若い先生があまり基礎研究を行わないことが本邦の
問題として叫ばれていますが、私自身が臨床医でした
ので、臨床的な疑問から派生した研究テーマが多く、
逆にそういった疑問こそが私にとっては研究の大きな
きっかけ(「種」)にもなります。私がこういった研究
を始めたのは、そんな「種」をベースにとりあえず臨
床検体を解析してみたいと思った医師7年目です。先
生方も日々の臨床の中でもそういった「種」を見つけ、

是非研究に興味を持っていただければ幸いです。その
ような臨床と研究の正の循環からも本学の益々の発展
に寄与したい所存です。今後ともご指導ご鞭撻のほど、
どうぞよろしくお願い申し上げます。

略 歴

- 2006年3月 京都大学医学部医学科 卒
- 2011年4月 京都大学大学院医学研究科 助教
- 2015年3月 近畿大学大学院医学研究科修了(日本学
術振興会特別研究員DC2)
- 2015年4月 近畿大学医学部 助教
- 2016年4月 国立がん研究センター 研究員(日本学
術振興会特別研究員PD)
- 2019年9月 千葉県がんセンター研究所 部長
- 2021年4月 岡山大学学術研究院医歯薬学域 教授
- 2021年4月 千葉県がんセンター 客員研究員
- 2021年6月 千葉大学大学院医学研究院 客員教授

岡山大学学術研究院医歯薬学 域放射線医学教授に 平木隆夫氏 ご就任



ご挨拶

同窓の諸先生方におかれまし
ては益々ご健勝のこととお慶び
申し上げます。

この度、私は金澤 右前教授
の後任として令和3年10月1日
付で、岡山大学学術研究院医歯
薬学域放射線医学教授を拝命い
たしましたので、謹んでご挨拶

申し上げます。

私は、平成7年に岡山大学を卒業し、直ちに岡山大学
放射線医学教室に入局しました。入局後は大学病院
や関連病院にて研鑽を積んだ後、平成12年に日本医学
放射線学会放射線診断専門医になりました。平成14年
からは米国オレゴン州にあるドクター・インターベン
ショナル研究所に約2年間留学し、インターベンショ
ナルラジオロジー (IVR) に関する基礎研究を行いました。
平成16年に帰国後は主に岡山大学病院で画像診断
とIVRを中心に診療・研究・教育を行ってきました。
特にIVRにおいて様々な臨床研究を行ってきた他、平
成24年からはCTガイド下IVR用の針穿刺ロボットの
開発を医工連携で行っています。現在は日本医療研究

開発機構（AMED）の革新的がん医療実用化研究事業として医師主導治験を実施中であり、岡山大学発の革新的医療機器の薬事承認に向けて邁進しています。

岡山大学放射線医学教室は、初代教授武田俊光先生のもと昭和21年に開講しました。その後、山本道夫先生、青野 要先生、平木祥夫先生、金澤 右先生の5代の教授のもと75年間にわたり発展を遂げ、中四国で最大規模、全国においても有数の放射線医学教室となりました。私は今後この教室を更に発展させ、岡山大学病院、岡山大学、さらには社会に貢献することが使命だと思っております。

放射線医学は、病変を早期に発見し、低侵襲に治療することを目指した医学であり、画像診断・IVR、放射線治療、核医学が含まれます。放射線医学の特徴は、放射線医療機器の進歩とともに急速に発展していくことです。特に近年は人工知能（AI）の導入により画像診断のワークフローも変化しつつあります。IVRにおいては私が開発しているようなロボットの導入も進んでいくものと思います。時代の変化に機敏に対応しながら、最高レベルの診療を実践し、次世代の診断・治療につながる研究を行い、そして次世代の放射線医学を担う人材を育成していく所存であります。鶴翔会の先生方におかれましては、引き続きご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

略 歴

1995年 3月	岡山大学医学部卒業
1995年 4月	岡山大学医学部放射線医学教室入局
2001年 3月	岡山大学大学院医学研究科（放射線医学専攻）修了
2001年 4月	岡山大学医学部附属病院放射線科医員
2002年 5月	米国オレゴン健康科学大学, ドクター・インターベンショナル研究所、研究員
2004年 4月	岡山大学医学部・歯学部附属病院放射線科医員
2007年 9月	岡山大学医学部・歯学部附属病院助教
2012年 4月	岡山大学病院講師（放射線科）
2017年 4月	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科准教授（放射線医学分野）
2018年11月	岡山大学研究教授（2022年 3月31日まで）
2021年10月	岡山大学学術研究院医歯薬学域教授（放射線医学分野）

岡山大学病院薬剤部教授に 座間味義人氏 ご就任



ご挨拶

清秋の候、岡山医学同窓会の皆様方には益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。この度、千堂年昭教授の後任として、令和3年9月1日付けで岡山大学病院薬剤部教授に就任致しました。浅学非才かつ若輩である私ですが、日本有数の歴史と伝統

がある岡山大学病院の一員として薬剤部運営を担当させていただく名誉を賜り、その重責を担う決意を新たにいたしました。

私は、これまで臨床系教員として岡山大学薬学部・岡山大学病院薬剤部に所属し、徳島大学病院薬剤部の副薬剤部長を歴任するなど病院薬剤部における幅広い薬剤師業務と管理運営に携わってきました。その中でチーム医療及び医師との連携の重要性を特に実感したこともあり、医師・他職種と協働する薬剤の専門家として、薬物治療の責任分担とチーム医療への貢献を介した医療従事者の負担軽減を図り、その上で医療安全の向上と特定機能病院への経営参画を推進する薬剤部組織の運営を目指す所存です。

また、岡山大学病院の使命を体現するためにも、大学病院薬剤部を中心に医・歯・薬学部の各学生及び看護師等を対象に実施してきた医療薬学教育の経験を活かし、安全かつ質の高い薬物療法を実践できる医師・医療従事者や薬学的見地からエビデンス発信を行う Pharmacist-Scientistの育成に携わりたいと考えています。

加えて、私の研究は、大規模医療情報データベースを活用したデータサイエンスを主軸としており、特に既存薬の適応拡大を目指した創薬研究では、有効性・安全性の評価やメカニズムの解明までを一元化しています。この幅広い疾患領域の基礎と臨床の橋渡し研究に信頼性の高いシーズを迅速に提供できる利点を活かし、特定臨床研究や医師主導治験の活性化にも貢献します。

最後になりましたが、諸先生方のご健勝と益々のご発展をお祈りするとともに、ご指導ご鞭撻のほど何卒宜しくお願い申し上げます。

略 歴

- 1980年3月 沖縄県生まれ
 2003年3月 岡山大学薬学部卒業
 2005年3月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科
 修士課程修了
 2008年3月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科
 博士課程修了
 2008年4月 岡山大学薬学部臨床薬学講座
 博士研究員
 2009年4月 岡山大学薬学部医薬分子設計学講座
 助教
 2011年10月 岡山大学薬学部救急薬学講座助教
 2016年1月 徳島大学病院薬剤部講師
 2018年4月 徳島大学病院薬剤部准教授・
 副薬剤部長
 2021年9月 岡山大学病院薬剤部教授・薬剤部長

川崎医科大学放射線腫瘍学教授に勝井邦彰氏 ご就任

**ご挨拶**

鶴翔会の先生方におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。このたび令和3年4月1日付けで川崎医科大学放射線腫瘍学教授を拝命いたしました。これまで放射線医学講座とご紹介元の先生方をはじめ、多くの方々にご支援を

いただき、この場を借りて御礼申し上げます。

私は平成9年に鳥根医科大学を卒業、岡山大学、呉医療センター、東京女子医科大学にて研修を受けました。平成16年から福山市民病院にてリニアックの新規導入、平成20年から岡山大学にてリニアック更新と高精度放射線治療を導入しました。以後、病棟医長を拝命、岡山大学と津山中央病院の共同プロジェクトとして陽子線治療のトレーニング、治療装置の導入、周知活動や研究等に従事しました。

放射線治療の先端的治療には陽子線治療やX線による定位放射線治療・強度変調放射線治療が挙げられます。外照射以外に、放射性同位元素内用療法、密封小線源治療を経験し、腫瘍センター、頭頸部がんセンター、メラノーマセンター、食道疾患センターよりお声がけいただき、希少癌の診療にも携わりました。前

任の平塚名誉教授は、我が国におけるホウ素中性子捕捉療法 (BNCT) の先駆者のお一人です。X線、陽子線、BNCT、希少癌と幅広く診療し、岡山医療圏の放射線治療の発展に貢献したいと考えております。

研究面では、肺癌、陽子線治療、乳癌、食道癌、少数転移に関わってきました。少数転移は免疫チェックポイント阻害剤との組み合わせにより注目されている分野となっています。

微力ながら両大学の更なる発展に尽力する所存です。同窓の皆様には、これからもご指導、ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくごお願い申し上げます。

略 歴

- 1997年 鳥根医科大学 卒業・岡山大学医学部放射線科入局
 1998年 中国地方がんセンター国立呉病院放射線科
 1999年 東京女子医科大学放射線科 (治療部門)
 2004年 福山市民病院放射線科 医長
 2008年 岡山大学病院 助教
 2014年 兵庫県立粒子線医療センター 医長・岡山大学病院 助教
 2015年 岡山大学病院メラノーマセンター 副センター長・岡山大学陽子線治療学 准教授
 2017年 岡山大学病院放射線診療品質管理室 副室長
 2020年 岡山大学病院食道疾患センター 副センター長
 2021年 川崎医科大学放射線腫瘍学 教授

川崎医科大学運動器外傷・再建整形外科学教室教授に野田知之氏 ご就任

**ご挨拶**

鶴翔会の先生方におかれましては、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。この度、令和3年4月1日付けで、川崎医科大学 運動器外傷・再建整形外科学教室 教授、ならびに川崎医科大学総合医療センター 整形外科部長を拝命し過日着任

いたしました。岡山大学大学院医歯薬学総合研究科運動器外傷学講座在職中には、臨床、教育、研究すべてにおいて皆様より公私ともにひとかたならぬご厚情、

ご指導を賜りましたこと、心よりお礼申し上げます。

私は平成4年に岡山大学を卒業し、井上一名誉教授が主宰される整形外科教室に入局いたしました。最初の研修先が故 田辺剛造名誉教授が当時院長をされていた岡山労災病院で、数多くの外傷症例を経験させて頂き、整形外科を専門とする下地が形成されました。学位は変形性膝関節症に対する脛骨骨切り術後の人工膝関節置換術の解析という研究テーマを井上名誉教授から頂いて取得しました。関連諸病院でも特に骨折を中心とする整形外科を専門とすべく研鑽し、ドイツでの臨床研修など短期留学の機会も頂いて見聞を広めました。そして平成18年1月からは尾崎敏文教授のご高配により、岡山大学の整形外科グループのチーフとして骨盤・寛骨臼骨折などの四肢重度外傷や多発骨折、難治性偽関節などに対して系統的治療と研究を遂行させて頂きました。

私の赴任前まで川崎医大は整形外科3教室体制でしたが、今回の運動器外傷・再建整形外科学の開設により4教室体制となります。前職の“岡山大学大学院 運動器外傷学講座”の目的であった「運動器外傷に対する治療法の研究・開発を行い、国内の運動器外傷に関する教育を牽引する」を継続し、臨床面におきましても防ぎえた外傷後遺障害（preventable trauma disability）を最小限に抑え、患者の自立した生活と社会復帰を達成すべく治療を行っていく所存です。また整形外科学でも主要領域の一つである整形外科、骨折治療を基幹研究分野として、実臨床に応用、還元できる研究を展開します。そして教育については救急外傷における整形外科治療の重要性や学問としての整形外科の魅力などを啓蒙し後進の育成に努めたいと考えています。

末筆ではございますが、これまでご指導いただきました先生方に心より感謝申し上げるとともに、同窓の先生方におかれましては今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

略 歴

- 1992年3月 岡山大学医学部医学科卒業
- 1992年4月 岡山大学医学部附属病院整形外科教室入局
- 1992年6月 岡山労災病院整形外科研修医
- 1994年4月 厚生年金高知リハビリテーション病院整形外科医員
- 1997年1月 香川県立中央病院整形外科医員
- 1999年4月 赤穂中央病院整形外科医長
- 2003年2月 ドイツ・フライブルク大学フェローシッ

プ研修

- 2003年4月 岡山済生会総合病院整形外科医長
- 2006年1月 岡山大学医学部・歯学部附属病院医員(整形外科)
- 2006年4月 岡山大学医学部・歯学部附属病院助手(整形外科)
- 2007年4月 岡山大学医学部・歯学部附属病院助教(整形外科)
- 2009年4月 岡山大学病院助教(整形外科)
- 2010年9月 岡山大学病院講師(整形外科)
- 2016年4月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科運動器外傷学講座准教授
- 2018年4月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科運動器外傷学講座教授
- 2021年4月 川崎医科大学運動器外傷・再建整形外科学教室教授
川崎医科大学総合医療センター整形外科部長

広島大学病院広島臨床研究開発支援センター教授に 平田泰三氏 ご就任



ご挨拶

鶴翔会の先生におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。この度、令和3年4月1日付けで広島大学病院広島臨床研究開発支援センター教授を拝命いたしましたので、ご挨拶申し上げます。私は、平成15年に岡山大学医学部を卒業

しまして、呉共済病院で研修後、平成17年岡山大学医学部第二内科学教室（谷本光音教授）に入局いたしました。同年より、国立がんセンター中央病院（現 国立がん研究センター中央病院）乳腺・腫瘍内科で5年間、腫瘍内科医として乳癌、肺癌、婦人科癌、肉腫を始め、幅広い悪性疾患に対する抗がん剤治療について学ばさせて頂きました。その後、医薬品医療機器総合機構（PMDA）新薬審査第五部で2年間、抗がん剤の新薬審査や新薬の開発助言業務を主に携わらせて頂きました。平成24年4月から岡山大学に戻り、平成24年10月から岡山大学病院 新医療研究開発センター准教授を拝命しました。岡山大学病院における臨床研究

を活性化させるため、いくつかの医師主導治験の支援をさせて頂くとともに、自らもドラッグラグを解消すべく医師主導治験を実施して参りました。また、革新的医薬品や医療機器開発の中心的な役割を担う病院である臨床研究中核病院に向けた体制整備を行って参りました。

岡山大学にご指導頂きました臨床・研究・教育をもとに、これからアカデミアが質の高い・国際水準の臨床研究を推進し、主体的に薬剤開発を担うAcademic Research Organization (ARO) 組織の構築に努め、新たな薬剤の開発や治療法の確立に精進したいと考えております。

鶴翔会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒宜しくお願い申し上げます。

略 歴

- 1997年 広島大学附属福山高等学校卒業
- 2003年 岡山大学医学部卒業
- 2005年 岡山大学医学部 第二内科学教室入局
- 2005年 国立がんセンター中央病院 乳腺・腫瘍内科
- 2010年 医薬品医療機器総合機構 新薬審査第五部 (抗悪性腫瘍部門)
- 2012年 岡山大学病院 腫瘍センター 助教
- 2012年 岡山大学病院 新医療研究開発センター 准教授
- 2015年 呉医療センター・中国がんセンター 腫瘍内科
- 2021年 広島大学病院 広島臨床研究開発支援センター 教授

藤田医科大学医学部公衆衛生学講座教授に太田充彦氏 ご就任



ご挨拶

鶴翔会の先生方におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。2021年4月1日付で藤田医科大学医学部公衆衛生学講座教授を拝命いたしましたので、ご挨拶申し上げます。

私は1997年に岡山大学医学部を卒業後、青山英康教授が主宰

されている衛生学教室に入局しました。川上憲人教授、三野善央助教授に学位論文の指導を受け2002年に大学院を修了した後、教室同門の大原啓志教授が主宰されている高知医科大学医学部公衆衛生学教室の助手として赴任しました。2007年に縁あって藤田保健衛生大学医学部公衆衛生学講座講師として採用され、現在に至っております。

研究としては、産業保健（職業性心理社会的ストレスがニコチン依存・睡眠・内分泌系に及ぼす影響、がんサバイバーの就労支援、保育労働者における腰痛など）、公衆衛生における依存症対策（ニコチン依存、食物依存など）、精神保健（統合失調症の有病率の推計）に関する研究を、国内外の研究者とのネットワークを構築しながら発展しております。幸いにも私自身がやりたいと思う研究を周りの方々に支えられて行うことができました。その経験から、講座教員・学生の自由な発想を伸ばせる指導者でありたいと考えております。

教育においては、私学である本学では医学部生の国家試験合格は最大の目標です。しかし、同時に社会医学マインド（疾病・障害を有する人の生活や社会的背景に目を向け、人々の健康の維持・増進を通じて社会をより良くすること）の涵養も目標としています。

これまでご指導いただいた皆様にはこの場を借りて厚く御礼申し上げます。大学院修了後は長く岡山を離れていますが、岡山大学に関するニュースを聞くことは嬉しく思います。岡山大学ならびに鶴翔会の皆様のご発展を祈念しております。

略 歴

- 1997年3月 岡山大学医学部卒業
- 2002年3月 岡山大学大学院医学研究科博士課程修了 (衛生学専攻)
- 2002年4月 高知医科大学医学部公衆衛生学教室助手 (2007年同助教)
- 2007年10月 藤田保健衛生大学医学部公衆衛生学講座講師
- 2013年4月 タイ王国・マヒドン大学公衆衛生学部 Master of Public Healthプログラム修了
- 2014年4月 藤田保健衛生大学医学部公衆衛生学講座准教授 (2018年藤田医科大学に改称)
- 2021年4月 藤田医科大学医学部公衆衛生学講座教授

島根大学医学部泌尿器科学講座教授に和田耕一郎氏 ご就任



ご挨拶

鶴翔会の先生方におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。令和3年8月1日付けで島根大学医学部泌尿器科学講座教授を拝命致しましたので、ご挨拶を申し上げます。

私は昭和52年に愛媛県松山市で生まれ、松山東高等学校と岡山

山大学医学部を経て、平成14年に公文裕巳教授（現新見公立大学学長）主宰の岡山大学泌尿器科に入局しました。平成17年に大学院に入学し、公文裕巳先生や故松本明先生（元川崎医科大学微生物学教授）に師事し、尿路性器感染症を中心に基礎研究を行いました。平成21年に大学院を修了し、ロボット手術、尿路結石や上部尿路上皮がんに対する泌尿器内視鏡手術、感染症を中心に診療範囲を広げ、平成23年からは荒木元朗先生（現岡山大学泌尿器科講師）の下で腎移植医療を学びました。研究も精力的に継続し、学生や若手医師に対して共に学び、成長できるような教育を心がけて参りました。平成29年には那須保友先生（現岡山大学理事（研究担当）・副学長）のご尽力でウィーン医科大学に留学し、SF Shariat教授の下で多くの手術や研究に触れ、人脈も形成できました。平成31年には腎移植に関する研鑽を積むべく、岡山大学を辞して東京女子医科大学に留学しました。令和2年に岡山大学に帰局する際には、渡邊豊彦准教授（診療科長）をはじめ、同門の多くの先生方に温かく迎えて頂きました。

島根大学医学部泌尿器科は昭和52年に島根医科大学に設置され、私と同年という比較的若い医局であります。椎名浩昭先生（現島根大学医学部附属病院院長）の後任である4代目教授として、島根大学の診療・研究・教育に岡山大学で学んだ知識や経験をうまく吹き込み、島根県や山陰地方にゆかりのある医療従事者や住民の方々から厚い信頼が得られるよう、邁進して参りたいと思います。先生方のご健勝を心からお祈りするとともに、これからもご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

略歴

2002年3月 岡山大学医学部卒業

2002年4月 岡山大学医学部泌尿器科入局

岡山済生会総合病院 研修医（のち医員）
2005年7月 岡山大学医学部・歯学部附属病院 泌尿器科医員
2009年7月 香川県立中央病院 泌尿器科医員（のち医長）
2011年4月 岡山大学病院 泌尿器科医員
2012年4月 岡山大学病院 泌尿器科助教
2016年6月 岡山大学病院 泌尿器科講師
2017年1月 ウィーン医科大学 リサーチフェロー
2017年3月 岡山大学病院 泌尿器科講師
2019年10月 東京女子医科大学 腎移植フェロー
2020年10月 岡山大学病院 泌尿器科講師
2021年8月 島根大学医学部泌尿器科学講座 教授

島根大学医学部外科学講座教授に山根正修氏 ご就任



ご挨拶

鶴翔会会員の先生方に置かれましてはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。この度、令和3年8月1日付けで、島根大学医学部外科学講座（呼吸器外科学）教授を拝命いたしましたので、ご挨拶申し上げます。

私は平成8年に岡山大学医学部を卒業し、清水信義先生の主宰する第二外科（現、呼吸器・乳腺内分泌外科）に入局し大学院に進学いたしました。肺移植後の急性拒絶における液性免疫に関する研究のテーマにてご指導頂き、学位を取得いたしました。その後、トロント大学胸部外科研究室に留学し、Shaf Keshavjee教授指導の下、肺移植後の分子遺伝学的研究を行いました。帰国後も肺移植における拒絶反応、急性肺障害に関する研究を継続いたしました。平成18年4月に伊達洋至教授が着任された際に、岡山大学呼吸器外科助教として就任させて頂きました。以来15年間、伊達洋至教授、三好新一郎教授、そして現在の主任教授であります豊岡伸一教授のご指導を仰ぎ、呼吸器外科学の診療、研究を大いに学ばせて頂きました。また最高学府の教員として医学生、研修医をはじめとする人材育成は重要なミッションと考えておりますが、現学長の槇野博史先生、副学長の伊野英男先生らのご指導の下に教育に対する姿勢を学ぶ機会を与えて頂きました。さらに松川昭博教授にご推挙頂き、

平成24年度の文科省大学改革推進事業による医学教育リノベーションセンター 准教授に着任させて頂き、人材育成活動に従事してまいりました。また元医学部長大塚愛二教授の指導下で国際分野別認証の受審に関わらせて頂くなど岡山大学医学部の発展に直接関わることができました。外科研修に関しては藤原俊義教授、笠原真悟教授に御教授頂きながら岡山大学マネジメントセンターの実務を担当してまいりました。

岡山大学で学んだ経験を活かし呼吸器外科の診療、研究を鳥根県の皆様にお届けし、鳥根大学医学部の発展に貢献していきたいと考えております。鶴翔会の先生方のさらなるご発展をお祈りするとともに、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう引き続きよろしくお願い申し上げます。

略 歴

- 1996年 3月 岡山大学医学部卒業
- 1996年 4月 岡山大学第二外科入局
- 1996年 9月 屋島総合病院 外科研修医
- 2001年 9月 トロント大学胸部外科研究室 研究員
- 2003年 9月 三豊総合病院 副医長
- 2006年 4月 岡山大学病院 腫瘍・胸部外科 助教
- 2012年 9月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科
医学教育リノベーションセンター
准教授
- 2017年 4月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 呼吸器・乳腺内分泌外科 准教授
- 2021年 8月 鳥根大学医学部外科学講座呼吸器外科教授



医学部創立150周年記念事業



岡山大学医学部創立150周年記念事業プログラム

と き 令和3年11月3日(水・祝日)

ところ ホテルグランヴィア岡山 4階「フェニックス」

記念式典 13:30~15:00

岡山大学医学部創立150周年に当たり、これまで本学部の発展にご尽力いただいたご来賓の方々、卒業生、大学関係者及び教職員による記念の式典を行います。

- 一 開会の辞
- 一 医学部長式辞 岡山大学医学部長 豊岡 伸一
- 一 学長挨拶 岡山大学長 楨野 博史
- 一 来賓祝辞
- 一 高額寄付者への名誉団体表彰状贈呈
- 一 医学部・研究科の歩み 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科長 伊達 勲
- 一 岡山大学病院の歩み 岡山大学病院長 前田 嘉信
- 一 閉会の辞

記念講演 15:20~16:00

演題：基礎研究に身をおいた一人の卒業生として

講師：理化学研究所 生命機能学研究センター チームリーダー

濱田 博司 先生(昭和50年卒)

概要：岡山大学医学部をご卒業後、米国・国立衛生研究所(NIH) ニューファンドランドメモリアル大学、東京大学、大阪大学を歴任され、現在も理化学研究所で、体の左右非対称性が生じる仕組みの研究に取り組まれている濱田先生に、一人の基礎研究者としての歩みと母校への思いについてご講演をいただきます。

〈お詫び〉

新型コロナウイルスの感染状況を考慮し1年延期いたしました「医学部創立150周年記念式典」は昨今の感染状況に鑑み、岡山県内居住の関係の方々に限定し、ご案内を差し上げることといたしました。

鶴翔会会員の皆様には大変申し訳ございませんが、何卒ご理解の程よろしくお願ひ申し上げます。



岡山大学医学部創立150周年記念事業実行委員会

会 員 動 向



受 章

瑞宝双光章 (昭39) 松 浦 皓 二
 “ (昭47院) 瀬 戸 卓
 令和2年度国民健康保険関係功績者厚生労働大臣表彰
 (昭50) 藤 田 邦 雄
 令和2年度公衆衛生事業功労者厚生労働大臣表彰
 (昭44) 松 山 正 春
 “ (昭46) 本 山 雄 三
 令和2年度救急医療功労者厚生労働大臣表彰
 (昭46) 忠 田 正 樹
 令和2年度産科医療功労者厚生労働大臣表彰
 (昭45院) 橋 本 威 郎
 第26回松岡良明賞 (昭57) 土井原 博 義

このたびの受賞に対し、会員一同心からお喜び申し上げますとともに、今後益々の御健勝をお祈り致します。
 ※会員の方が各賞を受賞された場合は事務局にご連絡ください。

医学部・病院関係

教授就任

腫瘍微小環境学	富 樫 庸 介
薬理学	細 野 祥 之
放射線医学	平 木 隆 夫
薬剤部	座間味 義 人

准教授就任

消化器外科学	榎 田 祐 三
疫学・衛生学	高 尾 総 司
病原細菌学	内 山 淳 平

講師就任

陽子線治療学	吉 尾 浩太郎
産科婦人科	小 川 千加子
救命救急・災害医学	藤 崎 宣 友
病理学(腫瘍病理)	田 中 健 大
周産期医療学	衛 藤 英理子

令和3年度 岡山大学医学部医学科入学者

和田 滉太	Lee Jiho	木下洋太郎
福田 優太	伴 優奈	池内 早貴
村上 聖弥	田村 美咲	坂本 明智
三谷 理貴	重光瑠琉香	眞鍋 悠理
片山 和泉	牛島 旭	大橋遼太郎
和仁 淑子	河口 裕明	宮崎 武陽
渡部 美佳	松岡あさひ	増野健太郎
田村 郁人	太田 吉宣	佐藤 遥香
藤原 新月	片桐康一郎	江崎 優太
北川 萌奈	三好 俊輔	井上 美咲
香川 昂毅	飯田 裕樹	加藤 佑一
椎名 涼	河端 亜弥	山崎 思文
平井 佑希	荒木 蒼 樹	立石 凌也
久保壮一朗	星河 立希	荒木 悠太
森下 敬太	松尾 彩加	白井聡一郎
濱口 直哉	野口 敏治	岸本 逸輝
高瀬 怜	古澤 夕海	稲垣向日葵
二宮 大	田中屋佳音	小林 亜未
栗井 幸輔	米山 桃夏	小野 歩未
神原 怜南	澁谷 栄佳	大谷 侑也
細川 雄輝	小西秀汰郎	錦織 巧
池田 朝陽	吉川 優人	田島 悠資
斉藤 花歩	久木原 舞	藤井 大地
柄川 希美	吉原由佳子	寺田 真人
井上 遥平	原田 知樹	寺迫 結子
間島 健太	松本 涼太	岡田 舜平
湯本 有彩	山田 聖	日高 凌
牧山 祐希	大元 美奈	小金丸悠太
村上 哲哉	北田 智大	小林 晃大
三木貫太郎	高橋 怜慈	市原 陽海
蒲原 日南	奥田 珠有	大熊 一誓
立花 勇人	眞鍋 翔子	谷脇 克
栗原 侑希	宮川 真輝	寺島 未智
藤田 健文	工納 佑介	矢野 嵩佳
桂 那月	合田 裕貴	中田 勝郎
河本 遥	竹田 愛	縄田 岳史

学位授与

博士

令和2年12月27日修了

榮 德 隆 裕 小児医科学
 河 原 明 奈 病理学 (免疫病理)
 萱 谷 紘 枝 血液・腫瘍・呼吸器内科学
 野 島 一 郎 腎・免疫・内分泌代謝内科学
 金 光 喜一郎 小児医科学
 谷 本 光 隆 消化器外科学
 灘 隆 宏 総合内科学
 吉 井 將 哲 薬理学
 木 谷 尚 哉 脳神経外科学

令和3年3月25日修了

内 野 かおり 病理学 (免疫病理)
 西之原 正 昭 血液・腫瘍・呼吸器内科学
 井 上 円 加 整形外科学
 佐 田 光 臨床薬剂学
 望 月 雄 介 整形外科学
 木 村 耕 介 総合内科学
 小 山 貴 久 耳鼻咽喉・頭頸部外科学
 大 林 由 佳 消化器・肝臓内科学
 大 道 千 晶 産科・婦人科学
 河 田 健 吾 呼吸器・乳腺内分泌外科学
 石 川 亘 消化器外科学
 秋 定 直 樹 耳鼻咽喉・頭頸部外科学
 渡 邊 敏 之 形成再建外科学
 大 塚 寛 昭 循環器内科学
 吉 田 雅 言 循環器内科学
 高 橋 陽 平 薬理学

AYE MOH MOH AUNG 病理学 (免疫病理)
 藤 井 佑 樹 消化器・肝臓内科学
 大 高 望 腎・免疫・内分泌代謝内科学
 川 北 智英子 腎・免疫・内分泌代謝内科学
 平 井 健 太 小児医科学
 三 道 康 永 血液・腫瘍・呼吸器内科学
 梶 岡 裕 紀 消化器外科学
 辻 寛 謙 整形外科学
 佐 能 俊 紀 公衆衛生学
 門 脇 幸 子 心臓血管外科学
 岡 崎 信 樹 麻酔・蘇生学
 平 山 隆 浩 救急医学
 前 山 博 輝 救急医学
 竹之下 慎太郎 精神神経病態学
 矢 田 勇 慈 精神神経病態学

佐々木 諒 脳神経内科学
 田 所 功 脳神経内科学
 松 本 菜見子 脳神経内科学
 菊 岡 亮 脳神経機構学
 TANXIANWEN 細胞化学
 石 原 裕 基 消化器・肝臓内科学
 濱 田 健 太 消化器・肝臓内科学
 安 富 絵里子 消化器・肝臓内科学
 秦 昌紫子 腎・免疫・内分泌代謝内科学
 福 島 和 彦 腎・免疫・内分泌代謝内科学
 三 宅 広 将 腎・免疫・内分泌代謝内科学
 池 田 知 佳 病理学 (腫瘍病理)
 坂 谷 暁 夫 病理学 (腫瘍病理)
 小野村 大地 腫瘍ウイルス学
 三 浦 章 博 呼吸器・乳腺内分泌外科学
 宮 内 俊 策 呼吸器・乳腺内分泌外科学
 友 信 奈保子 細胞生物学
 松 前 洋 眼科学
 上 甲 良 二 整形外科学
 平 中 孝 明 整形外科学
 中 桐 僚 子 形成再建外科学
 平 佑 貴 脳神経内科学
 浜 原 潤 総合内科学
 中 山 理 絵 循環器内科学
 小 林 泰 幸 心臓血管外科学
 藤 瀬 賢志郎 生化学
 森 本 大 作 小児医科学
 碓 井 喜 明 血液・腫瘍・呼吸器内科学
 中 野 靖 浩 総合内科学

修士

令和3年3月25日修了

石 田 瞳 細胞生理学
 井 出 亮太郎 分子医化学
 今 福 史 智 脳神経機構学
 門 脇 知 花 疫学・衛生学
 合 原 勇 馬 細胞生物学
 齋 木 影 一 細胞生理学
 勢 力 沙也加 生化学
 瀧 川 真 帆 分子腫瘍学
 田 邊 莉 奈 公衆衛生学
 長 尾 圭 細胞生理学
 中 島 美 穂 細胞生理学
 中 畑 みさき 疫学・衛生学
 BAI ZHIYU 病理学 (腫瘍病理)
 日 野 千恵子 病原細菌学

藤本 竜平	疫学・衛生学
眞名子 由宜	公衆衛生学
水田 菜保子	細胞生物学
村井 真彩	生化学
和田 里穂	精神神経病態学

関連病院関係

退会

岩国みなみ病院
牟礼病院

令和2年度岡山医学会賞受賞者

総合研究奨励賞（結城賞）

高橋 陽平（薬理学 大学院生）
Histidine-rich glycoprotein stimulates human neutrophil phagocytosis and prolongs survival through CLECL1A

小川 泰司（消化器内科 医員）
Propofol sedation with a target-controlled infusion pump in elderly patients undergoing ERCP

浅野 澄恵（腎・免疫・内分泌代謝内科学 客員研究員）

Deletion of Mir223 Exacerbates Lupus Nephritis by Targeting Slpr1 in Faslpr/lpr Mice

がん研究奨励賞（林原賞・山田賞）

金谷 信彦（ハーバード大学ブリガム・ウィミンズ病院）

Immune Modulation by Telomerase-Specific Oncolytic Adenovirus Synergistically Enhances Antitumor Efficacy with Anti-PD1 Antibody

森田 卓也（神戸赤十字病院 整形外科）
Clinical relevance and functional significance of cell-free microRNA-1260b expression profiles in infiltrative myxofibrosarcoma

松本 悠司（岡山医療センター 脳神経外科）
Annexin A2-STAT3-Oncostatin M receptor axis drives phenotypic and mesenchymal changes in glioblastoma

胸部・循環研究奨励賞（砂田賞）

平井 健太（小児科 医員）

Cardiosphere-derived exosomal microRNAs for myocardial repair in pediatric dilated cardiomyopathy

小田 尚廣（福山市民病院 内科）

Requirement for neuropeptide Y in the development of type 2 responses and allergen-induced airway hyperresponsiveness and inflammation

脳神経研究奨励賞（新見賞）

菊岡 亮（脳神経機構学 大学院生）

Mirtazapine exerts astrocyte-mediated dopaminergic neuroprotection

三木 知子（精神神経病態学 客員研究員）

Factors associated with development and distribution of granular/fuzzy astrocytes in neurodegenerative diseases

教育奨励賞

小崎 吉訓（医療教育センター 助教）

原田 馨太（消化器内科 助教）

令和4年4月発行の会報132号を「150周年記念号」として発行することになりました。つきましては、150周年にふさわしい思い出に残る記事等ありましたら、下記によりご投稿くださいますようお願い申し上げます。

字数：1600～2000字程度（書式は自由）

※写真等ありましたらお添えください

締切：令和4年1月末日

提出先：鶴翔会事務局（p76参照）

会 員 訃 報

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

昭23	吉 長 正 文	2020. 8
昭24	緒 方 正 名	2020. 11. 21
昭24	望 月 義 夫	2021. 3. 12
昭24	船 井 康 弘	2021. 2. 16
昭24	朝比奈 勝	2021. 6. 29
昭24専	牟 礼 剛	2021. 1
昭25専	河 田 幸 一	2021. 1. 17
昭26	松 本 外史郎	2021. 3. 28
昭29	東 徹	2021. 4. 10
昭29	奥 田 九一郎	2020. 12. 27
昭29	井 上 敏 雄	2021. 5. 24
昭29	守 田 哲 朗	2021. 9. 4
昭30	喜多嶋 康 一	2021. 3. 13
昭30	小 高 康 彦	2020. 12. 18
昭30	森 昭 胤	2021. 4. 27
昭31	上 田 健 治	2021. 3. 23
昭31	神 木 照 雄	2021. 3. 12
昭31	大 森 達 也	2021. 9. 4
昭32	大 森 弘 之	2021. 3. 3
昭32	森 下 立 昭	2021. 5. 23
昭32	赤 木 笑 入	2021. 5. 31
昭32	玉 尾 博 康	2021. 4. 17
昭33	修多羅 正 道	2021. 2. 25
昭33専	山 上 斌	2021. 5
昭34	後 藤 有 三	2021. 1. 11
昭34院	深 井 延 浩	2021. 2. 20
昭35	濱 田 日佐夫	2021. 7. 1
昭36	松 岡 健 一	2021. 3. 20
昭36	中 島 洋 一	2021. 7. 20
昭36	岡 藤 輝 夫	2021. 7. 12
昭39	村 島 房 夫	2021. 3. 19
昭39	若 林 皓	2021. 6. 28
昭41	菅 健	2021. 5. 11
昭44	上 村 致 信	2020. 12. 23
昭45	山 元 和 子	2021. 6. 26
昭48	藤 井 順 子	2020. 7
昭48	池 田 裕 政	2021. 6. 5
昭48院	渡 邊 節 生	2021. 6. 8
昭54	中 谷 充 孝	2019
昭55	北 浦 道 夫	2021. 6. 22
平 5	田 中 洋 美	2021. 8. 17
会員	佐 藤 誠 治	2021. 4. 19



クラブ報告

クラブ紹介 鹿田茶道部

部長 孫 崎 恵 美

新型コロナウイルス感染症の蔓延も2年目となり、ワクチン接種が日々行われている中ですが、鶴翔会の皆様のご健勝を心よりお祈り申し上げます。

鹿田茶道部には現在、医学科10人、保健学科15人、歯学部5人の計30人が在籍しています。週2回の活動では、裏千家の作法に則り、季節ごとの様々なお点前の稽古に励んでいます。大学から茶道を始める者が多いため、入部後は基本的な動作の練習から始めます。上級生が下級生の指導役となり学科の垣根を超え交流しながら、アットホームな雰囲気の中、日々稽古を重ねています。週に一度お稽古に合わせていただく和菓子も部員にとっての楽しみとなっています。

例年であれば、一般の方もお招きし、5月に皐月茶

会、11月学園祭において鹿田茶会を開催しております。茶会前には、お点前だけでなく、茶会において点前のサポートやお客さまの応対を担当する「半東」と呼ばれる役割の練習も行いますし、着物の着付け練習も行っています。

これらの活動を通し、普段馴染みの浅い日本文化に触れるとともに、礼儀礼節や言葉遣いなど教養を身につけることができると考えております。

新型コロナウイルス感染症の蔓延に伴い、昨年度に続き今年度も思うように活動できない状況ではあります。茶会が開催できないことはもちろん、日々の活動でも飲食の伴う活動ですので、制約が多いことは避けられません。ですが、また茶会が開催できるようになった時十分なおもてなしができるよう、代々引き継いできたものを絶やさぬよう、感染症対策に留意し活動を行っております。

皆様におかれましては大変ご多忙と存じますが、感染症が収束し以前のように茶会が開催できたあかつきには、ご予約が合えばぜひ一度茶会にいらして下さい。今後とも我々鹿田茶道部の活動を暖かく見守って頂ければと思っております。最後に改めまして、皆様のご健勝をお祈り申し上げます。



コロナ前の様子

医歯薬男子バレーボール部

主将 山 本 温 輝

鶴翔会の皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。医歯薬男子バレーボール部の主将を務めさせていただいております、医学部医学科3年の山本温輝と申します。

医歯薬男子バレーボール部は、現在医学科9名、保健学科11名（内マネージャー6名）の計20名で活動しております。週に3回の練習では、レシーブやスパイクなどのプレーに必要な技術向上のための基礎練習から、より実践に近いゲーム形式の練習などを行います。限られた時間の中で個々の技術のレベルアップは勿論、いかにチームとしての力を高められるかに重点を置いて、部員一人一人がお互いに尊重し合いながら日々活動しております。

昨年からCOVID-19の影響で、約1年半公式戦や練習試合に全く参加できなかった上に、緊急事態宣言の

発令期間には部活動自体が禁止されるなど、思うような活動ができずにいました。また、例年部員同士のコミュニケーションを深めるために行ってきた夏キャンプなどの様々なイベントも開催できていない状況です。現在は練習こそかなり通常通り行えるようになったものの、培ってきた実力を発揮する場がなかなかなく、明確な目標を設定するのが難しい中での活動となっております。しかし、このような状況下でも、部員一人一人が目的意識を持ち、プレイヤー・マネージャーともにチーム内で互いを支え合い、高め合いながら、モチベーションを保って活動しております。後期および来年度こそは、公式戦や練習試合でチームの力を発揮できる機会があることを切望し、また鹿田祭などのイベントでコミュニケーションを深める時間が再び訪れることを願いつつ、部員一同練習に励んで参ります。

最後になりますが、鶴翔会の皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げますとともに、今後とも医歯薬男子バレーボール部の活動を暖かく見守っていただければ幸いに存じます。何卒よろしくお願ひ申し上げます。



同期会だより

昭和34年卒「ねぶち会」の令和2年

昭34 瀧谷 泰博

令和2年の「ねぶち会」懇親会は、例年通り10月開催を予定していた。正月から始まったCOVID-19により6月早々に、中止を決定した。開催中止案内と一緒に、会計報告などを併せて発送したところ、数名の会員から近況報告を頂いた。夏の第二次ピーク、秋の第三次ピークにより、「Go to」と緊急事態宣言が交差する中、三密を順守する静かな生活をしてきた秋、ねぶち会会長の藤原 巍先生のご家族から訃報が届いた。ねぶち会は過去からの積立金で運用されている事情がある。この個人名義のお金を引き出すためにはいろいろな手続きが必要であった。個人名義であるが、ねぶち会が所有する流動資産で、引き出すのは個人でなく、ねぶち会が実行するなどである。個人が実行すると遺産相続となる懸念が発生する。まず、会則作りが急請されたので、瀧谷が原案を作成し、関先生がまとめ役を担当した。そして、会長は関 周司先生が就任された。会則作成により、会の運営は安定したが、これが正式に承認されるためには会員の総意が必要である。そこで、11月中旬に令和2年の経過と事情を会員に通知したところ、徳丸 実先生のご遺族から訃報が届けられた。逝去は8月26日であった。ここに藤原 巍先生と徳丸 実先生に心からお悔やみを申し上げる。

情報通知の知らせに、最初に届いた返信は四国の今治に住まれる真鍋先生で、「今年の春、四国百名山を踏破しました」という朗報である。既に、日本百名山

の頂上を征服した真鍋先生は今も健脚である。東京の古市先生から貴重な情報が届いた。我々一同は昭和34年卒業で、医師免許は翌昭和35年7月に授与された。当時の医師免許証は厚生大臣渡辺良夫と厚生省医務局長川上六馬の名前が併記されている。古市先生の医師免許証の交付は平成3年11月30日付け、医師免許は当時の厚生大臣山下徳夫から与えられた。この免許を医籍に登録したのは古市先生本人で、本人が本人を登録した医師免許証である。これは古市先生が本籍の変更届を出し忘れていたので、医務官が気を利かせて再発行した事情がある（写真1）。もう一葉は内閣総理大臣宮沢喜一（筆者の故郷、広島県選出）と副総理・外務大臣渡辺美喜男が並んだ写真である。その前で颯爽と立っているのは古市先生。1992年（平成4年）春、第123回の国会に「看護婦等の人材確保の促進に関する法律」が提出された。衆議院予算委員会で、古市健康政策局長が公明党の市川議員に明解な答弁をする風景である。並み居る議員たちを魅了したに違いない（写真2）。

大崎先生のたよりは豪壮な書である。例年なら、畳一枚の大作が展示されるが、今回はCOVID-19により紙上発表となった。2019年（令和元年）盛夏、岡山県天神文化プラザで開催された第50回玉龍会展示作品集から拝借した。作品の「鼠頭牛首」は細心と大胆の両者を併せ持ち、それを闘いの場面で瞬時に変えられる判断と間髪を入れずに行動に移す心構えである。武蔵さながらの言葉である（写真3）。

令和3年3月、関西地方の緊急事態宣言は解除されたが、新しい変異型COVID-19の流行が懸念されている。2月からファイザー社のmRNAワクチン接種が始まったが、この輸入は予想に反して遅れているので、我が国に普及するにはまだまだ時間が必要である。このワクチンとウイルスの弱毒化を期待して、我々一同が元気な姿を見る日を期待している。

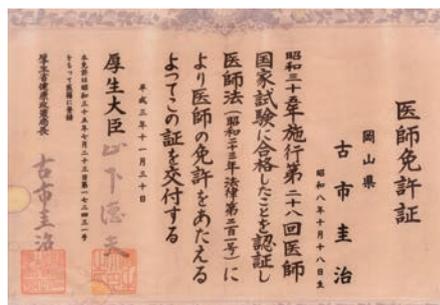


写真1 医師免許証



写真2



写真3 大崎雅峰「鼠頭牛首」

随 想

96歳老生の青春懐古

昭27専 小 河 博 之

私は昭和22年中国大連から郷里高松へ引揚げて間もなく岡山へ就学した。戦禍により医大の建造物は無残な姿を曝していた。手続きを済ませて金光町にある学生寮に入寮し、山陽本線での通学が始まった。岡山駅から清輝橋への電車は復旧していたが貧乏学生の身、鹿田迄往復歩き通した。病院前の通りは雨が降るとぬかるみで大変だった。

奨学金を得たもののアルバイトに頼るために夏休みには福島の米軍キャンプで働いた。心易くなった応召学生兵の初めて出会うネイティブイングリッシュに発音を矯正されたり、こっそりと石鹼や砂糖を手に入れるなど余得があった。闇商売の多い駅前中筋の商店街でアイスキャンデーの騒音と売声を背に看板のペンキ塗りをしたりしたほか、入院患者は寝具持参という時代とあって岡山駅迄荷物の受取り、送り出しの請け負いを自転車にリヤカーで往復し報酬を得た。汗かく私に目をとめ声を掛けて下さったり飲み水をいただくなど道すじの商店の方々、後々終生のおつきあいになったものである。

深く記憶に残る恩師も多い。殊に細菌学の木下武男先生には大層お世話になった。講義もお受けしたが、倉敷から通勤の車中で親しく御話する機会が多かったのが御縁で、下宿をお世話下さったり、拳句は先生宅の離れに居候する迄になった。且て先輩達に「内科は総論、外科は各論」と言われて古書店で「クレンペラー内科診断学」を手に入れ、机上に置いてあったのが先生の目に留まり、有志の幾人かに声を掛けてドイ

ツ語の原書の輪読会を指導していただいた。先生は学生の頃アショフの病理学書の原典で勉強したほどの方であった。

浜崎病理の那須毅助教授は、弓之町に私が下宿していた頃に、近くにお住まいで散歩の途中よくお会いした。気さくな先生は私の下宿によって雑談をして帰られることもあり、クラスで文集を作った時は従軍されていた当時の上海でのロマンチックなエピソードを寄稿して下さい。亡くなられる迄お互いに版画の年賀状を交わすなど終生親しくしていただいた。

就学後幾時もない頃、高松からの帰途、宇野駅棧橋のプラットホームを両手の鍋などの荷物の音をさせながら小走りする生理学の林香苗教授の姿を認め、手を貸して差上げた。戦火に焼け出され御家族を徳島に残しての帰りで、教授室で自炊生活をしているなど、岡山迄の車中一時間程お話が弾んだ。教室南の焼跡の野菜畑は先生のものだったと知った。

生理学助教授だった西田勇先生は期末試験の前に或る英文原書を貸して下さい指定の項目を皆で勉強しておくようにとの事だった。学生課の井上勇さんにタイプライターを借り、ガリ版刷にしてクラスに配ったこともあった。統計学が大事だと補講して下さいだったので今も役立っている。

解剖の浦良治教授は、色チョークを駆使しながら見事な図を画いての名講義をされた。出版された先生自筆の解剖図譜は芸術的でした。教わった学名のラテン語は今でも頭に残って居り、先年カルチャースクールのラテン語講座も楽しく受講できた。

倉敷に居た当時、学生無料の大原美術館には幾度となく通い、後に館長となられた学芸員の藤田慎一郎さ



昭和廿五年九月三十日 圭洋会展 天満屋屋上にて
上段左から2人目が筆者



昭和二十三年
岡山医科大学 金光寄宿舎

んに説明を受けたこともあった。この頃、鶴形商店街の小さな画材店で筆一本絵具一本と買い揃えて再び油絵を画き始めていた。この店は後に岡山の城下で中国画材という岡山随一の画材店に発展し、私は岡山を離れる迄親しくした。

昭和24年の夏、基礎医学教室の通りで空襲被害を免れた各教室風景をスケッチしていた折、後に眼科を開業される辻静男先生に声を掛けられたのが縁で美術サークルの圭洋会に入部した。幾度か天満屋の一室で会員作品の発表展覧をしたものである。偶々個展開催中だったか東郷青児画伯が見えて驚いたこともあった。部長の皮泌科根岸教授はフランス留学もされていたことから力を入れて下さっていた。圭洋会の名称は僕が名付けたのだと第一病理先輩で広島大病理学教授の玉川忠太先生から直接伺った。会員だった細菌学の金政泰弘名誉教授、勝山の近藤正美先生は同世代だったとあって長く昵懇にさせていただいた。

私共専門部最後のクラスとあってだろうか、卒業にあたって学生課長の井上勇さんがお世話下さって学部長の遠藤中節法医学教授を始め多くの御指導下さった先生方と共に舎監官舎の座敷での祝宴にクラス一同を御招きいただいたのは感激であった。

私共クラスの御別れの会には溜り場のようにしてよく世話になった衛生教室用務員の小島さんを招待し、涙を流して別れを惜しまれたのは心に残る思い出となっている。

私は更に1年間無給のインターン修練を経、敗戦の空白を挟んで漸く8年にして医師となった。

加速度的に進歩する今の医療の状況から見て、私の医師のスタートはまさに医学事始めのように思えてならない。その当時のことを綴ればいくら紙数があっても尽きない。

余命あれば記したいものである。

慶州ナザレ園慰問

公益財団法人岡山医学振興会

岡山大学名誉教授

昭36 難波正義

2002年3月、当時、岡山大学医学部の名誉教授の会の会長をされていた小倉義郎先生から、慶州ナザレ園への慰問旅行に誘われました。

慶州ナザレ園*は、朝鮮人と結婚し、第2次世界大

戦後、独り身となり、日本に帰国できない日本人女性を援助するために、クリスチャンの金龍成(1919-2003)によって1972年に設立されました。1990年ごろは、約40人が入居していたのですが、その後、高齢化が進み、2020年7月には、わずか5人の入居です。やがて歴史的役割を終えることと思いますが、その人類愛に深い感動を覚えます。

逆に、日本にも上の事情のような朝鮮女性がおられるのではないかと思うのですが、ナザレ園のような施設が国内にあるのでしょうか。

慰問団の一行は、小倉先生と先生と同級生(私より10年先輩)、私とで5人でした。旅程や慰問品などを小倉先生がおひとりで用意されました。平生は口数が少なく、私にとってはとりつき難い先生でしたが、実に世話好きで気配りの良い先生であることが分かり感銘を受けました。

旅程を見て驚きました。3月9日の早朝、岡山駅に集合、そして、下関での釜山行きフェリー出航は午後7時45分です。岡山を午後に出ても十分間に合うのではと思い、小倉先生にお聞きしたところ、各駅停車の電車で行かれるとの返事です。もし、忙しければ新幹線でフェリーに間に合えばよいとのことでしたので、私は新幹線にしました。当時、忙しかったことも事実ですが、また、先輩の先生方と終日付き合うのは少し疲れます。

夕刻、港で先輩の先生方にお会いしてお話を伺うと、広島、岩国で遊んで来られたとのこと。先輩の先生方はなんと悠長なことかと驚きました。

翌朝、午前5時過ぎ、船内で目覚めると、船は釜山の港外に停まっています。まだ、あたりは薄暗く遠方に釜山の街の灯がゆれています。入管事務所が開くまで待機です。

やがて、下船し用意された車で慶州に向かい、1時間半ほどで、ナザレ園に到着しました。2階建ての施設は堂々としていて、立派で、また、広さも十分です。

広間に集まった入居者と、日本の話をし、日本の古い歌を一緒に歌い、日本のビデオを見せ、そして、慰問品を渡し、昼食を一緒に食べ、皆様に見送られ、ナザレ園を後にしました。

入居されている人たちは、戦争の悲惨さを生き抜いてこられたに違いありませんが、皆さんの表情は明るく、また、小倉先生達とはほぼ同世代のせい、話がはずみ、戦争の暗い影を感じませんでした。

午後、新羅の旧都、慶州にある世界遺産の仏国寺を訪ねたのち、古墳群、石窟庵、大陵苑、天馬塚をめぐり、夕方、釜山に帰り、フェリーです。

翌朝、下関に着き、私は新幹線で岡山に帰りましたが、先輩の先生方は各駅停車の在来線でした。あとでお聞きすると、小倉に遊びによって夕方、岡山に帰られたとのこと。国内の旅は、まことにゆっくりのんびりで、韓国の旅は疾風が吹き抜けるようなものでした。

岡山-下関の往復を各駅停車の在来線で、なんとこのんびりした旅だと、当時、私は思いました。でも、長い人生の中ではこのような悠然とした時間も必要ではないかと、いま、私は、「慶州への旅」を懐かしく思い出しています。

ゆったりした時間があつたからこそ、慶州ナザレ園の慰問を思いつき、船中2泊で、当地のホテル代を節約し、慶州を要領よく観光して帰ることができるプランを思いつくことができたのではないかと思います。

大学では、研究、研究と忙しいのですが、すこしは、ゆったりぼんやりした時間がある方が、よいアイデアが出るかも知れません。

*慶州ナザレ園については、ノンフィクション作家上坂冬子の作品がある。「慶州ナザレ園 忘れられた日本人妻たち」、中央公論社、1982

妹尾前鶴翔会事務局長 お疲れ様でした

昭40 坪 井 修 平

感 謝

妹尾行恭氏は鶴翔会事務局長として10年間務め、2021年6月30日、退職されました。昭和40年卒クラス会四〇会は大変お世話になり、心より厚く御礼申し上げます。

- 2015年3月、私達昭和40年卒クラス四〇会は、岡山で2日間に亘って卒後50周年記念同窓会を開催し、その一環として「森田学長と医学生生の講演・ディスカッション（於生化学教室）」「医学部・大学病院施設見学」「津島キャンパス視察」が行われました。四〇会事務局（田中・石津・奥田・小林・坪井）の1員で暇人の私は、鶴翔会事務局に参上して、下見や学長、各施設長との折衝をお願いしました。

- 四〇会一同は“我々の今日あるは母校のお蔭”と感

謝し、卒後40周年記念同窓会では岡山医学振興会に、この度は岡山大学医学部創立150周年記念ルネッサンス基金・ミャンマー医療人育成団体・ネパール医療人育成団体・ベトナム先天性心疾患児に対する遠隔医療チーム等へ寄付させて頂きました。その手続き等について助言をお願いしました。

- 記念アルバム・近況報告集・亡友追悼集の作成の際は、鶴翔会に寄贈された他学年の記念誌を供覧して頂き、とても参考になりました。

- 個人的にもご厚意に感謝しています。

近年、本誌に学会会員の記事が減少しているため「枯れ木も山の賑わい」と取って駄文を投稿し、学会員諸氏にも寄稿を勧めました。いつも間髪を容れず応諾の上、的確な助言を頂きました。

また、卒後数年で渡米、その後セントルイス大学医学部の主任教授を務めた、愛校心では人後に落ちない級友のI君が帰国の都度、アメリカの大学教育や同窓会、同窓会報を参考にしながら、鶴翔会や鶴翔会報、学生教育、卒後教育について建設的意見を進言するために、会長と会報編集幹事に面談を申し入れました。私も数回I君に同行しましたが、その段取りを妹尾局長をお願いしたところ、「遠いアメリカからお越しなので…」とご配慮を頂きました。

前述の寄付行為も、アメリカの大学基金の実態や日米の桁違いの格差を知るI君の発案が端緒になりました。因みに、2018年のアメリカの大学4600校の寄付金総額は5兆円（卒業生からは1/4、他は卒業生以外の個人や企業等から）、トップのハーバード大1600億円（基金の運用資産総額は4兆円）、次のスタンフォード大1200億円、3位コロンビア大1100億円…。日本の大学800校の総額は1300億円（アメリカの1/40）、トップの東大110億円、次が京大100億円、3位阪大53億円…。6位広大34億円…。岡大10位23億円…。徳大14位17億円、神大19位14億円。私立大トップは9位の創価大25億円、次いで慶大12位21億円、早大は28位12億円…。

- 2021年6月、由緒ある生化学教室が改装され、紫色の優雅な、700余の座席の裏面にルネッサンス基金寄付者の銘板が貼付されたことが耳に入り、早速視察させて頂きました（写真1、2）。

「明日、この教室で岡山医学会主催新任教授講演会が開催されます」との局長の一言で、私はCOVID-19を警戒してオンラインで視聴しました。新進気鋭の新



写真1 生まれ変わった生化学教室

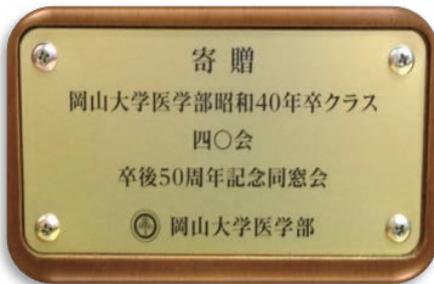


写真2 銘板

任教授が次々に登壇し、澁漑とした意気込みで自己紹介、研究テーマ、抱負を述べられ、大いなる期待を抱きました。

近年、地方大学にもノーベル賞受賞者が輩出しています。かつて医学校は「東の東京、西の岡山」といわれ、150年の歴史を誇るわが母校からも、1911年ノーベル化学賞、1912・1913年ノーベル生理学医学賞の候補に推されながら諸般の事情により金的を逸した、明28（1895）卒・世界初の抗菌薬サルバルサン606号発見者秦佐八郎先生の無念を晴らす研究者の登場を熱望してやみません。

功 績

10年間、事務局長として二人のスタッフと共に、鶴翔会・鶴翔会報・岡山医学会・関連病院長会議等のお世話や地方支部総会で母校の現状報告をなさり、各会の発展に大変寄与され、心から感謝申し上げます。

誠にお疲れ様でした。

今後とも 豊富な経験を生かして一層の社会貢献をされ 心身を鍛えて 健康長寿とPPKを全うされますように 心からお祈り申し上げます。

（本稿を的確に推敲して頂いた四〇会事務局 石津日出雄・奥田博之・小林完治の諸氏に心より厚く御礼申し上げます。）

目医者をつぶやき「連携」

昭60 松尾俊彦

コロナ禍が長引き、治療現場や保健所の医師、看護師、保健師の皆様はとて苦勞されていて、頭が下がります。目医者である私は大して役立たないのですが、せめてできることをと思い、岡山県や岡山大学の大規模コロナワクチン接種の手伝いに行っております。もともと眼科病棟があった岡山大学病院の東5階病棟は、昨年よりCOVID-19患者専用になり、立ち入ることもできなくなっています。岡山大学津島キャンパスの職域大規模接種会場は東5階勤務の看護師が交替で担当しているため、懐かしくも嬉しい邂逅となりました。

さて1985年卒の私は、今年で60歳になりました。よくここまで生きてこれたものだという思いと、漠然とした有難さ、感謝のような気持ちを感じます。この年齢になっても岡山大学病院で診療を続けていられるのも恵まれたことだと思います。同期生も色々な場で活躍していますが、いわゆる「定年」の迎え方も、勤務先によってさまざまな形があるようです。例えば、60歳定年制で退職金をもらい一旦退職、再雇用で迎えられるというケース。もちろんこれは、本人が優秀な医師であるという最たる理由があるからでしょう。これまで自分の年齢を自覚することもなかったのですが、周りの動向を眺めると、嫌でも意識せざるを得ない年代になったのだと悟られます。

目医者として年数を重ねますと、自分の領域での臨床経験はもちろんですが、院内他科との連携、あるいは県内、他地域の病院と連携しながら治療する機会もずいぶんと積まれてきていることを実感します。私は、幸か不幸か移動することなく、ほぼ定点診療をしていますので、長期にわたって経過を診ることができる環境にあります。最近も他院との連携で、20年前に眼科を受診された患者様の病理履歴をたどり、現況を考察する機会を得ました。カルテや病理標本がきちんと保存されていることに改めて感謝しつつ、それをもとに他院他科の先生方と連携できたこと、何より患者様が完全緩解されたことが大きな喜びでした。長期経過を追える環境にある私は、その過程で経験したことを伝える義務もあると考えています。嬉しいことに今回のケースは、他院にいる同級生との共著論文という形で発表できそうです。私が眼科の中でもまれな疾患である「ぶどう膜炎」「眼腫瘍」「小児眼科」を担当してい

ることもあり、色々な病院や診療所からご紹介をいただき、診療する機会を得ていますことは大変ありがたいと思います。

私のこんな小さな連携だけでなく、長期化、深刻化しているコロナ禍の影響もあって、医療施設の連携は欠くことのできない状況になっています。岡山大学病院、近隣の倉敷中央病院、川崎医科大学附属病院とも、感染対策等で県内の病院と緊密な連携体制ができつつあると聞いております。コロナ感染対策に限らず医療施設の連携は、患者様にとって適切な治療がより身近なものになり、利便性が向上していく端緒となるように思います。

感染対策、緩和ケア、発達障害対応などの分野では、医師だけでなく看護師、薬剤師、ソーシャルワーカーなど多職種連携も活発です。異なる立場からの視点を知るという経験には色々な気づきがあり、学ぶことが多いと感じます。医療の世界は広いのだと、老目医者も日々思いを新たにしております。引き続きよろしくお願いたします。



新聞より

岡山大学医学部・岡山大学病院並びに鶴翔会会員に係る新聞記事など（2021.3.1～2021.9.1）

掲載年月日	媒体	見出し		備考	
2021/ 3/ 4	山陽新聞	26 ICT教育推進へ新組織	県議会 国構想始動に対応	小林孝一郎（平14）	
2021/ 3/ 5	山陽新聞	7 ストレッチャー1台寄贈	陰圧ドーム付き	岡山大病院	
2021/ 3/ 6	山陽新聞	17 妊婦PCR検査 不安軽減	擬陽性・偽陰性のリスクも	田淵和久（昭46）	
		31 岡山で優先接種開始	コロナワクチン 医療従事者8万人対象	岡山大病院、倉敷中央病院、津山中央病院	
2021/ 3/ 7	山陽新聞	28 江橋賞に西堀教授 日本薬理学会	県内初 脳疾患治療の研究評価	西堀正洋（岡山大薬理学）	
2021/ 3/ 9	山陽新聞	28 ワクチン優先接種開始	市民病院の医師、看護師ら	岡山市市民病院	
2021/ 3/12	山陽新聞	30 カンボジア乳幼児退院	2人肝臓がん手術	岡山医療センター	
2021/ 3/13	読売新聞	29 県内コロナ まもなく1年再び増加傾向	倦怠感や脱毛 症状多岐に	大塚文男（岡山大総合内科学）	
	山陽新聞	27 「医療連携法人」申請 県内初 脳・心疾患救急充実へ		十全会と幸義会 心臓病センター榊原病院、岡山東部脳神経外科病院	
2021/ 3/17	読売新聞	22 病院の実力 血管の病気治療	腹部大動脈瘤 増える血管内治療	人工血管置換術も選択肢 神戸赤十字、心臓病セ榊原、倉敷中央、広島市民、福山市民、香川県中、近森、高知医療セ	
	山陽新聞 MEDICA	15 新型コロナ 岡山 患者初確認から1年	生活にどう影響/得られた教訓は	分断、差別もたらず 他人事と思わない 江澤和彦（平9院） 藤田浩二（平19）	
		16 働き盛りの人への健康講座	乳がんと甲状腺疾患 見た目もきれいな治療を		河合 央（平18院）
2021/ 3/20	読売新聞	33 ワクチン接種 安心を		楢本良夫（旧教員）	
	山陽新聞	7 岡山市役所筋に10階建てビル 23日着工		橋本俊明（昭48）	
2021/ 3/21	読売新聞	29 病院の実力 岡山編 血管の病気治療	補強や迂回で血流改善	岡山大病院、心臓病セ榊原、倉敷中央、津山中央、岡山市民、岡山労災、広島市民、福山市民	
2021/ 3/22	山陽新聞	1 コロナ岡山県内初確認から	「手術中止・延期」37%	救急受け入れ断念も	松山正春（昭44）
		5 1年	再拡大警戒 予防策徹底を		則安俊昭（昭61）
		7 コロナ 正しく恐れて	感染予防と心身の健康保持へ助言	運動やつながり大切	神田秀幸（岡山大公衆衛生学）
		21 コロナ県内初確認1年 苦境 きっと力に	第3波 総出で患者対応		時岡史明（平15）
2021/ 3/23	山陽新聞	28 笠岡市と岡山大 医師確保へ協定	市の就学資金制度活用	岡山大医学部、研究科、病院、笠岡市民病院	
2021/ 3/25	山陽新聞	28 理事、副学長ら新任 岡山大		前田嘉信（岡山大血液・腫瘍・呼吸器内科学）、那須保友（岡山大泌尿器病態学）、高橋香代（昭47）、三村由香里（平3）	
2021/ 3/28	山陽新聞	33 山陽新聞を読んで	ワクチン接種一人でも多く	松山正春（昭44）	
2021/ 3/31	山陽新聞	30 岡山大が笠岡市と協定	医師不足解消に協力	岡山大医学部	
		32 岡山大退任理事に聞く	コロナ重症病床増床	金澤 右（岡山大学病院長）	
2021/ 4/ 6	山陽新聞	27 春休み明け 子どもの自殺注意	普段と違ったら悩み聞いて	太田順一郎（昭63）	
2021/ 4/ 8	山陽新聞	26 県の新任幹部に聞く	地域の病床確保、病院間連携構築	則安俊昭（昭61）	
2021/ 4/ 9	読売新聞	29 コロナ患者に生体肺移植	家族から エクモ使用の女性に	京大、世界初	
	山陽新聞	26 コロナ肺障害生体移植	世界初 京大病院	伊達洋至（昭59）	

掲載年月日	媒体		見出し		備考		
2021/ 4/19	山陽新聞 MEDICA	13	病気があっても前向きに生活	一般向け医療書籍7冊出版		小林直哉(昭62)	
		15	さらに患者さんに寄り添うやさしい医療	尿路結石		石戸則孝(昭53)	
		16	腰や臀部の痛み緩和 字が書きづらい 箸がうまく持てない	腰椎にカテーテル挿入、癒着はがす低侵襲治療を実施 手の震え症状改善	新たな超音波治療導入	中西一夫(会員) 岡山旭東病院	
2021/ 4/20	山陽新聞	27	最適投薬量 AI判断	「腎性貧血」の透析患者治療	システム開発 精度9割超 国の承認後導入	大原利章(平23院)	
2021/ 4/21	読売新聞	17	病院の実力 婦人科のがん治療	婦人科がん 30~40代も多い	妊娠の可能性残す治療法検討も	岡山大病院、姫路赤十字、倉敷成人病七、倉敷中央、広島市民、福山医療セ、香川労災、四国がんセ、高知医療セ	
	山陽新聞	6	インタビュー 創業100年、今後の戦略は	医療器材販売 最大手に	医工連携事業も注力	前島洋平(平3)	
2021/ 4/22	山陽新聞	26	部、サークル 4大学禁止	県内、コロナ「第4波」の様相		岡山大	
2021/ 4/23	山陽新聞	26	今月から保険診療	膀胱など腫瘍切除ロボ手術		岡山大病院	
2021/ 4/25	読売新聞	25	病院の実力 岡山編 婦人科のがん治療	早期には腹腔鏡手術も		岡山大病院、倉敷成人病セ、倉敷中央、岡山済生会、津山中央、岡山医療セ、岡山市民、城島市民、福山医療セ、福山市民、	
2021/ 4/27	読売新聞	23	ワクチン候補者確保苦慮	県、転用にストップ 「廃棄につながる」		薬師寺慈恵病院	
		13	コロナ後遺症増加の懸念	感染から3カ月後も疲労、息切れ、体の痛み	炎症反応やストレス 要因複数	大塚文男(岡山大総合内科)	
2021/ 5/ 1	山陽新聞	25	医療ひっ迫に危機感	県内病床使用率50%超 変異株拡大	他疾患入院延期も	岡山市民病院	
2021/ 5/ 8	山陽新聞	25	確実に接種を 県医師会長呼びかけ			松山正春(昭44)	
2021/ 5/11	山陽新聞	26	子どもと家族支援	小児がんで岡山大病院に入院		岡山大病院	
		27	部活や帰省自粛 大学に知事要請 電話集中 つながりにくく 高齢者ワクチン予約スタート	大学コンソーシアム岡山臨時会議 職員対応に追われる		槇野博史(岡山大学長) 岡山済生会外来センター病院	
2021/ 5/13	山陽新聞	24	変異株 危機感共有を	完成抑制には「人流減」		松岡宏明(昭60)	
		27	医療崩壊阻止 正念場 ドクターカー購入支援を	昨春上回る強い措置 19日からCF 救急、地域医療を強化		松山正春(昭44) 心臓病センター榊原病院	
2021/ 5/14	山陽新聞	27	看護師奮闘「患者の力に」	手袋3重、ガウン汗だく 病床9割埋まり危機的	岡山感染「ステージ4」市民病院レポ	岡山市民病院	
2021/ 5/15	山陽新聞	28	学術研究8人助成 山陽放送財団			浅田 騰(平15)	
2021/ 5/17	山陽新聞 MEDICA	11	地域の救急医療充実を	連携推進法人立ち上げ 岡山東部脳神経外科病院 心臓病センター榊原病院		榊原 敬(会員)、滝澤貴昭(昭55)	
		12	働き盛りの人への健康講座 Part 3	ご存知でしょうか? 国民運動計画「健やか親子21」		中務陽子(平24院)	
		13	ハートチームの総合力で ~最先端の治療から在宅復帰まで~		最近の冠動脈ステント治療		廣畑 敦(平8)
			さらに患者さんに寄り添うやさしい医療	肺がん治療			林 達朗(平26院)

掲載年月日	媒体	見出し			備考	
2021/ 5/19	読売新聞	17	病院の実力 食道がんの治療	食道がん 胸腔鏡手術7割 肋骨切らず術後の痛み軽減	岡山大病院、姫路赤十字、倉敷中央、岡山済生会、広島市民、福山市民、四国がん七、高知医療七	
	山陽新聞	28	コロナ緊急事態宣言 感染抑止へのアクション	往診 仕組みづくり検討	松山正春（昭44）	
2021/ 5/21	山陽新聞	25	県精神科医療センターに入院待機施設	医師ら5人で対応 5～10床確保	岡山県精神科医療センター	
		26	コロナ緊急事態宣言 感染抑止へのアクション	家庭でもマスク着用を	則安俊昭（昭61）	
2021/ 5/22	山陽新聞	1	岡山医療 限界近く	コロナ病床利用率84% 重傷者用69%	人手も不足、他の患者後回し 岡山大病院、岡山市民、倉敷中央、永井 敦（昭55）	
		32	岡山大病院 コロナ後遺症 外来開設3カ月	23人受診 倦怠感最多 心身とも不調軽減図る	臭覚、味覚障害も 複数症状訴え 岡山大病院 大塚文男（岡山大病院総合内科・総合診療科）	
2021/ 5/23	読売新聞	25	病院の実力 岡山編 食道がんの治療	早期なら内視鏡治療も	岡山大病院、倉敷中央、岡山済生会、津山中央、広島市民、福山市民	
	山陽新聞	25	山陽新聞を読んで	情報とともに“術”示して	松山正春（昭44）	
2021/ 5/25	山陽新聞	22	高齢者接種滑り出し順調		金川病院	
		16, 17	健康フェスタ in Okayama	コロナ就職へ英知を	本田知之（岡山大病原ウイルス学）、萩谷英大（岡山大病院総合内科・総合診療科）、松山正春（昭44）、松岡宏明（昭60）、頼藤貴志（岡山大疫学・衛生学）、横野博史（岡山大学長）	
2021/ 5/28	山陽新聞	24	ワクチンの効果実感	密回避へ対策徹底を	今城健二（昭58）	
2021/ 6/ 4	山陽新聞	13	変異株から子ども守って	家族間の感染増 基本対策の徹底、心のケアも	三村由香里（岡山大教育学部長）	
2021/ 6/ 6	山陽新聞	29	ワクチン接種 日数や時間増		岡山済生会、岡山協立、まび記念	
2021/ 6/ 7	山陽新聞 MEDICA	11	成人8人に一人慢性腎臓病（CKD） 医療の現状 専門家に聞く 心血管疾患発症のリスク	研究進み機能回復も	柏原直樹（昭57）、丸山啓輔（平12院）	
2021/ 6/11	山陽新聞	25	医師ら異動、接種効率化	1時間で65人 高齢者座って待機	南岡山医療センター	
2021/ 6/13	山陽新聞	6	健康フェスタ in Okayama	第1回 がん	がん、切らずに治せますか？	加地充昌（昭58）、平木隆夫（岡山大放射線医学）
					前立腺がんの病理診断と治療	吉野 正（岡山大腫瘍病理）、那須保友（岡山大理事・副学長）
2021/ 6/16	読売新聞	17	病院の実力 関節リウマチの治療	関節リウマチ 薬で進行抑制	専門に技術必要 専門医の受診を 岡山大病院、姫路赤十字、倉敷中央、倉敷成人病七、岡山済生会、倉敷スイートホスピタル、近森	
2021/ 6/18	山陽新聞	24	集団接種スタート	医療従事者ら対象	健康づくりセンター	
2021/ 6/19	読売新聞	27	接種券64歳以下月内送付へ	19市町村 一般高齢者向け順調	700の医療機関個別に協力 諸国眞太郎（昭56）	
2021/ 6/20	読売新聞	21	病院の実力 岡山編 関節リウマチの治療	遅漏の選択肢多く	岡山大病院、倉敷中央、倉敷成人病七、岡山済生会、倉敷スイートホスピタル	
				患者3割に肺の病気	守田吉孝（平3）	
2021/ 6/21	山陽新聞 MEDICA	13	ルーツを語る チクバ外科・胃腸科・肛門科病院	専門性高め地域に貢献	竹馬 浩（昭35）、瀧上隆夫（昭53）	
		14	肝臓病の治療	最新の動向 肝臓病のパラダイムシフト	藤岡真一（平1）	
		16	よりよくいきる処方箋 川崎学園特別講義	肺がん	中田昌男（昭60）	

掲載年月日	媒体	見 出 し			備 考	
2021/ 6/23	山陽新聞	28	新型コロナ 県議会 論戦	接種のスピードアップ	柔軟な市町村支援策を	小林孝一郎 (平12)
			医療用手袋30万組贈る	県医師会にタイオン奨学基金		松山正春 (昭44)
2021/ 6/27	山陽新聞	27	ワクチンの効果実感副反応学ぶ	県難病団体連絡協議会主催フォーラム	国立病院機構岡山医療センター脳神経内科	真邊泰宏 (平11院)
2021/ 6/28	山陽新聞	19	私の宝 鶴翔会 同窓会報	「岡山大旧臨床棟文化財登録願う」	山陽新聞 ちまた欄投稿文を会報誌に掲載	津山市 片山敦子さん投稿
2021/ 6/29	山陽新聞	24	12～15歳のワクチン 7月31日から予約開始	岡山市ワクチン接種日程公表		
2021/ 6/30	山陽新聞	31	岡山大 7月9日からワクチン接種開始	近隣大学含む1.2万人対象	津島キャンパスで実施予定	
2021/ 7/ 4	山陽新聞	14	健康フェスタ in Okayama	認知症予防の生活習慣	動脈硬化と認知症 糖尿病と認知症の関係	中村一文 (岡山大循環器内科学)、四方賢一 (岡山大病院新医療研究開発センター)、森實祐基 (岡山大眼科学)、宮本 聡 (岡山大病院新医療研究開発センター)、片山晶博 (平16)
2021/ 7/ 5	山陽新聞 MEDICA	12	専門病院の力～地域医療を支える～	これがサイバーナイフだ!		津野和幸 (昭60)
		13	さらに患者さんに寄り添うやさしい医療	外反母趾		大澤誠也 (平5)
		14	ドクターカー安定運用を	緊急を要する疾患 24時間365日対応		津島義正 (昭53)
2021/ 7/ 5	山陽新聞	22	松岡良明賞決定	乳がん治療で実績		土井原博義 (岡山大病院乳腺・内分泌外科)
2021/ 7/ 6	山陽新聞	26	岡山大でワクチン接種始まる	9日からの接種に先駆けて約100人に先行接種		那須保友 (岡山大理事・副学長)
2021/ 7/19	山陽新聞 MEDICA	16	よりよくいきる処方箋 川崎学園特別講義	緩和ケア		瀧川奈義夫 (昭63)
2021/ 7/25	山陽新聞	14	健康フェスタ in Okayama	肩が痛いときには? 腰痛で困ったら?	肩が痛いとき 膝が痛いとき 股関節が痛いとき スポーツからくる腰痛 腰痛と病気	西田圭一郎 (岡山大整形外科)、阿部信寛 (平6院)、三谷 茂 (平5院)、千田益生 (岡山大病院総合リハビリテーション部)、尾崎敏文 (岡山大学整形外科)
2021/ 7/25	山陽新聞	28	「医道」半世紀 歩み回顧	著書「医道」出版		青山興司 (昭43)
2021/ 8/ 5	山陽新聞	28	患者268人の情報流出	医師が偽サイト詐欺被害		岡山大病院
2021/ 8/13	山陽新聞	20	モデルナ製ワクチン 第1回目副反応	岡山大調査中間報告 (教職員、学生を対象に実施)	頼藤貴志教授 (疫学・衛生学) が分析	
2021/ 8/17	読売新聞	19	医療ルネサンス コロナ後遺症	症状多様 生活の質低下も		大塚文男 (岡山大総合内科学)
2021/ 8/18	山陽新聞 MEDICA	15	専門病院の力 地域医療を支える	脳卒中の予防		河田幸枝 (平3)
2021/ 8/22	読売新聞	29	病院の実力 甲状腺の病気	主な医療機関の治療実績 岡山編2020年		岡山大病院、倉敷中央、岡山市立市民、川崎医大、岡山医療センター
2021/ 8/22	山陽新聞	6	備中力 くらしき力 地域を語る	倉敷へいせい病院 新救急棟竣工		高尾聡一郎 (平10)
2021/ 8/24	読売新聞	1	医学部定員に感染症科枠	救急科も 専門医を育成	政府23年度にも適用	
2021/ 9/ 1	山陽新聞	36	自宅療養者診療に助言	開業医向けガイド本作成	コロナ第5波受け県医師会	松山正春 (昭44)
2021/ 9/ 1	山陽新聞	36	TAM阻害薬 骨肉腫を抑制	マウス実験で確認 新たな治療法期待		藤原智洋 (岡山大整形外科)

【お断り】媒体に偏りがあり、また、見落としている記事もあるかと思われませんが、何卒ご容赦ください。鶴翔会会員の先生方におかれましては、岡大医学部・岡大病院・鶴翔会会員に関する新聞・雑誌の記事の情報をお寄せいただければ幸いです。

海外だより

サンフランシスコ便り ～2人のリーダー～

昭52 佐野俊二

岡山大学医学同窓会の皆様、ご無沙汰しています。皆様お元気ですか。

私は1993年（平成5年）岡山大学心臓血管外科教授になり、2016年11月末に退官しました。そして2016年12月よりカリフォルニア大学サンフランシスコ校（University of California San Francisco : UCSF）で小児胸部心臓外科教授として働いています。岡山大学では心臓血管外科教授として24年間という長い年月を戴いたので、新設された教室での教育、研究も基礎作りがある程度できましたし、臨床の教室として次世代の心臓血管外科医の育成、また関連施設の充実などもある程度推し進めることが出来ました。私を若くして教授にして頂いた教授の先生方や、岡山大学医学同窓会の皆様に感謝する次第です。岡山大学を退官しアメリカに来て、振り返って思う事は、心臓血管外科医を志して入局した若い先生たちの可能性を私は十分引き出してあげられたのだろうか、可能性を引き出してあげられたのは、ほんの一握りの人達ではなかったのではないかという反省です。今更ながら教育者としての自分の未熟さを感じずにはいられません。幸い後を継いでくれた笠原真悟教授が教室をさらに発展させてくれ、若い人達が逞しく育っているのを見るにつけ安心し、また大変頼もしく思っています。心臓血管外科が旧第2外科から独立し、2施設で出発した関連施設を20施設以上に拡大出来たのも、岡山大学医学同窓の先生方のサポート、協力のお陰であり改めて感謝申し上げます。

さて2020年は世界中がCorona Virus (COVID-19)にかき回された1年でした。私が働いているUCSFでも3月から予定手術は中止され、緊急手術のみが可能となり、カンファレンスは全てZoomカンファレンスになりました。7月からは予定手術も可能になりましたが、カンファレンスは未だにZoomです。各研究室も人員制限されました。2021年になって、状況は改善してきましたが、研究は予定より大幅に遅れてしまいました。またサンフランシスコでは2021年4～6月に

は一日10～20人前後に減少していた新規感染者が、インド型変異株（デルタ変異株）が急速に入ってきたせいで、7月からは一日200人前後にまで増加してきました。日本でも6月頃には全国で1,500人前後に減少していた新規感染者が7月に入り急増し、日本全体では新規感染者は一日20,000人を超えるようになりました。その多くはデルタ変異株感染であり、サンフランシスコやアメリカと同じような傾向をたどっているようです。2021年6月までは新規感染者は中四国地方では非常に少なかったのが7月から岡山県でも一日200人以上に急増し、遂に岡山県、広島県に非常事態宣言が出される事態となった事を知り驚きました。こちらに居ても日本での新規感染者の急増、医療崩壊のニュース、またワクチン接種がなかなか進まないなどの報道を見るにつけ、医療関係者や病院の方々の大変さ、苦勞、苦悩をひしひしと感じます。特に岡山大学医学部の同窓の皆様、病院や医療関係者には大変な負担がかかっているのではないかと思います。

2021年8月29日現在、サンフランシスコ（市内の人口約100万）の感染者は48,850人、死亡者581人です。カリフォルニア州の感染者442万人、死亡者65,746人、アメリカ全体の感染者3,887万人、死亡者63.7万人に比べ極端に少ない数字です。またサンフランシスコ湾岸沿い（人口約800万人）の新規感染者は1日平均150人前後であり、サンフランシスコは全米の大都市の中では一番COVID-19感染者が少ない都市、地域の1つと思います。それには理由があります。理由の1つは初動の速さです。まだ市内に感染者が出ていない2月25日に市長のLondon Breedは全米に先駆けて非常事態宣言を出しました。さらに3月16日、市内の感染者が40人に増加した時、やはり全米に先駆けて外出禁止令（Shelter-in-Place）を出しました。スーパーマーケット、病院、薬局、銀行など生活に必要なところ以外は閉鎖し、職を失うレストランや企業などの従業員にはサンフランシスコ市が休業補償として5億円を用意、一人最低週680ドル（約72,000円）の補償をしました。同時に1万人以上いるホームレスの人達に簡易ホームやホテルの一部を用意し、暖かい食事を与え、隔離しました。ホームレスの人達がクラスターになる可能性が一番高くこの人たちが感染し始めるとニューヨークと同じように悲惨な状態になります。また学童児には休校になっても毎日朝食、昼食を用意しました。親か知り合いの人が取りに行っても身分証明など無しで、またこの学校に通つていようと関係なく近くの学校で受け取れました。この45歳の女性市長は“市民が飢えで亡くなることは私の責任で絶対させない”とまで言

い切ったのです。初動が遅れたニューヨークとは感染者数、死亡者数などで雲泥の差が出ました。リーダーの決断、能力の高さでこれ程までに違いが出るのかと感じざるを得ませんでした。もう1つはサンフランシスコ市の住民の意識の高さです。サンフランシスコの住民の平均年収は1,200万円以上で、多くはシリコンバレーなどのIT企業で働くホワイトカラーです。ですから多くの人々がマスクをし、Social distanceを守りました。また私の働いているUCSFも早くから病院の全科が協力し、外科系は予定手術中止、緊急手術のみが許可され、UCSFはICU全体の中から40床（2病院で合わせて80床）を重症感染者の収容の為に2月末から確保したのです。またマスク、ガウン、フェイスシールド、人工呼吸器などを救急、ICUなど第1線で働く人達の為にいち早く確保しました。

この様な初動の速さと、人々や医療関係者の協力があったからこそ、アメリカでは珍しく医療崩壊も全く起こさず、感染者数、死亡者数も少なかったのではないかと思います。しかし今年の5～6月には1日10人前後に抑えられていた新規感染者が7月から急激に増加し、8月末には1日150～200人前後に達しています。日本と同じようにデルタ株がそのほとんどを占めています。ただしサンフランシスコ市のワクチン接種率が66%を超えているせいか、新規死亡者やICU管理が必要な重症者は昨年に比べ非常に少ないようです。これを見ても、日本でも早くワクチン接種が進むことを願っています。

次に私の働いているUCSFについてお話ししようと思います。

サンフランシスコ湾岸沿い（Bay area）には3つの超有名大学があります。サンフランシスコから車で30分程南のPalo Altoにあるスタンフォード大学（Stanford University）、サンフランシスコ湾の東側のオークランド市にあるカリフォルニア大学バークレー校（University of California, Berkeley）とサンフランシスコ市内にあるUCSF（図1、2、3）です。1868



図1. UCSF Parnassus campus（本部）

年にカリフォルニア州立大学として最初に出来た大学がUC Berkeleyです。UCSFにある医学系以外の学部があります。UCSFは1873年に創設されたカリフォルニア州立大学で、医学部、歯学部、薬学部、看護学部の4部からなっています。UC BerkeleyとUCSFの関係は岡山大学の津島（UC Berkeley）と鹿田（UCSF）といった感じでしょうか。UC Berkeleyはノーベル賞受賞者68名（在籍していた人を含めれば108名以上、昨年はCRISPR-cas9のJennifer A. Doudna教授がノーベル化学賞、経済学賞のRobert Butler Wilson, Jr. 教授もUC Berkeley准教授からStanford教授になった人です。）、UCSFは6名のノーベル賞受賞者を出している名門大学です。またUC BerkeleyはU.S. News & World Reportの世界大学ランキング（2021 Best Global Universities Rankings）では世界第4位（同ランキング東京大学73位、京都大学125位）、Times Higher Education World University Rankings 2021でも世界第7位に評価されています。UCSFは大学院大学なので、この大学ランキングには入っていませんが、UCSFにはUC Berkeley卒業生が最も多く入ってきますし、Doudna教授はUCSFにも研究室を持っています。

US NewsによるとUCSFは世界医学部ランキングで8位（全米5位）です（表1）。UCSFは新生児科医であるSam Hawgood（図4）が総長になった2014年以降、大学の収益は50%アップしています。NIH（日本での文部科学省、厚生労働省研究費）からの研究費は686億円で全米3位、公立大学では14年連続1位です。その中で医学部：602億円（全米1位、9年連続1位）、歯学部：26億円（全米1位）、薬学部：41億円（全米1位）、看護部：12億円（全米3位）です（表2）。

また民間からの寄付も非常に多く、全米1位の寄付金を集めています（表3）。

2015年には私の居る最も新しいMission Bayキャンパス（図2、3：鹿田の約3倍の広さがあります）が

表1. Best Medical School Ranking 2021 (US News)

# 1	ハーバード大学
# 2	オックスフォード大学
# 3	ケンブリッジ大学
# 4	ジョン・ホプキンス大学
# 5	スタンフォード大学
# 6	インペリアルカレッジロンドン
# 7	ペンシルバニア大学 (Perelman)
# 8	カリフォルニア大学サンフランシスコ校
# 9	カロリンスカ研究所
# 10	カリフォルニア大学ロサンゼルス校

オープンしましたが、私がこちらに来た2017年以降だけでもcancer, neuroscience, cardiovascular など5つの研究施設が建っており、更に2施設を建築中です。また2030年までに本部のあるParnassusキャンパスは500億円以上をかけて再開発されることになっていま



図2. UCSF Mission Bay Campus ICUより各研究施設、市中心部を望む

表2 NIH基金獲得(2020年)(Annual rankings of NIH funding are based on the most current government data as compiled by the Blue Ridge Institute for Medical Research.) <https://www.ucsf.edu/news/2020/04>

<p>SCHOOL OF MEDICINE</p> <p>1. UC San Francisco: \$601,764,262</p> <p>2. UCLA: \$590,984,767</p> <p>3. Johns Hopkins University: \$533,502,805</p> <p>4. Yale University: \$485,771,160</p> <p>5. Columbia University: \$468,381,417</p>
<p>SCHOOL OF NURSING</p> <p>1. Johns Hopkins University: \$13,181,413</p> <p>2. University of Pennsylvania: \$12,891,914</p> <p>3. UC San Francisco: \$11,468,876</p> <p>4. Columbia University Health Sciences: \$9,929,827</p> <p>5. Emory University: \$9,291,373</p>
<p>SCHOOL OF PHARMACY</p> <p>1. UC San Francisco: \$40,905,190</p> <p>2. University of Florida: \$19,354,145</p> <p>3. University of North Carolina, Chapel Hill: \$18,537,327</p> <p>4. University of Kentucky: \$15,329,858</p> <p>5. University of Washington: \$14,864,292</p>
<p>SCHOOL OF DENTISTRY</p> <p>1. UC San Francisco: \$25,903,058</p> <p>2. University of Michigan, Ann Arbor: \$22,528,704</p> <p>3. New York University: \$15,454,032</p> <p>4. University of Maryland, Baltimore: \$15,231,514</p> <p>5. University of Southern California: \$13,704,027</p>

す。この様に1人のリーダーによってこうも大学全体が変わるものと痛感しました。

UCSFは新生児科医であるSam Hawgood (図4)が総長になった2014年以降、大学の収益は50%アップしています。公立大学全米1位のNIHからの研究費、また同じく全米1位である民間からの寄付など、豊富な資金を使い私の居る最も新しいMission Bayキャンパス(鹿田の3倍の広さがあります)は2015年にオープンしましたが、小児(UCSF Benioff Children's Hospital San Francisco)、産科(UCSF Betty Irene Moore Women's Hospital)、がんセンターの1部(UCSF Bakar Cancer Hospital and the UCSF Bakar Precision Cancer Medicine Building)の病院機能の他、

表3. UCSFが集めた大型寄付

- 2015年、Salesforce (セールスフォースドットコム) 2億ドル(約220億円)の寄付(UCSFの小児病院であるBenioff Children's Hospital建設)
- 2016年、Biohub (チャンザッカーバーグバイオハブ) 6億ドル(約660億円)の寄付(基礎医学研究)
- 2017年、Helen Diller Foundation 5億ドル(訳550億円)の寄付(がん研究)
- 2018年、Weill夫妻(元シティグループCEO) 1億8500万ドル(約200億円)の寄付(アルツハイマー病などの脳神経科学研究)



図3 UCSF Mission Bayキャンパス 病院施設



図4 UCSF総長Sam Hawgoodと筆者

UCSF Bakar Precision Cancer Medicine Building、Neuroscience buildingなど心臓、癌、脳などの研究施設が次々に建てられています。私が来た2017年以降だけでも5つの研究施設が新たに出来ました。また2030年までにParnassusキャンパスの本部病院は500億円以上かけて再開発が予定されています。

UCSF総長のSam Hawgoodの方針は、NIHなどの研究費を個々の研究室単位ではなく、UCSFの総力を挙げて獲得しようというものです。この方針は彼が医学部長になった2007年から採用され、2015年の総長就任以降はさらに徹底されました。Mission Bay Campusの新しいすべての研究室は、この方針で作られています（図5）。この様な試みは岡山大学でも可能ではないかと思えます。東海岸のハーバート、ジョン・ホプキンス大学などでは個々の研究室が単独で競争して研究費を獲得しようとするので、皆で協力して研究費を獲得しようという文化は無いそうです。ですから他大学からUCSFに移ってきた研究者は、毎週開催される研究発表会に驚いています。研究発表会は各臓器別（心臓、脳、癌など）、各分野別（再生医療、iPS、遺伝子治療など）に毎週行われます。研究発表会はResearch fellowが個々の研究成果を発表するカンファレンスと、各研究室のトップだけが集まって行うカンファレンスがあります。このトップだけのカンファレンスでは最先端の研究の途中経過が発表されるので、異なる分野の主任研究者（PI）から様々な意見が出るだけでなく、他の研究室が協力できる所があればその具体的な内容などが話し合われます。高額研究機器などは皆で協力して獲得し、複数の研究室が共同利用しています。また研究室は共同医局の様な感じで、研究室間の垣根はありません。またDoudna教授には

ノーベル賞獲得前にUCSF Gladstone研究所にも研究室を与え、更に約90億円の寄附金でCRISPR研究センターを建てる計画です。

COVID-19感染を最小限に抑えたLondon Breed サンフランシスコ市長、またUCSFを全米屈指の施設に押し上げたSam Hawgood総長、1人のリーダーによってこうも市や大学が変わるものだと痛感しました。毎年発表される世界大学ランキングでの日本の大学の凋落と中国、シンガポール、韓国などアジア各国の躍進を見るにつけ、日本の大学の抜本的な改革の必要性を痛感します。

岡山大学が根本的な改革の下、今後更なる躍進を遂げられることを願っています。

Shunji Sano, MD, PhD

Professor of Surgery

Division of Pediatric Cardio-thoracic Surgery

University of California San Francisco

カリフォルニア大学サンフランシスコ校

小児心臓外科教授

佐野俊二

Mail: Shunji.sano@ucsf.edu

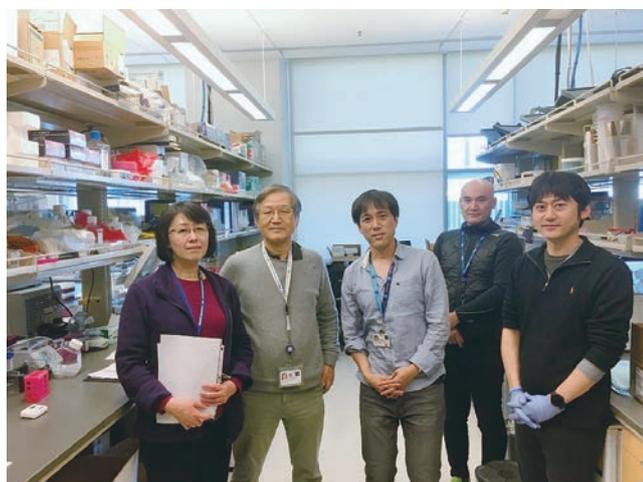


図5 Sano Lab

Xiaojin Cui (技術員)、佐野俊二、石神修大、伊藤達男、佐野俊和

歴史の広場

医師養成の歴史と岡山大学医学部 —その7

昭41 棕野 洋

大学の創立と改革に伴う医学部及び大学の格差

大学の創立と医師養成の歴史の中で自然発生的に生まれた医学部格差

オランダ医学教育とドイツ医学教育

我が国の近代西洋医学教育は、安政4年(1857)、幕府招聘のオランダの軍医、ポンペ(28歳)(写真)が長崎の医学伝習所に於いて、動植物学、物理学、化学を、次いで解剖学、生理学等の基礎医学、その後内科学、外科学等の臨床各科目に進むという系統的な講義を行い、伝習所に付置された、給食設備を持つ木造2階建2棟、120床の西洋式病院(小島養生所)で、患者の治療を行ったことに始まり、これが後の長崎大学医学部となった。



ポンペに学んだ佐藤尚中(たかなか)(写真)が主宰する、下総の佐倉順天堂塾(後の順天堂大学、天保14年(1843)佐藤泰然開塾)は、幕末のオランダ医学の教育センターとなり、全国から大勢の医師が集まった。



江戸では幕府直轄の漢方医学を学ぶ医学館があったが、安政5年(1858)に神田お玉が池に種痘館の名称でオランダ医学の教育施設が設立され、万延元年(1860)には幕府直轄となり、翌年種痘・解剖・医学を講習する西洋医学所となった。文久3年(1863)医学所と改称され、江戸では漢方とオランダ医学の教育が併存することとなった。富国強兵を目指す新政府では、幕末の戊辰戦争で、漢方では処置出来ない外科的処置に対応出来る西洋医学を知り、医学の西欧化を急ぐことが、当面最も大切な問題と考えられるようになった。

佐賀藩医相良知安(ちあん)(写真)は文久元年(1861)、26歳で江戸遊学を命じられ、佐倉順天堂で福井藩医岩



佐純(あつし)らと共に、佐藤尚中に師事し、彼の紹介状を携えて長崎に行き、ポンペの後任のボードウインに、長崎の医学伝習所でオランダ医学を学んだ。明治2年(1869)明治新政府から新生日本の医学校創設が、一級の蘭医となった相良と岩佐に命じられ、同年佐倉の佐藤尚中が後に東大となる大学東校(医学校)の校長に任ぜられた。

相良は学校、岩佐は病院を主に担当し、大学東校の改革に当たった。長崎で蘭医ボードウイン(写真)等から、当時のドイツ医学が世界最先端であること、基礎医学分野でもドイツは世界的に優れていること、オランダの医学書は大半がドイツの医学書の翻訳であり、日本人は蘭書を通じて、実はドイツ医学を学んでいるということ、米・英の民主国の文化は天皇制の我が国の国情には合わないが、立憲君主国であるドイツは我が国と国情が似ている為に、学問や文化は受け入れやすい等と聞いていた相良は、ドイツ医学採用を決めていた。新政府内部では、戊辰戦争で官軍についた、イギリス公使パークスの推す、公使館付き医官ウィリスの戦場での働きを知る、西郷隆盛や山内容堂の勧めで、臨床重視のイギリス医学導入の流れになっていた。西洋の知識全てを英語によるべきとの、米国崇拜者の福沢諭吉の感化を受け、文部省も学術の基礎を全て英米に倣い、医学も英米に範を求めべきと考えていた。相良と岩佐は、政府にドイツ医学を採るよう強く建言し、オランダ生まれの米人で、学識拔群として、政府顧問として献策していたフルベッキの他、大隈重信や副島種臣を動かした。明治3年(1870)2月閣議でドイツ医学の採用が決まり、大学東校ではドイツ医学採用となった。政府は明治3年(1870)、横浜駐在の北ドイツ連邦公使に対して、3年間、2名の医師を同校へ招聘したいとの申し入れを行った。



明治4年(1871)に文部省が設置され、明治4年(1871)8月、大学東校校長として横浜に着いたドイツ(プロイセン)の軍医少佐で外科医のミュラー(47歳)(写真)と、次席医師の軍医大尉の内科医ホフマン(33歳)により、我が国の本格的な近代西洋医学教育が、後の東京大学に於いて始まった。彼らはドイツ語でドイツ流に、厳格な講義を行った。学生達は、本科2年の終わりにはドイツ語で読み・書き・話すことが出来るようになり、39歳の初代文部卿大木喬



任（たかとう 佐賀藩）の熱意の下に、ドイツに範を取った我が国初の、唯一の官立医学校は、短時日のうちに整備されていった。こうして、取り入れるべき様々な西洋学術の中で、最も早く本格的学習が始まったのは医学となった。

東京大学創立とドイツ人教授

明治10年（1877）に東京開成学校および東京医学校（大学東校の後身）を合併して東京大学が発足したが、発足時には、内科、外科、生理学、解剖学、製薬学を担当するドイツ人教師がいて、その他に4名、翌年4名追加して計8名の日本人教授がいた。予科3年、本科5年、薬学科3年の全寮制のドイツ人がドイツ語で講義する正規の課程とは別に、明治8年（1875）に始まり、13年（1880）「別課」と改称された通学生向けの日本語による簡易な専門家（医師、薬剤師、法曹）養成課程があり、この簡易な養成課程の教育を日本人の教授が担当した。別課に於ける医学の修業年限は3年半（のち4年）で、2年課程の薬学科もあり、西洋医を速成するための臨時措置的なものと考えられていた。明治22年（1889）に廃止されたが、この間1,500名の卒業生を出し、西洋医学の普及に大きく貢献した。

明治14年（1881）職制が定められ、教授は学生を教授し、助教授は教授の職務を助けることとなった。つまりこの時期の東京大学は教育機関であり、研究機関の役割は未だ無かった。

当時外人教師への俸給総額は医学部予算の1/3と言われており、日本人教師の育成が待たれていた。明治19年（1886）の帝国大学発足以降は、東京大学医学部を優秀な成績で卒業し、3年以上の留学経験をした者から教授になる者が増えていった。

東大卒業生の進む道

本科の最初の卒業生が出たのは明治9年（1876）とされている。明治12年（1879）から卒業生を「医学士」と呼ぶようになった。明治10年（1877）頃から、東京大学卒業生を医学校校長・病院長として招聘する、全国的な医学校の設立ブームが起こった。必ず「医学士」を招聘しなければならないという明治15年（1882）に公布された「医学校通則」により、引く手あまたの医学士は、卒業成績が優秀な人の進む、教授への道とは別の道として、高給で、全国に近代医学を広めることに貢献した。東大の卒業生が3名いる医学校は甲種医学校として、卒業生は無試験で医師になれるという特権が与えられた。岡山県医学校が甲種医学校として認可されたのは明治16年（1883）8月で、翌17年には11

人の第1回の卒業生が出た。

帝大創立と講座制導入及び日本人教授

明治18年（1885）、維新以来の太政官制度にかわって内閣制度が導入され、初代総理大臣に伊藤博文、初代文部大臣に薩摩出身の森有礼が任命された。明治19年（1886）発足の森の命名と言われる帝国大学は、彼自身が起草の帝国大学令の第一条で、「帝国大学ハ国家ノ須要ニ応スル學術技芸ヲ教授シ及其蘊奥（うんおう）ヲ巧究スルヲ以テ目的トス」として、教育機関であった東京大学とは異なり、国家の大学、国家富強に奉仕する大学として、研究機能を併せ持つ最高学府の大学となった。教官も教授、助教授の2層とし、それ以外は雇とした。

東京大学医学科本科の卒業生数

年	人数
明治9年	31
明治10年	—
明治11年	—
明治12年	20
明治13年	17
明治14年	30
明治15年	27
明治16年	26
明治17年	13
明治18年	17
明治19年	24
明治20年	30

ヨーロッパ型の研究機能を備えた大学を目指す文部省では、欧米の諸大学にあるからと、明治26年（1893）帝国大学に講座制を導入し、23の講座が開講された時、ベルツの内科学第三、スクリバの外科学第三、翌年助教授山極勝三郎が担当する病理解剖学第二を除く20講座を日本人が担当する迄になった。

明治8年（1875）文部省貸費留学生規則が定められ、大学教授の養成に海外留学が欠かせないとの認識は定まってきた。明治15年（1882）官費留学生規則が制定されて、留学が大学教授養成手段となった。大学卒業後、大学院に進み、更には助手、助教授を経てから留学するようになり、教授職は飽和状態に近づいてきた。こうして東京大学が発足した明治10年（1877）から、講座制が導入された明治26年（1893）迄に、帝国大学とその前身校で教授となった日本人教授は130名を数え、その77%に当たる100名が教授就任の前に留学していて、その内訳は、法13/16、医16/16、工21/27、文8/23、理25/26、農（明治23年（1890）設立）8/10、計100/130となっている。

7 帝大の教授供給源

明治19年（1886）設立の東京帝国大学（理・工・医・法・文）に続き、明治30年（1897）京都（法・文・医、理工）、明治40年（1907）東北（農・医）、明治44年（1911）九州（医・工）、大正7年（1918）北海道（農・医）、昭和6年（1931）大阪（医・理）、昭和14年（1939）

(5) 医学部

出身学校	東京 帝大	京 都 帝大	九 州 帝大	東 北 帝大	北 海 道 帝大	大 阪 医 科 大 学	及 其 の 前 身 校	愛 知 医 科 大 学	第 三 高 等 学 校 部	済 々 学 舎	外 国 大 学	計
教授就任 大学(就任年)												
東京帝大 (明治32~)	72		1									73
京都帝大 (明治32~大正2) (大正4~)	24	36	1								20	26 44
九州帝大 (明治36~大正3) (大正4~昭和6) (昭和7~)	25	1	13								1	26 22 16
東北帝大 (大正4~昭和3) (昭和4~)	23	4	3	6								27 16
北海道帝大 (大正10~昭和3) (昭和4~)	5	2	2	1					1			28 8
大阪帝大 (昭和6~)	3				5							35
名古屋帝大 (昭和14~)	7	1	3				24					23
計	16	44	35	7	5	24	6	6	1	1	3	344

(Y) 大正12年以降の5人は全て薬学科出身。
 (I) 国内の最終学歴はそれぞれ東京帝大別科、第五高等学校医学部。
 (II) 国内の最終学歴は東京帝大予備門中退。

名古屋（医・理工）の順に帝国大学が設立された。東大の後に設立された帝大医学部の教授の供給源は、東大を含めて全344名中、東大卒218名、京大卒44名、九大卒35名、東北卒7名、北大卒5名、阪大卒24名、名大卒6名となっており、自校より歴史の古い大学の教授には、九大の2名以外にはなっていない。当時、一般的には大学の卒業生でなければ、大学教授にはなれないし、大学卒業後、15～20年経ってから教授になる例が多いことを考えれば、阪大と名大では、旧帝大から迎えた教授の他で教授になった人は、いずれも帝大になる前の前身校である医大の卒業生であった。阪大は大正8年（1919）に府立大阪医科大学となり、名大は大正9年（1920）に県立愛知医科大学となったので、その卒業生からの教授就任ということになる。

6 官立医大の教授供給源とその後の教授供給源

大正11年（1922）から2年間で医学専門学校から官立の医科大学5校と県立の熊本医科大学（昭和4年（1929）官立移転）が設立された。当時の熊本と同じく公立の京都府立医科大学が医専から大学に昇格したのは官立医大より早く、大正10年（1921）の事であった。これらの医大設立に伴い、教授の需要が高まり、卒業15～20年の人材とすると、新設された7医大の教授には東大と京大が教授供給源となったのは明らかである。

終戦前の医学専門学校急増期及び、戦後の新制大学医学部設置時に教授需要が高まった時には、旧7帝大、旧6医科大及び京府の卒業生が担当した。

1970年代以後の新設大学での医学教育は、新制大学卒業生も加わるようになった。

医学部ヒエラルキーの形成

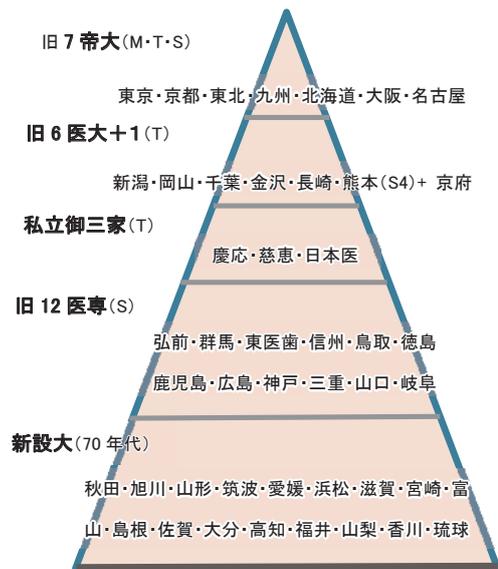
新たに地方で医師養成が始まる時、教育施設での教育だけでなく、卒業後の教育施設内外での臨床教育も伴う。多くの場合、教授派遣大学がその地域の中核病院にも人材派遣を行うことで、地域の医療を担当する

と共に、卒後の臨床教育も行ってきた。長い時間をかけて西洋医学を全国に広めるとい、明治以来の医学教育の歴史の中で、大学の設立時期によって、古い大学が新しい大学の育成・指導を行ってきた為に、大学に於ける医学教育だけでなく、地域医療を含めて、東大を頂点とする厳然とした階層・格差が自然発生的に生まれてきた。

終戦までの大学は、明治19年（1886）～昭和14年（1939）設立の旧7帝大（東大、京大、東北大、九大、北大、阪大、名大）と、大正11年（1922）～大正12年（1923）設立の単科大学である旧6医大（新潟大、岡山、千葉大、金沢大、長崎大、熊本大（国立移管は昭和4年））+公立の京府大の、国立13、公立1と、大正9年（1920）～大正15年（1926）設立の、私立御三家と呼ばれる私立医科大学（慶大、慈恵医大、日本医科大）の計17大学であり、これ等の卒業生が全国で医師養成を行っていた（大正14年（1925）日大専門部医学科が開設され、昭和17年（1942）日大医学部に昇格した日大を含めると終戦までの大学は18大学になるが、日が浅いのでここでは含めない）。

今日でも教授ジッツ、関連病院と呼ぶ病院ジッツが多いほど、大学の勢いがあるとの見方は変わらない。これが戦後も長い間医学部間の格差として続いてきた。

インターン制度廃止後今日迄に、国立18大学、私立18大学の医学部が新設され、令和3年の今年、全国に医学科・医学類（筑波、金沢）のある大学は、文部科



国立42大学医学部のヒエラルキー

学省所管で、国立42校、公立8校、私立31校、防衛省所管の準大学（防衛医科大学校）1校の計82校ある。その中、国立大学医学部の42校には、設立された歴史的背景により、医学部の「格」としては、旧7帝大、旧6医大、旧医専12、新設医大17（防衛医大を除く）というピラミッド型の厳然とした伝統的なランクが存在している。

新制大学を医学部を中心にして見ると、例外的な大学を除けば、未だにそのランクには大きな崩れは見られない。我々の学生時代には、全国に圧倒的に教授ジツツを持つ東大、京大は別格としても、それ以外の5帝大と旧6医大との差は左程大きなものと感じなかったが、これらの計11校と、それ以外の医専から昇格した12校の新制大学との間には、入学定員や入試に関しても、関連病院の数に関しても、歴然とした誰もが認める歴史と伝統による格差が存在していた。

「医者になりたければ、東京や京都に行く必要はない」とは、我々の受験時代には岡山では当たり前に行われていたことであった。岡大に入る力のある人で、神大や広大に行こうという人はいなかったし、逆に兵庫や広島からは優秀な人達が大勢岡山に来るという時代であった。阪大がまだ帝大ではなく、府立大阪医大であった昭和の初期では、六高を卒業しても岡山医大に行けない人は、当時は無試験であった大阪に行っていたということ、先輩教授から学生時代に聞いたことがある。その頃はまだ神戸にも広島にも医師養成施設はなかった。

法人化迄の戦後の大学改革に伴う大学整備

大学改革に伴う、人為的な医学部及び大学格差

戦後ドイツ医学からアメリカ医学に代わっても、大学の格差の面からは、大きな変化は無く、格差のあるまま整備が進められてきた。昭和36年（1961）の国民皆保険制度の確立後、医療需要の増加に対しては、国は入学定員の増加によって対応し、各大学の入学定員が全国一律となった。やがて卒業生の数も一律になると、時の流れと共に旧医専系列の新制大学各々で数的にも人材が育って来て、数多くの関連病院と呼ばれる派遣先を持つ旧医大系等の数的な人材不足に、地元の新制大学出身者が置き換わることが各地で起こり、大学間の勢力格差が次第に薄まってきた。とりわけ、戦後に新制大学となった時に、大正9年（1920）設立の東京商大（後の一橋大学）に続いて、昭和4年（1929）設立の神戸商業大学を母体とする神戸大学や、同じく、

昭和4（1929）年に東京文理科大学（後の筑波大学）と共に設置された、広島文理科大学を母体とする広島大学という、我が国有数の歴史ある旧制大学を母体とする大学の医学部として組み込まれた、神大や広大の医学部では、医学部のその後の発展が、医学部としては同等の歴史を持つ他大学に比べて急速に進んでいるのは誰もが認めていることであろう。特に、医学部入試が過熱するに従い、東大、京大、阪大等の難関と言われる有名大学に地理的に近い、旧医専系の東京医歯大や神戸大等では、優秀な受験生が集まり、偏差値も高まり、必然的に難関と呼ばれる有名大学になってきた。神戸大はiPS細胞の山中伸弥教授の母校であることの影響も大きいだろう。

その他、遙か後の昭和48年（1973）になって新設された、筑波大学の医学部としての躍進ぶりが傍目にも目立っている。

令和元年（2019）発行の、創立75周年記念の神大医学部の同窓会誌には、初めて医師が誕生した、医専1回生の卒業が昭和24年（1949）で、県立医大に昇格後、昭和26年（1951）、昭和29年（1954）の卒業生から、昭和51年（1976）に神大教授、昭和57年（1982）兵庫医大教授のように、昭和50年代以降になると教授を輩出するようになったが、彼らが入局した頃は、「やはり神戸は新設で、岡山とか京都とか、そういうところを上に見て、あのぐらいの状況になったらいいな」と思っていたという話が載っている。昭和20～40年代頃迄の彼らの共通の思いであったろうと思う。神戸に医専が出来、県立医大になり、国立に移管するまでを、京大と岡大が担当して育てた歴史を知る人は、少なくともはいるが、神戸に長く住んでいると、岡大の卒業生に対する同じような高齢の彼らの思いは、現在でも、他の場面で、いくつか感じることもある。

神大としては初めて、旧6医大である長崎大に平成2年（1990）に赴任した、昭和42年（1967）県立医大卒の教授は、長崎大学としても旧帝大、旧医大卒以外の教授は初めてだったとかで、「3年間は教授会で発言するな」と言われたという話が載っている。

ところが、平成の時代の卒業生からは、京大と阪大の存在が大きく、その2校に押されているという感想が聞かれるようになり、旧6医大とか岡山の話は出てこない。昭和の時代には、神戸市内の大きな病院のスタッフは、京都、岡山、大阪、京府等から派遣されていたが、令和の



現在、殆ど神戸に置き換わっている。病院周辺部の土地に、神大関連の新しい施設が出来ているのに気付いて、医学部の勢いを感じることもある。

神戸と同じように、岡大が、医専の設立時に校長、教授を送って育てた広島大学でも事情は同じで、昭和41年（1966）卒の我々の学んでいた頃、広島市の大きな病院は殆どが岡大の関連病院であったのに、令和3年（2021）4月に、広大副学長が院長となり、広島市民病院も広大の関連病院となったことが報じられた。広大の同窓会報を見ると、昭和の時代、岡大の関連病院であった市内の大病院は、現在ほぼ全て広大の関連病院になっている。

神大も広大も医学部入試に於いて、偏差値が上昇し、最近では多くのデータで、岡山を上回ることが多い。入試では全国区として、頭角を現してきた感が強いのだが、地元でも目に見える形で、確実に勢力を伸ばしてきている。

講座制と学科目制による差

明治以来、官立の高等教育機関の中で、帝国大学とそれ以外の官立大学は講座制を取り、教育と研究を行い、同じ官立の高等教育機関で、戦後大学となった高等学校・大学予科・専門学校・実業専門学校・高等師範学校・師範学校等では教育は行うが研究は行わないものとして区別して考えられていた。

第二次大戦後、これらが再編・統合されて、昭和24年（1949）に69校の四年制の国立大学になった。このGHQ（General Headquarters）の押しで出来た新制大学は、旧帝大を発展させた「総合大学」と、地方国

立大学として一県一大学を原則に、教員養成の学部を必置にして、地域の産業構造に見合った専門学部を置き、可能な限り医学部を置くタイプの「複合大学」、そして、どちらにも属さない一橋とか東工大等の旧単科大学を新制の単科大学として残すという構想であった。昭和26年（1951）占領が終わった後も、旧制大学は新制大学となっても講座制を続けたが、それ以外は学科目制であり、大学院は講座制の学部にのみ設置出来、学科目制の学部、大学には認められず、昭和31年（1956）に省令として定めた「大学設置基準」にそれが明記された。

唯6年制の医学部だけは、旧制医大と同様に、新制大学医学部も講座制を採用することになっていた。

国立大学で平成11年（1999）度まで採用されていた積算校費と呼ばれる教育研究費・管理運営費の予算の単価も、教員の配置数等も違い、教員当たりで講座制を1とすると、学科目制はほぼ0.3から0.4と定められ、略固定して変わらず、講座制と学科目制では予算に4倍ほどの差があった。

**戦後の国立大学の序列表に基づく大学整備
旧帝大の整備**

旧帝大の中でも、終戦時に東大と京大には法・文・経、東北大と九大には法文の文系学部があったが、他は、北大は、理・工・医・農、阪大と名大は、理・工・医と全て理系学部だけで、全大学に医科はあったものの、官僚養成の法科は東大と京大に限られ、帝大内格差も大きかった。

大学	創立年	創立時の学部	終戦時の学部	戦後の学部
東大	明治19年 (1886)	理・工・医・ 法・文	理・一工・二工・医・ 農・法・文・経	理・ <u>工</u> ・医・ <u>薬</u> ・農・法・文・ 経・ <u>教育</u> ・ <u>教養</u>
京大	明治30年 (1897)	法・文・医・ 理工	理・工・医・農・法文・経	理・工・医・ <u>薬</u> ・農・法・文・ 経・ <u>教育</u> ・ <u>総人</u>
東北大	明治40年 (1907)	農・医	理・工・医・法文	理・工・医・ <u>歯</u> ・ <u>薬</u> ・農・法・ 文・経・ <u>教育</u>
九大	明治44年 (1911)	医・工	理・工・医・農・法文	理・工・医・ <u>歯</u> ・ <u>薬</u> ・農・芸・ 工・法・文・経・ <u>教育</u> ・ <u>共創</u>
北大	大正7年 (1918)	農・医	理・工・医・農	理・工・医・ <u>歯</u> ・ <u>薬</u> ・農・ <u>獣</u> ・ <u>水</u> ・法・文・経・ <u>教育</u>
阪大	昭和6年 (1931)	医・理	理・工・医	理・工・医・ <u>歯</u> ・ <u>薬</u> ・基礎工・ 法・文・経・ <u>人科</u> ・ <u>外語</u>
名大	昭和14年 (1939)	医・理工	理・工・医	理・工・医・農・法・文・経・ <u>教育</u> ・ <u>情報</u>

この7大学を全て、略同じ内容の、同じレベルの文・理系学部を持つ総合大学とする為に、学部の新設、分離等が行われ、教養学部以外の全学部が大学院を持ち、講座制の大学となった。戦後旧7帝大はこうして、文系、理系の講座制学部と大学院を多数揃えて充実し、予算も多く、他とは一線を画した我が国の代表的な総合大学として整えられていった。

旧6医大を除く旧制大学及び東京医歯大の整備

旧制大学は、旧帝大に準じて整えるという方針の下、神大や広大では、いずれも旧制大学の流れを継ぐ3学部（神大が法・経済・経営、広大が文・教育・理学）に加えて医学部が講座制を持つ大学となり、医学部だけが講座制の岡大よりも予算面でも優遇されることになった。

一橋、東工大は、新制大学となっても、教養教育・一般教育の部分は旧制高校を引き継いでいるので学科目制だが、学部教育は旧制大学の為、講座制であった。これら旧制大学も、旧帝大に準じて、講座制で大学院を持つ我が国を代表する大学として整えられていった。

東京医科歯科大は、昭和3年（1928）設立の、我が国最初の歯科医学教育機関であり、昭和19年（1944）医学が加わって、医学歯学専門学校となった。医学部の面を見れば旧医専から昭和21（1946）に昇格した大学であるが、昭和26年（1951）新制大学となった後は、我が国の歯学教育のメッカとして、特別に扱われることになった。

旧6医大を含む一県一大学の整備

一県一大学を基準に整備された地方大学は、医学部の有無で差が出来た。旧6医大を核とする大学と、戦後旧医専から大学に昇格した大学では、医学部は講座制を採り、大学院があるが、他の学部及び医学部のない大学では学科目制で、大学院が認められず、大学間、学部間に強い不平等感があり、特に大学間の格差感は次第に大きくなっていった。

注目すべきは、旧商大、旧文理大が講座制の全国区の新制大学の扱いを受けることになったのに対して、旧制6医大は、あくまでも一県一大学の地方大学としての扱いをされていることである。学長給与は旧制大学の扱いを受けているものの、大学自体は帝大に近づけようとの旧制大学の扱いでなく、ワンランク下の地方大学の扱いで、医学部だけを見れば、戦争末期の急設された医専から昇格した医学部や、その後出来た新設医大と変わらぬ扱いとなった。旧制医大は、いずれ

指定職給与（月額）

12号俸	1,328,000	東大学長、京大学長のみ
11号俸	1,301,000	事務次官クラス 東大、京大以外の旧帝大学長、筑波大学長
10号俸	1,227,000	内閣府審議官クラス 旧6官立医大 東工大、一橋、神戸、広島学長
9号俸	1,146,000	外局の長官クラス 広島、神戸以外の旧医専（弘前、群馬、東京医歯 信州、岐阜、三重、鳥取、山口、徳島、鹿児島）、 山形、愛媛、琉球大の学長
8号俸	1,069,000	本省の局長クラス その他の大学長

も歴史と伝統、人脈、設備等旧帝大と殆ど変わらない財産を持ち、各地に多くの教授や関連病院を持ったままスタートはしたものの、新制大学では、医学部は一律講座制で、国民皆保険制度後は入学定員も同じとなった為に、時代の流れと共に医学部間の格差は次第に薄まっていった。その中で、神大、広大の医学部は、いずれも終戦直前に医専として岡大の支援の下にスタートし、大学医学部としては戦後ゼロからのスタートであったが、学長給与に見る如く、大学自体が文部省によって、旧制大学の一員としての扱いを受け、予算も多く、医専から大学に昇格した新制大学の中で、その躍進振りが誰の目にも際立って映る存在となっていった。

これら戦後に生じた、帝大の充実を含めた大学の格差は、明治以来、医科大学の充実に伴って自然発生的に生じた、地域医療を含めた医学部特有の格差と異なり、文部省、文科省の目標達成に向けた意図的な大学改革政策によって生まれた格差と言える。戦後は、医学部の発展は大学の発展に伴っており、大学全体が発展しなければ、医学部の発展も難しい時代となっている。

旧文部省によって作成され、文科省に引き継がれた序列表によれば、戦後文部省、文科省は全国の99大学を、旧帝大、旧官立大、新7大（新8大）、部制大、その他大の5グループに厳格に序列化していて、戦後の国の「大学改革」は殆ど例外なく、この序列に従って実行されたとされている。森戸辰男、天野郁夫等戦後の大学改革に大きな影響を与えたと思われる人達の基準にした序列表には、旧文理大を引き上げようとの、明らかな意図が見て取れ、この序列表に基づいた政策が、新たな大学の格差を生んだのだと言える。

大学の序列表

【旧帝大】北海道、東北、東京、名古屋、京都、大阪、九州、筑波

【旧官立大】千葉、東京工業、一橋、新潟、金沢、神戸、岡山、広島、長崎、熊本

【新7大】弘前、群馬、東京医科歯科、信州、鳥取、徳島、鹿児島

【部制大】北海道教育、旭川医科、岩手、秋田、山形、茨城、宇都宮、埼玉、東京学芸、東京農工、横浜国立、長岡技術科学、上越教育、富山、富山医科薬科、福井医科、山梨医科、岐阜、静岡、浜松医科、愛知教育、名古屋工業、豊橋技術科学、三重、滋賀医科、大阪教育、兵庫教育、島根医科、山口、鳴門教育、香川、香川医科、愛媛、高知医科、佐賀、佐賀医科、大分医科、宮崎、宮崎医科、琉球、北陸先端科学技術大学院、奈良先端科学技術大学院

【その他大】室蘭工業、小樽商科、帯広畜産、北見工業、宮城教育、福島、図書館情報、東京外国語、東京芸術、東京商船、東京水産、お茶の水女子、電気通信、福井、山梨、滋賀、京都教育、京都工芸繊維、大阪外国語、神戸商船、奈良教育、奈良女子、和歌山、島根、高知、福岡教育、九州芸術工科、九州工業、大分、鹿屋体育、総合研究大学院

《病院格付》

【旧6官立大】千葉、新潟、金沢、岡山、長崎、熊本

【新8大】弘前、群馬、東京医科歯科、信州、鳥取、徳島、鹿児島、広島

*旧帝大の中に筑波大学がある。旧文理大は教員養成施設として、昔から7帝大に次ぐランクと考えられてはいた。旧東京文科大学の流れを引く筑波大学は、昭和48年（1973）10月設立の新しい大学で、医学部も工学部も新設だが、旧帝大並みに遇されているのはその為だろう。

*旧官立大は第二次大戦終了以前にその前身が官立大学であったものを指しており、旧6医大（千葉、新潟、金沢、岡山、長崎、熊本）、旧商大（一橋、神戸）、旧文理大（東京（筑波）、広島）、旧工科大（東工大）を指している。このグループは単科大学を除いて、総合大学として帝大に準じた大学を目指す大学であり、筑波大学は本来この旧官立大学グループである筈である。

*旧6官立大（旧6医大）とは、旧官立大から旧商大、

大学	医専 設立時期	大学 昇格時期	国立 移管時期
弘前大	昭和19年 (1944)	昭和23年 (1948)	昭和24年 (1949)
群馬大	昭和18年 (1943)	昭和23年 (1948)	昭和24年 (1949)
東京 医歯大	昭和19年 (1944)	昭和21年 (1946)	昭和3年 (1928)
信州大	昭和19年 (1944)	昭和23年 (1948)	昭和24年 (1949)
鳥取大	昭和20年 (1945)	昭和23年 (1948)	昭和23年 (1948)
徳島大	昭和18年 (1943)	昭和24年 (1949)	昭和24年 (1949)
鹿児島大	昭和17年 (1942)	昭和24年 (1949)	昭和30年 (1955)
広島大	昭和20年 (1945)	昭和23年 (1948)	昭和31年 (1956)
神戸大	昭和19年 (1944)	昭和21年 (1946)	昭和39年 (1964)
三重大	昭和18年 (1943)	昭和22年 (1947)	昭和47年 (1972)
山口大	昭和19年 (1944)	昭和24年 (1949)	昭和39年 (1964)
岐阜大	昭和19年 (1944)	昭和22年 (1947)	昭和39年 (1964)

旧文理大、旧工科大を除いた6大学で、京府は公立の為、歴史は同じように古いが含まない。

*部制大は新制大学成立後、事務局長の下に部長がいる部制のある大規模大学で、その他大は新制大学成立後、事務局長の下に部はなく、総務課長がいる小規模大学である。

*新7大は、戦後医専から大学へ昇格した大学のうち、新制大学成立（昭和24（1949）5.31）前に、その前身大学が設立された12官立大学のうち、昭和20年代迄に国立移管を済ませた、弘前、群馬、東京医歯、信州、鳥取、徳島の6大学に、鹿児島大を加えて新7大、鹿児島と広島を加えて新8大と呼ぶ。医専から最も早く大学に昇格した神戸大学を外し、大学昇格は鹿児島、広島より早いか、同じである三重、岐阜、山口を外したのは何故だろうか。考えられるのは、国立移管時期の差である。弘前から徳島までの6大学を除けば、鹿児島、広島、山口、岐阜、神戸、三重の順に早く、県立から国立に移管している。昭

和39年（1964）に国立になった山口、岐阜、神戸の三大学は、特別枠には入っていないことから、昭和30年（1955）に新7、昭和31年（1956）から昭和39年（1964）の間に新8を定めたことになる。当時森戸辰男が学長の広大医学部を、別枠にしたい強い思い故の政治的意図で、国立移管を急ぎ、移管終了時期を基準に別枠にしたのではないかと思われる。別枠にしたメリットがあったとは思えないが、広大を現状から少しでも引き上げたいとの彼の思いは感じる。

天野郁夫の「国立大学の構造改革」なる一文には、「基幹・研究・重点大学」として、旧7帝大と3校の単科大学（一橋、東工大、東京医科歯科）、3校の旧官大（筑波、神戸、広島）の計13校をトップグループとして挙げ、2番目のグループは、「地域拠点・地方国立・総合複合大学」で、6校の旧官立医大を含む37校とし、3番目に「特殊単科大学」として、お茶の水女子、奈良女子、東京外語、大阪外語、東京芸術、東京商船、電気通信など、女子教育、外国語教育、芸術、商船等の特色ある24校を挙げ、4番目が「新構想単科大学」として、昭和40年代以降に新設された12校の医科大学と、鳴門、兵庫、上越にある3校の教員養成系の新構想大学と、高専の卒業生が入学できる浜松と長岡の技術科学大学、北陸先端、奈良先端、総合研究大学院、政策研究大学院等5校の大学院大学も含めた25校という格付けが記されており、新構想単科大学を含めた国立大学の構造改革案なので、戦後長期に亘って、先の序列表とこのグループ分けに従って、大学改革が行われてきたことを示している。旧制大学を優遇するとしながら、彼も旧6官立医大を旧官大グループから除いて、1ランク下に位置付けている。



旧6医大が官立大学になったのは、医専から昇格した大学より30年近く古く、医専を育てた歴史的背景もあり、教育と研究を行う旧6医大と学ぶだけの教育機関である旧医専とは別格の機関であったので、むしろ旧6医大を別枠にして遇するべきでなかったろうか。広大優遇策は、原爆で人材以外の全てを失い、殆どゼロからのスタートである医学部を抱えた広大を、圧倒的に強い岡山を超えて、中四国の中心大学にするという彼の目標達成の為に考えた、文部省を巻き込んだ森戸の政略であったのではなかろうか。

「国立大学の構造改革」の中で、天野は、「広島文理科大学、神戸商業大学、東京文理大学を引き継いだ東京教育大学（後の筑波大学）は、地域拠点大学から次第に格上げされ、広島大学、神戸大学、筑波大学となります。広島は第8帝国大学をつくらうという要求が古くからあり、国立総合大学（旧帝大）に近いものにしていこうという政策的な意図から次第に整備されていったと思います。」と述べている。森戸の後に文部省と大きくかかわった天野も、旧文理科大学を意図的に引き上げようとする森戸辰男と文部省の政略を感じているようだ。第8帝国大学に関して、当時帝大設立の条件とされていた、医学部と旧制高校の両方を持つ岡山の方が、中国地方でははるかに優位であり、中国帝大設立を広島と岡山は争っていたのだが、その岡山を第2グループにし、広島を第1グループとしている天野も、森戸と同じ立場に立って、広大に肩入れした大学改革に取り組んでいたのだなと思わせる一文である。

天野郁夫は、昭和59年（1984）教育社会学専門の東大教育学部教授となり、文部省の大学関連の委員会や審議会の委員を務め、平成5年（1993）に大学審議会の委員に任命され、中教審の大学分科会となった後も委員を続け、東大定年退官後、平成18年（2006）迄、国立学校財務センター研究部長として、国立大学の法人化を中心に大学改革の問題に関わっている。

修士課程の増設 三八答申と地方国立大学の総合大学化

昭和32年（1957）頃から旧制大学系の理工系学部・大学院の拡充と、理・工・農の学部を中心に学科目制の大学・学部にも、修士課程だけの大学院研究科を設置する動きが出てきた。修士課程も大学院なので講座制をとり、学科目制の学部でも大学院に限定して、職業人養成を目標に修士講座が置かれ、博士講座より低い、積算校費が高い修士課程の整備が次第に進んできた。

昭和38年（1963）に中央教育審議会から「三八答申」が出た。大学を2つに分け、総合大学を原則に、高度の学術研究と専門職業教育を行う、博士課程を持つ大学院大学と、主として専門職業教育の場として、必要なら修士課程の大学院を置く大学とすること。文理学部、学芸学部、教育学部の再編をし、地方国立大学は総合大学化を図り、理工系の修士課程の大幅な増設をする等の答申であった。

岡大では昭和24年（1949）法文・教・理・農・医の5学部でスタートし、昭和30年（1955）医学部は進学課程と専門課程に分かれ、博士課程の大学院が設置された。昭和35年（1960）工学部設置。昭和39年（1964）理、昭和44年（1969）農、昭和46年（1971）工・文・法、昭和48年（1973）薬、昭和52年（1977）経、昭和55年（1980）教の修士課程が出来た。昭和51年（1976）薬学部、昭和54年（1979）歯学部を設置し、昭和61年（1986）歯に博士課程を設置した。

広大は昭和24年（1949）に、文・教・理・政経・工・水産の6学部でスタートし、昭和28年（1953）4月文・教・理に修士課程、博士課程の大学院が設置され、8月から県立医大の国立移管が始まり、昭和31年（1956）に移管が完了した。昭和32年（1957）に、呉市から広島市に移って来て、昭和34年（1959）医学部に博士課程が設置された。昭和40年（1965）歯学部が設置され、昭和38年（1963）工、昭和42年（1967）経、昭和43年（1968）農、昭和47年（1972）法、昭和48年（1973）薬の修士課程、昭和47年（1972）歯の博士課程が出来た。平成18年（2006）には薬学部が設置された。

旧官立大学としてではなく、一県一大学の地方大学として整備された岡大に比べて、旧官立大学として、帝大に準じて整備された広大の急速な充実ぶりが良く分かる。医専から、広大医学部となる迄、岡大がゼロから育てた広大が、薬学部以外は、岡大以上のスピードをもって急速に整えられ、昭和40年代にはほぼ終わっており、国の後押しによる新たな格差づくりを表すものだと言えよう。広大の発展振りは、大学全体が発展することに伴って、医学部の発展は得られるのだと感じさせるものである。

四六答申と森戸辰男

昭和46年（1971）に、中央教育審議会から森戸辰男会長の名前で出された「四六答申」では、大学を①研究院（高度の学術研究・博士学位の授与）、②大学院（特定専門分野の教育（2～3年）と社会人の再教育）、③大学（総合領域型・専門体系型・目的専修型の3類型がある）の3レベルとし、38答申の大学院大学を、研究の博士課程と、教育重視の修士課程レベルに分けて、研究と教育を分離する答申になっている。この答申が、具体的に実現されたのが、新構想の筑波大学で、初めて教育と研究が分離され、2年制の修士課程の大学院が、5年制の博士課程とは別に開設された。筑波大学では教育と研究の機能を分ける学群・学系制、管

理運営機能の強化を目指した副学長制等、法人化を視野に新たな試みを取り入れ、創立後国は旧7帝大並みの待遇をすることになった。森戸辰男の大きな影響力を示すものである。

森戸辰男は、昭和22年（1947）と翌年文部大臣を務め、昭和25年（1950）創立後1年空席であった、原爆で荒廃した広大学長となり、中国・四国地方の中心大学、地域性のある大学、国際性のある大学の実現を目指すという森戸三原則を掲げて、昭和38年（1963）迄の13年間広大の発展に尽くし、退職後は、広大時代から委員をしていた中央教育審議会の会長に就任した。彼は、昭和28年（1953）9月から昭和46年（1971）7月までの9期18年間、中央教育審議会の委員・会長を務め、「ミスター中教審」と呼ばれる存在であった。彼の存在は大きく、戦後広大医学部の躍進ぶりは「宜なるかな」と思わせる。



この「四六答申」は、昭和42年（1967）7月、「今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について」という文相の諮問に対して、4年間の審議の結果、昭和46年（1971）6月に「今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について」として、中教審会長として答申したものであり、明治維新・戦後の占領下に於ける改革に続く第三の教育改革と捉えられているほど大きな影響を与えたものであった。文部省と旧文理大、文部省と森戸、森戸と広大各々の強い結びつきを考えると、筑波大と広大の戦後の急激な発展振りが理解出来る。

昭和48年（1973）のオイルショックによる財政困難を契機に、規模の拡大を図るのではなく、教員養成学部と工学や経済学等の専門学部だけの2学部程度の小規模大学と、旧帝大並みの学部編成を持つ大規模大学のように、格差の大きい地方国立大学の是正の如き質的改善が図られ、中でも、旧制高校を継承する文理学部が、人文学部と理工学部に分離し、それから経済や工学部が分離し、医学部設置も加わって、次第に総合大学化していき、複数の修士課程の上に小規模の博士課程が、自然科学系とか社会科学系とかの形で設置されるようになった。

岡大では、昭和55年（1980）法文学部が文・法・経の3学部に分かれ、昭和46年（1971）文・法の、昭和52年（1977）経の修士課程が出来、それらを統合・再編して、平成5年（1993）文化科学研究科（博士前期

課程)が出来た。

又、昭和39年(1964)理、昭和44年(1969)農、昭和46年(1971)工、昭和48年(1973)薬と出来た修士課程を基盤に、昭和62年(1987)4月自然科学研究科(博士後期課程)が出来た。

大学教授の実務家教員枠と有名人

昭和60年(1985)大学設置基準が改正され、実務家教員枠が認められ、「専攻分野に、特に優れた知識及び経験を有すると認められる者」は大学教授の資格を有することになって以来、社会人から大学教員になる人が目立つようになった。

平成3年(1991)には大学カリキュラムの編成が自由となって、他の分野で活躍するタレントなど有名人の大学教授も出現するようになった。こうして、北野武(東京芸術大学大学院特別教授)、片岡鶴太郎(青森大学客員教授)、ガッツ石松(広島国際学院大学客員教授)等、客員教授、客員准教授、特任教授、特任准教授と呼ばれる有名人が増えてきた。

大学院大学

従来国立大学の教育や研究は学部が中心で、学部の職員が大学院の職員を兼務していた。国立大学の予算として、国から交付される教育研究費・管理運営費は学生数を基準に計算されており、大学院生1人あたりの交付額は学部生に比べ25%多かった。この頃国内の低迷する研究状況の打破と頭脳の国外流出を防ぐ為には、研究費の増額が必要との声が高まっていた。しかし、オイルショック後の財政難もあって、国は基本的な研究費である積算校費を抑えるようになり、代わって特別教育研究費の増額が図られ、研究機能の強い大学が有利となる時代となった。

こうして1980年代に入ると、大学院重視の声が高まり、学部のない大学院大学設置が考えられ、我が国初の大学院大学として、私立の国際大学(IUJ International University of Japan)が昭和57年(1982)新潟に設立された。外国人留学生向けの「日本語科目」以外は全て英語で講義が行われている。

昭和63年(1988)に総合研究大学院大学(神奈川県)、平成2年(1990)に北陸先端科学技術大学院大学(石川県)、平成3年(1991)に奈良先端科学技術大学院大学(奈良県)、平成10年(1998)に政策研究大学院大学(東京)等が国立の大学院大学として設立された。平成24年(2012)にノーベル医学生理学賞を受賞した山中伸弥が37歳の時に、応募により助教授になって、5年間iPS研究を行なったのが、奈良先端科学技術大

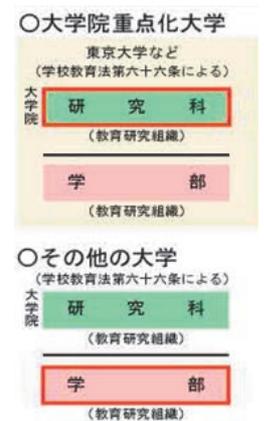
学院大学であった。平成23年(2011)には私立の学校法人沖縄科学技術大学院大学(沖縄)が設立された。

大学院重点化

1990年代になり、危機感を抱く大学は、予算確保の為に、大学ではあるが、職員を含めて大学院を組織の基本とし、大学院の職員が学部の職員を兼ねるスタイルの大学院重点化を、規制緩和政策の推進に基づき行うようになった。学生の教育・講義が主体の大学の学部講座から、研究と院生の研究指導を主体とする大学院講座に替え、大学の研究活動を活性化しようとの狙いであった。

平成3年(1991)東京大学法学政治学研究科、平成4年(1992)京都大学大学院法学研究科、平成5年(1993)北海道大学理学研究科等、旧帝国大学等が相次いで大学院重点化を行い、平成12年(2000)までに旧7帝大と、一橋大、東工大の9大学で全学の重点化が行われた。

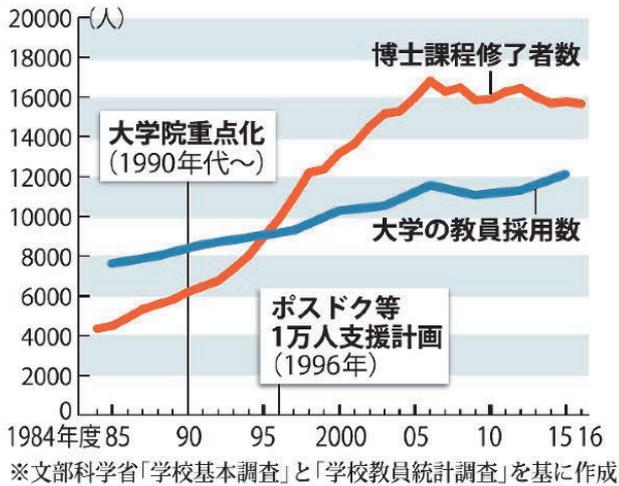
その後平成20年(2008)までに全学の大学院重点化を終えた国立大学は上記9大学と、東京医歯大、筑波大、新潟大、金沢大、神戸大、岡山大、広島大の16大学であった。ところが予算抑制を図る旧文部省(平成13年(2001)文科省となる)の指導や、平成21年(2009)には博士課程の定員見直し等があって、大学院重点化は上述の大学と、特例として医学系研究科と若干の例外以外は殆ど実施されず、文科省による一部有力国立大学の優遇策だとの批判も出ている。



ポスドク一万人計画

大学院博士課程を修了後、大学教員や、企業の研究機関等の常勤職員になる前に、自分の技術を磨き、経験を積む為に、国内外の大学等で、非常勤の職員として働く所謂ポスドクは、研究者の層を厚くし、日本の国力にはプラスと考えられ、平成8年(1996)からポスドク1万人計画が始まった。研究者を期限付きで雇う為の資金を大学等の研究機関に国が給付するものであった。しのぎを削る優秀なポスドクは3,000人と見積もられ、国立大学の正規のポストに就き、残りの7,000人は企業や、小中学校の教員として受け入れられると想定していた。2000年代に入ると、大学院博士課程修了者は、目標の1万人を遙かに超えて増加した。

博士課程修了者数と大学の教員採用数の推移

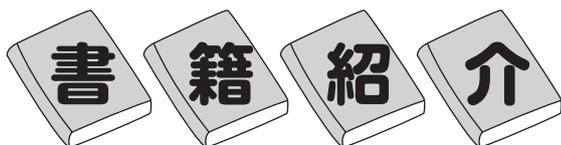


ポストドク後の活躍が期待されながらも、現実には職がなく、「高学歴ワーキングプア」が問題となった。本来社会の中心で活躍すべき有能な人材が、活躍すべき場がないという大きな社会的損失を生じ、大学院進学者の減少、国力低下となることが危惧されている。事実日本の大学院では、この20年間で留学生はほぼ倍増しており、現在では院生の約20%が留学生で、5万人を超え、尚増加している。母国での将来の活躍を夢見て頑張る留学生に比べ、夢見て頑張ることが出来ない状態を問題視する声が出ている。

こうして戦後の大学改革に伴い、時代が進むにつれて、「親方日の丸」と言われた大学運営に、民間的要素が求められるようになり、国立大学の法人化へと流れが進んでいく。(以下次号)



下山敦士



自書紹介

『世界の美しい病院 —その歴史』

昭48 石田純郎

このたび、吉備人出版より『世界の美しい病院 —その歴史』（価格2,750円）を刊行した。ヨーロッパ、アメリカ、オセアニア、中東、東南アジア、東アジアの23か国、88施設を収載した。紀元前4世紀から20世紀初めまでに創設された施設を1994年から2018年までに実際に訪れ、私とそのパートナーが撮った写真で紹介した。『病院』（医学書院刊）に2013年から2014年まで21回、『大塚薬報』（大塚製薬工場刊）に2015年から2019年まで40回連載した記事を年代別、国別、機能別に再編集した。

古代ギリシャのアスクレピオス神殿は紀元前4世紀から紀元後4世紀の間に、古代ギリシャ文化圏600か所置かれた施設で、その多くは劇場、音楽堂、競技場、闘技場、浴場、井戸、泉水などのアスクレピオスの神域を持っていた。アスクレピオスは古代ギリシャ神話の医の神で、病人あるいはその代理人は、浴場、泉水などで身を浄め、アスクレピオス神像の祀られている本殿で祈り、お籠り堂で眠りに就き、夢の中にアスクレピオスが現れ、治療、あるいは治療の示唆をした。

それを神官に告げ、数日から数か月間、アスクレピオス神殿に滞在し、病気が軽快して退院した。心理的、神秘的要素が強く、合理的ではなかったが、ヨーロッパの医史学者は病院のルーツとみなしている。日本では未紹介のギリシャのメッセネ、トリカラ、トルコのプリエネなどの6施設を紹介した。

ヨーロッパ大陸のフランス、イタリア、ドイツなどの病院は中世に病人を含む困窮者（老人、貧者、孤児、捨て子、狂人、売春婦、巡礼者）に住と食を与えた修道院由来のものが大半である。19世紀中に中世以来の名称のまま現在の病院に専門化した施設が多い。フランスの8施設、イタリアの5施設、ドイツの9施設を紹介した。ペスト・ハウス（オランダ1施設、17世紀）、レプラ・ハウス（フランス1施設、12世紀、ノルウェー1施設、15世紀、日本、韓国各1施設）を紹介した。大学病院（オランダ、17世紀）、最初の近代的病院・ウィーンのアルゲマイネス・クランケンハウス（18世紀末）、16世紀末以後、日本に影響を与えた4施設、日本の6施設、日本が台湾と韓国に造った4施設も紹介した。

イスラム圏の病院はモスク由来であるが、15世紀のトルコの施設も紹介した。

ヨーロッパの歴史ある病院は自身の醸造所でワインやビールを醸造し、入所者、修道士、運営者が嗜んだほか、市販し運営費に充てた。ヨーロッパ大陸で歴史ある病院を取材することは、その病院のビールやワインを嗜むことを意味した。どの病院にもチャペルがあり、入所者の魂の救済が優先したことが、機能だけを追求する現在の日本の病院と大いに異なる点である。

（福山市中国労働衛生協会）



教室だより

(令和3年4月～令和3年8月)

細胞組織学

昨年度より続く新型コロナウイルス感染症の流行は収束の兆しすら見えず、本学もオンラインでの学部・大学院教育実施の継続を余儀なくされています。今年度も「第一解剖学同門会」の開催は見送りとなりましたが、同門の先生方のご清祥を心より祈念いたします。研究面では、学内共同研究“UCP1 expression in the mouse adrenal gland is not upregulated by thermogenic conditions”がBiochemical and Biophysical Research Communications誌に掲載されました(藤田、土生田、大内ら)。また「フタホシコロロギのゲノムの解読とゲノム進化」が徳島大学やハーバード大学などの共同研究でCommunications Biology誌に掲載されました(板東)。学会活動では、8月に第61回日本先天異常学会学術集会在オンライン開催され眼科学(神崎医員、松前洋医員、森實教授)との共同研究「レーバー先天性黒内障16病態モデルiPS-RPEの作製と解析」について発表しました(大内、藤田、佐藤ら)。教育面では、医学修士科目『人体構造学』は約一年ぶりの対面授業となりました。医学科1年次科目『医学セミナー』は対面およびTeamsオンラインのハイブリッドで行いました。解剖学系オムニバス講義『人体の構造:入門』はオンラインで実施し、本試験は感染防止策に配慮し対面で行いました。

(板東 記)

人体構成学

大塚愛二教授の最終講義「私の解剖学」は3月11日に“解剖実習室”で開催されました。多数の皆様のご参加ありがとうございました。また、最終日には先生の長きにわたるご指導に教室員一同感謝するとともに、今後のご健勝をお祈りするのための小さな会を催しました。

3月の解剖学会総会もWEB開催となり、百田が「人体解剖学デジタル教材の開発と応用」と題しランチョンセミナーで発表しました。教育のICT化、いわゆるEdTechと呼ばれる分野がますます盛んになるなか、岡山大学とPanasonicが共同開発したMeAV Anatomieを普及させていきたいと思えます。また、百田は5月25日には新任教員向け、7月13日には3学部合同のFD、7月14日にCTEにてオンライン講義の作り方についてのセミナーを行いました。小グループに分かれて短いオンライン講義を作るという課題を皆さん無事にこなしてくれたことから、それなりの成果があったようです。

小阪助教グループは、第30回日本がん転移学会学術集会・総会(WEB開催 2021年7月29日・30日)にて、「Clinical value of OCT4A/SPP1C axis in endometrial and lung adenocarcinoma」と題した発表を行いました。10月から産婦

人科より大学院生1名が出向し、ヒト生物学から医学応用を目指す研究を共に進める予定です。若くて意欲的な院生の加入で教室も活気づくことを期待しています。

夏の解剖でイタリア人学生達とにぎやかなはずでしたが、COVID-19の影響で今年はかなわず、夏解剖は修士と医学科有志のみでの実施となりました。同様に、6月のともしび会の総会もやむなく中止となりました。

間もなく迎える新学期には解剖の講義と実習が控えています。デルタ株が世界的に猛威を振るう中、教室員一同、感染防止につとめ安全第一で解剖実習を進めて参ります。(百田 記)

脳神経機構学

旧脳代謝研究施設機能生化学部門、神経情報学分野の初代教授森 昭胤名誉教授が4月27日にご逝去されました。てんかん学、神経酸化ストレス学の発展に貢献され、とくにグアニジノ化合物およびフリーラジカル消去物質に関する研究のバイオンニアとして数多くの業績を残されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

人事関係では、客員研究員の磯岡奈未が3月末で退職し、4月から病院薬剤師として働いています。菊岡 亮院生が博士学位を取得し修了しました。4月からは客員研究員として引き続き当研究室で研究を行っております。また、今福史智院生が修士課程を修了し、企業に就職しました。

教育では、4月から1年生の医学セミナー(チュートリアル)、2年生の神経構造学(神経解剖学)の講義・実習が始まりました。新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、講義は2教室に分かれての対面で行いました。頭蓋骨および脳肉眼解剖実習は緊急事態宣言に入る前になんとか対面で行えましたが、組織学実習はオンラインで行うなど、今年も対応に追われました。また、5月には徳永浩司先生(岡山市市民病院脳神経外科部長)、田中朗雄先生(脳神経センター大田記念病院副院長・放射線科部長)にオンラインで特別講義を実施していただきました。

研究活動では、宮崎が3月の第94回日本薬理学会年会(札幌)で「アストロサイト-ミクログリア連関がもたらすロテノン誘発ドパミン神経障害」について、第126回日本解剖学会総会・全国学術集会(名古屋)で「妊娠・授乳期エポキシ樹脂曝露による新生仔マウスの脳発達異常へのエストロゲン受容体 β の関与」について発表しました。5月の第62回日本神経学会学術大会(京都)、7月の第15回パーキンソン病・運動障害疾患コンgres (MDSJ)(仙台)で宮崎が発表しました。また、第48回日本毒性学会学術年会(神戸)で宮崎がシンポジストとして「アストロサイトにおけるメタロチオネインを標的としたドパミン神経保護」について講演しました。第51回日本神経精神薬理学会年会(京都)で浅沼教授、宮崎が発表しました。

3月に菊岡院生が岡山医学会賞(新見賞)を受賞しました。

研究活動の詳細および発表論文に関しては、教室のホームページ(<http://www.okayama-u.ac.jp/user/mmb>)をご覧ください。(宮崎 記)

細胞生理学

同窓会の皆様、こんにちは。細胞生理学です。令和3年4月から令和3年8月の近況をご報告いたします。新型コロナウイルス感染症が世界中に流行し、岡山大学でもワクチンの職域接種が進む中、7月23日から東京オリンピック・パラリンピックが始まります。細胞生理はスタッフの檜山講師、吉川助教、藤村助教が大変熱心に研究に取り組み、学生も、とてもよく取り組んでいます。また、秘書小野さんが、毎日、手作りの調理パンやシフォンケーキを作っておくので、学生は朝食や昼食にそれを頂くことが出来て、明るく楽しい雰囲気です。研究テーマとして、神経科学とがん生物学や免疫学等の融合的な研究を進めており、がんと神経系の連関や、また、免疫アレルギーと神経系との連関についても、興味深い現象を見つけています。修士課程大学院生2年生（浅賀君、小村さん）は就職活動中、修士課程1年生は、藤田さんと奥谷さんは免疫の研究、前田さんは神経の研究、西條君はがんの研究に取り組み、実験を連日頑張っています。博士課程大学院生は、長尾君（修士から進学）は免疫の研究、珊瑚 徐さん（Shanshan, POST-ONECUS）は神経の研究に取り組み、李君（ARTプログラム2年）は日中は病院研修し、夕方から可能な限り細胞生理で実験しています。臨床教室からの大学院生として、呼吸器・乳腺内分泌外科から大谷医師と朱医師（肺がんや乳がんの研究）、皮膚科から安富医師（メラノーマの研究）と浦上医師（アトピー性皮膚炎の研究）、整形外科から片山医師（がんの研究）に、ご参加いただいています。大学院生を送って下さり、豊岡教授、森実教授、尾崎教授に感謝いたします。5-6月に、生理学1の医学部講義・実習を、オンラインで実施しました。教室スタッフ（神谷教授、檜山講師、吉川助教、藤村助教）。（神谷 記）

システム生理学

2021年4月に日本学術振興会科学研究費・基盤Aの研究課題「新規メカニカル負荷装置の開発を通じた次世代メカノメディシンへの挑戦」が採択され、研究を開始しました。また防衛装備庁安全保障技術研究推進制度の研究課題「メカニカルストレス負荷システムの開発」を継続して行っています。

岡山大学のオープンキャンパス（ウェブ開催）で、当研究室のスタッフによる研究プロジェクトの紹介動画を公開しました。専門用語を使わずに研究を紹介することにより、一般の方にもわかりやすい内容になっています（https://webcampus.jp/okayama-u/video_485.html）。

博士課程の王晨の研究論文がBiochemical and Biophysical Research Communications誌およびMethodsX誌で出版されました。また、博士課程の梁の宇宙生物学に関する論文がFrontiers in Cell and Developmental Biology誌で出版されました。

今期は以下の学会で発表を行いました。第60回日本生体医工学会大会（6月：成瀬・片野坂・高橋）、The Third International Conference of Microfluidics, Nanofluidics, and Lab-on-a-Chip（7月：高橋・招待公演）、ヨーロッパ心臓病学会（8月：劉）。ヨーロッパ心臓病学会での発表は、学会期間

中の学会ニュースで取り上げられました。

メンバーは4月より修士課程学生に李強を迎えました。

（高橋 記）

生化学

2月5日、藤瀬賢志郎大学院生（博士課程3年）の学位論文審査が無事に終了しました。（学位論文「Mutant BIN1-Dynamin 2 complexes dysregulate membrane remodeling in the pathogenesis of centronuclear myopathy. 変異型BIN1-Dynamin 2 複合体による膜リモデリング異常による中心核ミオパチーの発症機序」）。2月6日-7日、竹田助教が山口大学理学部生物・化学科のオンライン集中講義「細胞ダイナミクス特論」を行いました。3月25日、勢力沙也加大学院生、村井真彩大学院生（修士課程2年）が修士課程を無事修了し、修士の学位を授与され（学位論文審査は1月25日に終了済。勢力論文「腎糸球体ポドサイトにおけるダイナミン1の微小管制御機構の解析」、村井論文「骨格筋細胞におけるBARドメイン蛋白質BIN 3の機能解析」）、藤瀬賢志郎大学院生が博士課程を早期修了し、博士の学位を授与されました。

4月1日、濱崎英理子さんが博士課程に入学しました。4月1日、竹田助教が大阪大学蛋白質研究所客員フェロー（兼任）になりました。6月30日、太田助教は第66回バイオ情報学研究会（6月30日オンライン開催）において、「Elementary flux mode型経路における代謝産物分子の生成・利用状態のスナップショットとしての化学量論的な代謝ネットワーク構造」と題する講演を行いました。7月27日、李建振大学院生（博士課程4年）らの研究成果が論文「Dynamin 2 and BAR domain protein paccin 2 cooperatively regulate formation and maturation of podosomes」としてBiochemical and Biophysical Research Communicationsに掲載されました。（竹居 記）

分子医化学

魅力ある教育研究分野をつくるべく教育および各研究テーマに取り組んでいます。

人事関係では、5月に同志社大学脳科学研究科より宮崎晴子先生が助教に着任されました。学位を取得した納所秋二先生、三海晃弘先生（インプラント再生補綴学）が引き続き当分野で共同研究を継続しています。博士研究員のHa Thi Thu Nguyenさんが7月に母国ベトナムに帰国されました。

学会活動の方も昨年からのCOVID-19の影響を受けております。毎年度前半に開催されている日本結合組織学会、日本軟骨代謝学会、日本神経科学学会、日本骨免疫学会、日本歯科補綴学会などがWEB開催やHYBRID開催となりました。大橋は日本結合組織学会の大高賞選考委員長を務めました。理事会・総会で2年後の日本結合組織学会の第55回大会学術大会長に選出されました。宮崎助教は7月に日本神経科学学会（神戸・オンライン）で発表しました。今年度は分野からの学会発表数が低下した感が否めませんが、今のうちに実験に打ち込み来年度の学会発表に備えたいと思います。

教育関係では、大橋は4月より修士課程医歯科学専攻長を拝命しています。これまでの四年生博士課程学務委員会の担当から修士課程全般の担当に代わりますので担当する内容も異なりますが、定員充足をさせながら学生の就職進学のお手伝いを行っていく予定です。現在、COVID-19の感染拡大防止の対策を取りながら、9月に行われる医学科3年次生の担当授業「基礎病態演習」の準備に取り掛かっています。(大橋 記)

薬理学

現在の薬理学の構成員は、代行教授の阪口政清先生、助教の逢坂大樹、王登莉、非常勤研究員の劉克約、佐藤まどか、院生(博士課程)の進吉彰、喬寒棟、村岡玄哉、事務職員の矢田真理子の9名です。

【教育】 4～5月、1年生対象の医学セミナーは、“COVID-19”と“輸血”の2テーマについて調査研究を対面で開始しましたが、直後に緊急事態宣言が出されオンラインに変更。さすがのネット世代、すぐに適応し発表を立派にやり遂げました。5～6月、3年生対象の薬理学講義・実習は全てTeamsで行いました。西堀正洋名誉教授(特任・特命教授)に多くの講義を担当していただき、外部講師として近畿大学医学部・高橋英夫教授、香川大学医学部・西山成教授、就実大学薬学部・森秀治教授および豊村隆男講師にお願いしました。実習は、過去の薬理実習を撮影したビデオに説明を加えるなどした動画をWeb配信しました。試行錯誤をしながらのWeb講義&実習となりましたが、MRIの教室配属に多くの学生さんが薬理学を希望してくれたことで、その苦勞も報われたと思います。

【表彰】 6月開催の岡山医学会総会において、高橋陽平先生(本年3月博士課程修了)が結城賞を受賞しました。

【研究】 日本血液製剤機構(JB)との共同研究「敗血症時の溶血処理をターゲットにした新たな治療戦略の検討」に関し、月に2回実施している研究ミーティング・セミナーでは双方活発な意見交換が行われ、産学連携での研究開発に邁進中です。また、6～7月にかけて、第139回日本薬理学会近畿部会および第44回日本神経科学大会で王登莉助教が「抗HMGB1抗体による脳出血治療」等について、第34回創薬・薬理フォーラム岡山(代表世話人:西堀正洋)で喬寒棟院生が「抗酸化ストレス抗体の保護効果」について発表しました。

新教授の着任を心待ちにしながら、現教室員一丸となって薬理学の教育・研究に取り組んでまいります。(逢坂 記)

病理学(免疫病理)

4月末には第110回日本病理学会総会がハイブリッドで開催され(2021年4月22日～24日:京王プラザ、東京)、口頭発表者のうち大学院生2名(高桐、李春寧)は現地で発表しました。新型コロナ感染拡大は収まらず、5月から6月には岡山県でも緊急事態宣言が発令され、対面で予定していた講義(1年:医学セミナー、プロフェッショナルリズム・行動科学I、3年:病理学I講義・実習)は昨年同様、全てオンラインで実施しました。オンライン授業は2年目となり、教員も学生もTeams

による授業、Moodleの使用になれ、スムーズな授業を行えました。対面授業にもどっても、ICT教育は活用したいと考えています。研究面では、大学院生・孫翠明先生の論文がJournal of Advanced Research(IF2020:10.479)に受理され、8月の学位審査を経て9月に学位取得予定です。理化学研究所との共同研究(精密な分子標的型抗がん剤の開発)は、理研のプレスリリースに取り上げられました。人事面では、大学院生・中村 薫先生は4月からART大学院生となり、岡山大学病院で初期研修を開始しています。また、本学で医学博士を取得した、Aye Moh Moh Aung先生(ミャンマー出身)は、5月から非常勤研究員として研究に取組んでいます。(松川 記)

病理学(腫瘍病理)

皆さま御存知のように2020年は医学部創立150周年を迎え、吉野は記念事業実行委員長として活動を行っておりましたが、コロナ禍の収束が全く見通せない状況が続き150周年記念式典も一年延期となりました。6月24～26日に岡山コンベンションセンターにて第61回日本リンパ網内系学会総会(会長吉野)、第24回日本血液病理研究会(会長佐藤)を開催いたしました。ハイブリッド形式での開催でしたが、教室関係者が多数座長を務めたり発表を行い盛会のうちに終えることができました。本学会は会員数約800名ですが、有料参加者数652名で知りうる限りでは最高の数字となりました。現地参加は半分程度ですが、久しぶりのface-to-faceの会となり、やはり学会は実際に会って議論を進めることが重要だと再認識する機会になりました。その後感染者が全国的に増加し、第5波となり僅かの機会を捉えての開催でした。関係各位にこの場を借りて感謝申し上げます。11月4日、5日の第67回病理学会秋期特別総会(会長吉野)は田中が事務局長として全力を尽くしており、参加者はワクチン接種を受けていると考えられるので現地開催に向けて準備を進めています。第12回アジア太平洋地区病理学会(APIAP)、日本IAPのスライドセミナーは同時開催を目指してきましたが諸般の事情を考慮してWEB開催を予定しています。

教室では4月に堀川恭佑、直井友亮の2名が入局し、病理研修並びに研究をスタートしています。7月には田中健大が講師に昇任しました。人事に関しては4月から谷口恒平が広島市民病院へ、小野早和子が香川県立中央病院へ、溝渕光一が香川労災病院、吉田裕輝が中国中央病院へ異動となりました。また、5月から表 梨華が福山医療センターへ異動となりました。学位取得は白 芷毓さん、坂本美彩さんが修士課程を修了し、あと数名が博士号取得の審査を控えています。コロナに対するワクチンで明るい希望が見え始めてはいますが、まだまだ楽観視できない状況下での難事業となることが予想されます。教室員、教室関係者、同門の皆様のご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。(田中 記)

病原細菌学

医学部教育関係では、4月に細菌学の講義を行い、続く5月には細菌学実習を行いました。5月に入り新型コロナウイルス

感染症の患者数が増加したため、急遽岡山県も緊急事態宣言の対象となりました。岡山大学の指針に従い、実習では学生を前半・後半の2つのグループに分け、少人数で行うことになりました。実習内容が通常時の半分程度となるため、細菌学分野の教室員で何度も議論を行い、内容を厳選しました。実際の実習では、アルコール消毒液の設置、接触および飛沫感染対策、学生の配置を疎にする等の対策を行いました。緊急事態下での実習でしたが、学生は集中して実習に取り組んでおり、なんとか乗り越えることができました。

大学院教育関係では、8月に大学院博士課程4年生のI Putu Bayu Mayuraさん（インドネシア共和国留学生）が、*Elizabethkingia anophelis*, an emerging pathogen, inhibits RAW 264.7 macrophage infection（新興病原体*Elizabethkingia anophelis*はRAW 264.7マクロファージの機能を阻害する）の題目で学位発表を行いました。本年の9月に卒業し帰国する予定です。また、修士課程2年生の三好 諒さんが修士論文に向けてカルバペネム耐性腸内細菌科のプラスミド解析について研究に取り組んでいます。

人事関係では、昨年度2月に愛媛県立医療技術大学に教授として栄転した美間助教に代わりまして麻布大学より内山淳平准教授が着任いたします。（後藤 記）

病原ウイルス学

4月より博士課程1年の李さんが加わりました。非常事態宣言などで滞っていた機器の搬入も4月には終わり、本田教授の新体制で研究が少しずつ動き始めています。4月からウイルス学講義が始まり、フィジカル・ディスタンスを取るために大講義室や講義室を併用しながら対面で実施しました。本年度の特別講義は「C型肝炎ウイルス」加藤宣之名誉教授（対面講義）、「ネオウイルス学」本学資源植物科学研究所（倉敷）鈴木信弘教授（オンライン講義）でした。前任の山田雅夫名誉教授、山下信子非常勤講師も講義を担当しました。新型コロナウイルスの感染拡大も予想が難しいため、実習は当初予定通りにオンデマンド形式とリアルタイム配信を組み合わせて行いました。学生からは実際に手を動かしてやりたかったとの声が多くありました。ウイルス学試験は警戒レベルに合わせ、時期を二度延期して対面で実施しました。4月の医学セミナーは本田教授が担当し、対面形式で実施しました。学生生活最初のスタートは不安もあり、実際に顔を見て話ができる貴重な機会となりました。7月からは病原細菌学とともに教養教育科目「感染症と戦う」を担当し、オンライン形式で実施しました。また、6月5日の第120回岡山医学会総会にて「ウイルス持続感染から紐とく病態発生素地」と題して本田教授が講演いたしました。（難波 記）

疫学・衛生学

5月1日に、高尾総司准教授、松本尚美助教が就任しました。2020年9月に博士1名、2021年3月に修士3名が卒業し、それぞれの分野で活躍しています。4月には3名が博士課程に、2

名がMPH（公衆衛生学修士）コースに入学し勉学に励んでいます。

3月10日には、岡山県クラスター対策班（OCIT: Okayama COVID-19 cluster Intervention Team）が、『岡山大学SDGs推進表彰（President Award）優秀賞』を受賞しました。表彰組は、「新型コロナウイルス感染症の感染防止対策及びクラスター対策」です。OCITは、医療機関や福祉施設において集団発生した場合などに、速やかに感染拡大防止対策を講じられるよう、編成されたチームです。また、事業所等への感染予防研修も実施しています。今後の県内での新型コロナウイルス感染症の発生予防・クラスター対策・医療機関逼迫防止を目指すとともに、将来起こりうる新興感染症対策への県内での横のネットワーク設立を目指す取り組みが評価を受けました。OCITにご協力いただいている学内外の皆様にも深く御礼申し上げます。

また、岡山県の依頼を受けて新型コロナウイルスワクチン接種後副反応調査を実施しました。本調査の目的は、岡山県民の方へ正確な情報提供を行うことです。最終報告（7月6日付）を講座HPで公開しております。接種の判断や準備の参考にしていただけると幸いです。

当講座では、社会医学系制度専門医制度の一つである「岡山県社会医学系専門医研修（地域保健・精神保健）プログラム」に協力しております。社会医学の重要性がますます高まる中で、今後のさらなる発展が期待される所です。

講座HPには、「新型コロナウイルス関連情報」や「岡山県内の感染状況・医療提供体制の分析」を掲載しております。今後ともご支援いただきますよう宜しくお願い致します。

（鈴木 記）

公衆衛生学

令和3年度4月～8月の教育活動としては、医学科1年次生を対象とした医学セミナー、大学院修士課程における社会歯科学の講義を行いました。COVID-19流行下における実施であったため、一部を除きオンライン講義となりました。また、2年次生（学士編入生）を対象とした早期医学体験実習を行いました。

令和3年度4月～8月の研究活動としては、久松准教授が5月のAmerican Heart Association Epidemiology and Prevention | Lifestyle and Cardiometabolic Healthで、また福田助教が7月のInternational Congress of Physiologyで、それぞれ学会発表（オンライン）しました。

現在行われている研究としては、神田教授が研究代表を務める「高校生eスポーツアスリートにおける心身の健康実態の解明」（基盤研究C）、「地域住民における測定値自動送信技術を用いた家庭血圧管理状況と血圧変動要因に関する探索的研究」（オムロンヘルスケア株式会社との共同研究）、地域住民における飲酒状況と家庭血圧の両変動およびその関連要因に関する研究（お酒の科学財団公衆衛生学領域助成）、久松准教授が研究代表を務める「家庭血圧の長期縦断研究からみた血圧変動の共振現象及び無症候性脳血管障害との関連」（基盤研究C）、福田助教が研究代表を務める「地域保健活動はどのように住民の健

康に寄与したのか? - 鳥根モデルの歴史的変遷を例に」(若手研究)などがあります。

令和3年4月から、博士課程に3名、修士課程に1名、それぞれ大学院生が入学し、ますます活発な研究教育活動を続けています。(久松 記)

免疫学

研究面では鶴殿教授、西田、工藤、徳増が7月1~3日に開催された、第25回日本がん免疫学会(和歌山)で口頭発表を行いました。9月以降もそれぞれが日本癌学会や日本免疫学会での発表を予定しております。また西田の論文がJournal for ImmunoTherapy of Cancerに受理されました。

教育面では、医学科3年生の寄生虫学が例年より時期がずれて4月の開講となりました。COVID-19の影響により登校制限がかけられたり解除されたりと状況が転々としており、外部講師の先生方をお招きするのも難しい状況でしたので、昨年度に引き続きオンラインでの動画配信により授業を実施いたしました。9月からは3年生の基礎病態演習そしてMRIと続き、年明け1月からは2年生の免疫学も始まります。また、時期を見計らって大学院講義に慶應義塾大学の曾我朋義先生をお招きする予定となっております。岡山大学でも教職員、学生への新型コロナウイルスワクチン接種が現在進められていますが、岡山県内では再び感染者拡大の傾向となっており、今年度もCOVID-19への対応に追われた講義が続きそうです。

(工藤 記)

法医学

実務面では、今年の剖検数は7月末現在で92体となっており、昨年をやや下回り平穏な日々が続いております。ここ数年来の年間解剖数の減少傾向は変わらず、今年の通年の総解剖数は昨年並みの160体前後になるものと予想されます。

教室の人事では、30年以上にわたり勤務した山本雄二講師が3月に定年退職しました。DNA多型やプランクトン検査、学部学生教育等において教室に大変尽力してもらいました。感謝と慰労の念に絶えないところです。第六管区海上保安部の研修生(医学部研究生)として法医解剖補助や溺死体解剖事例の死後CT画像の解析に取り組んできた西本翔祐さんは、3月末で研修期間が満了しました。また今年で3年目となっている検視官受入(検視官や検視官補になるために警察大学校が行う講習の一環、法医学教室での法医解剖や解剖関連検査等の実地研修)は、6月14日から一週間、岡山県警察からの2名を受け入れました。今年はコロナ禍で他府県からの警察官受け入れが困難であった上、期間も短縮されました。

学術面では、今年の6月に開催予定であった第105次日本法医学会学術全国集会は、コロナ禍で延期となり、9月に福岡県で開催予定です。教室からは小林大学院生の「腐敗した剖検組織織料のヘマトキシリン・エオジン染色像で観察される沈着物についての検討」と竹居大学院生の「ミオグロビンの死後血中移行メカニズム解明に関する予備的検討」の2演題を登録して

います。

教育面では、今年の1月から8月にかけて、選択制臨床実習で6年生延べ14名が法医解剖、解剖事例検討等を体験し、死体検案や裁判所への証人出廷に同行できた学生もいました。時期により経験できる法医解剖体数に多少はありましたが、それぞれに実りある実習であったと期待しています。末筆になりましたが、同窓の先生方のご健勝をお祈り申し上げます。

(谷口 記)

腫瘍微小環境学

前任の加藤宣之先生の後任として2021年4月より新たに富樫が教授として着任し、分野名を腫瘍ウイルス学から腫瘍微小環境学と改めました。ヒトの臨床検体が最も病気の真実に近いという考えから、マウスや細胞の実験に加え、実際に患者さんの臨床検体を用いた癌のゲノム解析の研究から、近年注目されているがん免疫療法に関わる腫瘍微小環境の研究まで幅広く行っています。特に、腫瘍免疫・微小環境の基礎研究からトランスレーショナルリサーチ(TR)/リバーストランスレーショナル(rTR)を主なテーマとし、不均一な組織の微小環境を明らかにするために、臨床検体の1細胞レベルの解析に取り組んでいます。臨床の先生方の多大なるサポートのもと、大学院生が4名も参加してくれ、賑やかに研究室をスタートしています。この場を借りて深く御礼申し上げます。

研究費として富樫がAMED次世代がん・革新がん、JST創発研究、JSPS科研費、また民間財団等に複数採択されております。前任の加藤特命教授のテーマでもある肝炎関連のAMED研究にも引き続き取り組んでいます。成果としては、以前から取り組んできた腫瘍微小環境のクローン進展に関する論文とがん免疫療法の耐性に関する論文がリバイス中で、近いうちに世界に発信できると思っています。また、国内外複数の学会から富樫が招待され、シングルセルシーケンシングやがん免疫療法に関する研究についての講演を行い、さらに日本免疫学会主催の「免疫ふしぎ未来2021」で、子ども向けにがん免疫に関しての講演も行いました。

まだスタートしたばかりのこれからの研究室ですが、我々の研究に興味がございましたら是非お声掛けください(ytogashi@okayama-u.ac.jp)。今後とも皆様の温かいご支援、並びにご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしく願い申し上げます。(富樫 記)

細胞生物学

[人事] 令和3年4月より、当教室で博士の学位を取得した友信奈保子さんが、助教に着任いたしました。新しいメンバーとして博士課程(ARTプログラム)に越智俊樹さん、修士課程に大磯和真さん、吉澤智香子さんが加わりました。

[研究成果発表] 阪口政清教授が岡山肺癌基礎研究会(令和3年6月)に参加し、招待講演者として「S100A8/A9が増悪するメラノーマの肺転移を制御する抗体の開発」に関する研究成果について発表を行いました。山本健一助教が筆頭の

論文「Presence of Microplastics in Four Types of Shellfish Purchased at Fish Markets in Okayama City, Japan」がActa medica Okayama誌(2021, 75 (3): 381-384)に掲載されました。また阪口教授が共同研究を行った論文がJournal of Cardiology誌(2021 Jul; 78 (1): 12-16)、Frontiers in Oncology誌(31: 11: 665273)、International Journal of Oncology誌(58 (6): 29)、International Journal of Cancer誌(doi: 10.1002/ijc.33713)にそれぞれ掲載されました。

[受賞、研究資金の獲得状況] 研究費の獲得では、橋渡し研究戦略的推進プログラムのシーズAに村田 等講師が、特別電源所在県科学振興技術振興事業に阪口政清教授が新規採択されました。また継続課題の科研費(基盤B 1件、基盤C 3件)、AMED(創薬ブースター、ACT-M、シーズA)の事業にも鋭意取り組んでおります。

共同研究については、ノーベルファーマ株式会社、株式会社ホロンシステム、株式会社カイタック、株式会社資生堂と引き続き進めております。

今後も教室員一同研究に励んでいきたいと思っておりますので、ご指導の程よろしくお願ひ申し上げます。(木下 記)

細胞化学

当分野では、Photodynamic therapy (PDT) によるがん治療の基礎研究、ミトコンドリア制御と細胞機能変化に関する研究、動脈硬化の発症機序解明と分子イメージング技術(体内診断法)の確立、がんの新規画像診断・治療法(Theranostics)の確立、酸化脂質を中心とするメタボノミクス研究、低酸素により誘導される細胞外マトリックス分解酵素であるADAMTS1に関する研究が、次世代がん医療創生研究事業(AMED)、特別電源所在県科学技術振興事業(岡山県)などの公的資金によって実施されています。これらの研究については、細胞化学、中性子医療研究センター、産学官連携センターの研究スタッフ、工学部、薬学部などの学内研究者、マレーシアからの留学生(博士課程)、インドネシア、中国からの留学生(修士課程)さらには、京都大学の共同研究者が従事しています。

学術関係では、博士課程のマレーシア留学生Melissa Siaw Han Limさんが5月に行われた学位審査を経て学位を取得しました。

教育関係では、4月の修士課程生化学(脂質)は対面授業を行うことができましたが、新型コロナウイルス感染拡大により授業体系が再度オンラインに変更となり、1年生の医学セミナーでは初回と2回目は対面授業を行うことが出来ましたが、それ以降はオンラインとなりました。初回の学生同士の話し合いでテーマが「難病」と決まり、難病に関連する課題を各自の視点から調べてもらいました。各学生の調査資料の発表に対して、他の学生からの様々な質問や意見を元に加筆修正を行って、最終的に興味深い冊子にまとめることが出来ました。

(小淵 記)

消化器・肝臓内科学

新型コロナウイルス感染症は依然猛威を振るい続け、岡山県にも一時緊急事態宣言が出される中、侵襲的検査処置を行う内科として、感染対策を適切に行ったうえで、安全、安心をスローガンに就任7年目を迎えられた岡田裕之教授以下、医局員一丸となり診療、研究、教育に従事しています。また5月からは内科輪番制による新型コロナウイルス感染患者の診療にも加わっております。学会関連では岡田教授が日本消化器内視鏡学会本部監事に就任され、7月31日に「第17回消化器病における性差医学・医療研究会」を主催されました。また実践地域内視鏡学講座の河原祥朗教授が7月11日に「日本消化器内視鏡学会中国支部例会」を主催されました。

スタッフ人事面と致しましては4月に肝炎診療を中心に長年活躍した安中哲也(H13)が福山市民病院へ赴任し、後任として和田 望(H19)が助教に就任。総合内科との二刀流として大いに活躍してくれた榮 浩行(H20)が津山中央病院へ赴任となりました。7月には井口俊博(H18)が三朝地域医療支援寄付講座助教へ就任したのに伴い、実践地域内視鏡学講座助教の後任として濱田健太(H21)が就任致しました。

大学院生、医員の人事面では、4月に河井裕介(H21)が三豊総合病院へ、岡 昌平(H22)が日本鋼管福山病院へ、亀 高大介(H24)が岩国医療センターへ赴任しました。入れ替わりに田尻和也(H24)、菊池達也(H25)、平井亮佑(H26)、高橋史成(H26)、國富恵美(H27)、増田修子(H28)、嶋崎岳(H29)が帰局し、病棟医として消化器内科の高みを目指すべく日々研鑽を積んでおります。

コロナウイルスの影響はまだしばらく続くことが予想され、厳しい条件下ではありますが引き続き消化器内科の発展のために医局員全員で精進し、同窓の皆様にご協力できるような努力致しますので、引き続き御指導・御鞭撻の程よろしくお願ひ申し上げます。(川野 記)

血液・腫瘍・呼吸器内科学

岡山大学同窓の先生方におかれましては、平素から多大なご支援をいただき御礼申し上げます。当教室の現況の報告をさせていただきます。

前田嘉信教授は、2021年4月より岡山大学病院長として、診療、研究、教育のすべての分野でリードする日本屈指の病院を目指して活動を開始しました。「患者さんのために、保健・医療の発展のために、自己ではなく社会のために」という理念は、早くもコロナ禍の中で様々な場面において「チーム医療」という形で実現されており、各診療科、同窓の先生方のご協力に深く感謝申し上げます。

木浦勝行教授を中心とする呼吸器グループでは、田端雅弘教授(腫瘍センター)と瀧川奈義夫教授(川崎医科大学総合内科学4)が会長となり、2021年8月7～8日に第59回日本肺癌学会中国・四国支部学術集会、第63回日本呼吸器学会中国・四国地方会をそれぞれ開催しました。現地開催としましたが、一部Webでの座長、発表も交える形として、感染対策に十分な配

慮をして、無事盛会のうちに終了いたしました。併せて、「肺の日・呼吸の日 市民公開講座」を光延文裕教授（老年医学分野）が主催し、Web開催いたしました。

診療においては、引き続き治験、臨床試験、新規治療に積極的に取り組んでおります。1995年より始まった当科での造血幹細胞移植は、2021年4月末で1,000例（同種移植754例、自家移植246例）を達成しました。これも同窓の先生方をはじめとする多くの先生方のご尽力の賜物であり、重ねてお礼申し上げます。引き続き、中国ブロックの「造血幹細胞移植推進拠点病院」としての役割を担い、多くの施設と連携した造血幹細胞移植医療の推進と、研修やセミナーなどによる教育、スキルアップに邁進いたします。

教室の実務体制は、医局長 西森久和、外来医長 大橋圭明、病棟医長 谷口暁彦（西8階）・藤原英晃（西3階BCR）、教育医長 浅田 騰が担当しております。血液・腫瘍内科の医員は大山矩史、村上裕之、松村彰文、守山喬史、そして2021年7月から植田裕子が加わりました。呼吸器・アレルギー内科の医員は、太田萌子、野海 拓、栗林弘弘、下西 惇、西村智香、松浦宏昌、藤岡佑輔です。また、10月より肥後寿夫、田岡征高が帰局予定です。

最後になりましたが、引き続き「患者さんのために、医学のために、社会のために」教室員一丸となって診療、研究、教育に取り組んで参りますので、何卒ご支援、ご指導の程よろしくお祈り申し上げますと共に、同窓の先生方のご健勝をお祈り申し上げます。（西森 記）

腎・免疫・内分泌代謝内科学

和田 淳教授をはじめ教室員一同、教育・臨床・研究・学会活動をはじめ、広く精力的に活動を行っております。

研究活動ですが、和田教授が研究代表者である「尿レクチンアレキ解析を用いた腎疾患診断キットの開発」（AMED難治性疾患実用化研究事業）が2年目となりました。企業との共同研究で診断薬の開発に邁進しています。

学会活動ですが、7月17日-18日に西日本肥満研究会を和田教授が主催しハイブリッド形式で開催しました。教室員は国内外問わず大変活発に学会活動を行っており、中司敦子先生が日本糖尿病学会女性研究者賞を受賞、勝山隆行先生指導の下、医学部6回生アサモア・アビさんが第65回日本リウマチ学会総会・学術集会で優秀ポスター賞を受賞しました。また、松本佳則先生が宇都興産学術振興財団学術奨励賞を、浅野澄恵先生が岡山医学会賞総合研究奨励賞（結城賞）を受賞いたしました。

人事面では令和3年3月に大高 望助教が香川県立中央病院に赴任されました。令和3年4月に勝山恵理先生がハーバード大学留学から帰国され医療安全管理部助教に、田中景子先生が東海大学留学から帰局され血液浄化人材育成寄付講座助教に就任されました。また、片山晶博助教が岡山医療センター、小松原基志先生が岡山市市民病院、福島和彦先生が邑久光明園、杉谷宗一郎先生が岡山赤十字病院に赴任されました。また8月から秋山愛由先生が岡山中央病院に赴任されました。先生方の更なるご活躍を祈念致します。また病棟業務は、中土井崇人先生、

浅野洋介先生、大井祐貴子先生、松本和也先生、廣瀬 啓先生、奥山由加先生、須藤梨沙先生、佐々木恵里佳先生、神野文香先生が従事されています。

最後になりましたが、今後とも同門ならびに同窓の諸先生方の御指導・御支援を宜しくお願い申し上げます。（木野村 記）

精神神経病態学

令和3年度は山田了士教授の最終年となりますが、教室員は引き続き一丸となって臨床・教育・研究の各方面に全力を注いでいます。教室医局長は私、井上真一郎が3期連続5期目と、もはや古株になってしまいましたが、外来医長は岡久祐子先生、病棟医長は竹之下慎太郎先生、そして教育医長は藤原雅樹先生とすべて顔ぶれが入れ替わり、令和3年度はフレッシュな体制での船出となりました。諸先生方におかれましては、今後とも教室の運営にご理解とご協力をいただければ幸いです。

次に、教室内外の人の動きです。長きにわたって初期研修医のマネジメントやリエゾン診療に従事されてきた植田真司先生が、神戸大学医学部附属病院へ異動となりました。今後さらなる飛躍を確信しています。専攻医の先生方につきましては、申田吉生先生がまな星クリニックに、住田衣美先生が万成病院に、中田圭一先生がたいようの丘ホスピタルに、皆尾 望先生が岡山県精神科医療センターに、それぞれ異動となりました。1年間の大学病院での経験を糧に、新天地でますますご活躍されることを心から期待しています。

また、今年度はここ10年間で過去最多となる、8名の専攻医の先生方（浅田貴大先生・石川真悠子先生・江原慎一郎先生・大矢芳男先生・木曾萌香先生・辻野修平先生（以上、1年目）、三野彰理先生・稲田昇一郎先生（以上、2年目））を新たにお迎えすることができました。さらに、酒本真次先生は海外研修から、山田裕士先生は積善病院から帰局され、いずれも早速臨床や教育、研究活動に力を入れています。そして、松井友紀子先生は子育てに奮闘しつつリエゾン診療に従事するなど、リアル二刀流に挑戦しています。

教室行事としましては、6月12日に第126回教室同門会を開催いたしました。コロナ禍のため今回もハイブリッド開催となりましたが、12月の同門会ではなんとか現地開催をと考えております。どうぞ宜しくお願いいたします。（井上 記）

小児医科学

岡山大学大学院小児医科学教室と岡山大学病院小児科の現況を報告させていただきます。

診療では「小児医療センター」を基盤として最重症児への高度医療を提供しています。当センターは小児科、小児外科、小児神経科、小児循環器科、小児血液腫瘍科、小児歯科、小児麻酔科、小児放射線科、小児心臓血管外科、小児心身医療科が中心になり、院内の多くの診療科・診療部門との横の連携を發展させています。「周産母子センター」とも連携し、産科婦人科学増山教授のご指導のもと、吉本順子、鷲尾洋介が中心になってNICU患者の診療にあたっています。広島県と福山市による

寄付講座である「小児急性疾患学講座」では広島県福山市とその周辺地域の医療体制を増山教授らと連携して、池田政憲特命教授、鷲尾洋介、津下充らが尽力しています。中四国の各大学病院、総合病院、クリニックと綿密に連携しながら、当病院が子どもとご家族のための医療を提供する体制が発展しています。

人事面では血液腫瘍グループで活躍された嶋田明准教授が自治医科大学小児血液腫瘍科教授として転任しました。また、循環器グループ及び血液腫瘍グループでそれぞれ多大な貢献をした福嶋遙佑が広島市民病院、金光喜一郎が岡山医療センターに異動しました。後期研修修了の大平純也は広島市民病院から福山医療センター、松尾逸平は福山医療センター、また、禪正和真は小児神経科に研修とそれぞれ異動しました。新たな医員としては宇田和宏が感染症・免疫・アレルギーグループ、川本祐也が循環器グループ、佐藤剛史が新生児グループ、越智元春が血液腫瘍グループに属して臨床・研究に従事しています。また、レジデントとして福田花奈、村上美智子、藤本耕慈、明井孝弘、原成美、大野友香子が新たに加わり、各診療グループをローテートしながら研修しています。

現在、循環器グループの栗田佳彦がThe Hospital for Sick Children, Toronto、血液腫瘍グループの石田悠志がKarolinska Institutet, Stockholmに留学し、それぞれ研鑽を積んでいます。

研究面では各グループが成果を挙げ、論文報告も継続しています。一般小児科ではGlobal Health & Medicine、Children、循環器ではJournal of Cardiology、血液腫瘍ではPediatric Hematology and Oncology、感染症ではInflamm Res、内分泌ではMolecular Genetics & Genomic Medicineなどで発表されています。

診療面では、4月から病棟医長を榮徳隆裕、外来医長を藤井智香子が務めています。現在のコロナ禍により外来、入院の取り決めの様々な制約がある中で子供達に必要な治療が適切にできるように病棟医長、外来医長を中心として医局員一丸となって診療にあたっています。

最後になりましたが、当教室の診療・教育・研究の全てにおきまして、何卒ご指導とご支援を賜りますようお願い申し上げますとともに、同門の諸先生方のご健勝とご繁栄をお祈り申し上げます。(馬場 記)

発達神経病態学

小林勝弘教授以下、秋山倫之准教授(てんかんセンター副センター長、医局長)、秋山麻里助教(教育医長)、柴田敬助教(外来医長)、土屋弘樹助教(病棟医長)の体制で、教室運営を行っています。

医局人事に関しては、4月より花岡義行が、倉敷中央病院に小児科医長として赴任いたしました。かわって、柴田 敬が外来医長に、また、土屋弘樹が病棟医長に就任しました。新たに、竹中 暁、浦田奈生子、時岡礼恵、塚原理恵、禪正和真の5名が医員として専門研修を開始いたしました。一方、米田 哲と丸金拓蔵が国内留学による研修を終えました。

診療については、新型コロナウイルス感染症の流行が続いて

いますが、外来患者(新患含む)数は前年度に比べると増加傾向です。入院患者数は時期にもよりますが、少なめが続いております。基礎疾患検索、てんかん外科手術の適応検討目的の入院は比較的多い状況ですが、同門の先生方には、治療入院も視野にいられたご紹介を引き続きお願い致します。

他診療科との連携体制(小児医療センター、てんかんセンター、結節性硬化症ボード)には大きな変更なく診療を継続しております。今年度も、厚生労働省によるてんかん地域診療連携体制整備事業において、岡山大学病院てんかんセンターは引き続き岡山県の診療拠点機関として認定されましたので、県内におけるてんかん診療連携体制の充実に努める所存です。

学会活動は、皆様ご存じのとおり、オンライン開催が主体です。この中、アジア・オセアニアてんかん学会(演者:米田哲)、日本小児科学会(演者:宮原大輔)、日本小児神経学会(演者:秋山倫之、兵頭勇紀、丸金拓蔵)、岡山てんかん懇話会(演者:品川 穰)で、発表を行いました。研究面では、てんかんや神経生理学、代謝物質分析等に関する臨床研究を継続しております。

今後とも同門の諸先生方のご指導、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。(秋山 記)

消化器外科学

令和3年4月～令和3年8月の教室だよりをお届けします。藤原俊義教授のもと、現体制となって12年目を迎え、教室員一同、臨床・研究・教育に励んでおります。

人事面では、4月より榎田祐三が医歯薬学総合研究科准教授、野間和広は消化管外科講師に、安井和也が卒後臨床研修センター助教、高木弘誠は臓器移植医療センター助教に昇任しました。杭瀬 崇が岡山赤十字病院へ、岡林弘樹が香川県立中央病院へ異動しました。研究を終えた田淵幹康と三村直毅は高知医療センター、大谷(旧姓津村)朋子は香川労災病院、小松泰浩は三原赤十字病院、西山岳芳は三豊総合病院、西脇紀之は四国がんセンターへ赴任しました。岡山済生会総合病院より藤 智和が帰局し、米国留学から帰国した熊野健二郎、臨床研修を終えた松本 聖、金平典之、八木朝彦、吉田有佑、渡邊日向子、および外科専門研修3年目の高橋利明、永久成一、成田周平、野木祥平、三宅英輝とともに、消化管外科・肝胆脾外科・小児外科病棟で日夜奮闘しております。坂本真樹、井上弘章、宇根悠太、永井康雄、梅田 響は病棟勤務を終え、矢掛町国民健康保険病院で外科専門研修を終えた西村星多郎とともに、大学院生として研究生活に入りました。長年にわたり当教室を支えてきた西崎正彦講師が、8月より津山中央病院へ赴任となりました。

研究・学会活動では、令和3年6月24日(木)、25日(金)に、第39回日本肝移植学会学術集会を八木孝仁会長のもと開催致しました。コロナ禍の中ご参加頂く皆様の安全を考慮し、学会を完全WEB形式にて執り行いましたが、多くの先生方にご参加頂き、盛況のうちに会を終えることができました。皆様からいただきましたご支援・ご協力に厚く御礼申し上げます。この一年あまり、多くの学会・研究会そして教室行事がWEB形式で

開催され、WEB上での発表や質疑応答にもだいぶ慣れてきたように思います。一方で、対面での人事交流の重要性を再認識することができた1年であり、コロナ終息後に向けて、それぞれの長所を生かせる教室運営を模索していきたいと思います。

多忙な藤原俊義教授のもと、教室員一同団結し、臨床・研究・教育にお一層努力していく所存です。今後とも教室の運営にご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げますとともに、同門の先生方のご健勝とご繁栄をお祈り致します。

(黒田 記)

呼吸器・乳腺内分泌外科学

2021年4月からの教室だよりをご報告いたします。豊岡伸一教授のもと「真摯・利他・向上」を掲げ5年目を迎えることができました。本年4月より豊岡教授が医学部長に就任となりました。今後は当教室のみならず岡山大学医学部全体で一丸となってこれまで以上に研究、教育、そして診療に取り組んでまいります。

臨床面ではCOVID-19の影響により2020年落ち込んでおりました手術数も、増加傾向に転じております。また、依然コロナ禍ではありますが、昨年落ち込んだ県外からの紹介患者も増加しており、また、肺移植も順調に実施できている状況です。

慶事としましては山根正修准教授が島根大学医学部呼吸器外科学講座の初代教授に選出され、8月1日をもって就任いたしました。また27年にわたり岡山の乳がん診療に貢献してきたことが認められ、土井原博義教授が松岡良明賞を受賞されました。

その他、人事面では大谷真二助教が愛媛大学呼吸器外科に講師として着任し、これまで2年間厚生労働省に出向しておりました枝園和彦が帰局し、厚生労働省での経験を活かすべく、4月より新医療研究開発センター講師の任を拝命しております。富岡泰章助教が島根大学に異動し、新しい教室の立ち上げを行ってまいります。また、留学していたスペインおよびベルギーから田中 真と高橋侑子がそれぞれ帰局し、呼吸器外科助教および内分泌センター助教として着任いたしました。教室に新しい風を吹き込んでくれるものと期待しております。なお、富岡助教の後任は松原慧が務め、塩谷俊雄助教が岩国医療センターへ転勤となりました。そのほか吉岡 遼、大谷悠介、岩田一馬、久保友次郎、川名伸一、松田直樹が大学院生として研究を開始しております。

COVID-19の状況は国内発生から1年半を過ぎても、いまだ出口の見えない状況ではございますが、「Post COVID-19」を待つのではなく「New Normal」ととらえて次の時代をどう開拓していくか、豊岡教授の下、医局全体で考えてまいります。山根准教授の島根大学医学部教授就任、土井原教授の松岡良明賞受賞と明るい話題が続いておりますのも、ひとえに同門の先生方の絶え間ないご支援の賜物であり心から御礼申し上げます。最後になりましたが、今後とも教室の運営にお力添えのお願いとともに同門の先生方のご健勝をお祈り申し上げます。

(枝園 記)

整形外科

令和3年4月から8月までの教室だよりをお届けします。

教室の行事としまして、4月21日から23日に13TH Asia Pacific Musculoskeletal Tumor Society Meetingを開催いたしました。昨年4月に開催予定でしたが、新型コロナウイルスの影響で1年遅れのハイブリッド開催となりました。尾崎敏文会長が座長を務めたドイツのHeribert Jürgens先生の講演他、6名の招待者による招待講演等があり、270名以上の参加で成功裡に終わりました。

また、6月12日に第67回岡山大学整形外科開講記念学術講演会を開催いたしました。新型コロナウイルス感染拡大に伴う岡山県の緊急事態宣言を受けてWebでの開催とさせていただきました。福島県立医科大学医学部整形外科学講座の紺野慎一教授による「慢性疼痛の現状と課題」の特別講演がありました。

そして、8月7日に第45回岡山スポーツ医科学研究会を開催いたしました。岡山大学病院循環器内科講師の中川晃志先生による「知っておきたい！スポーツと心臓のかかわり」と酪農学園大学農食環境学群 食と健康学類教授の山口太一先生による「スポーツ現場に活かすストレッチングの研究成果」の講演があり、スポーツに興味のある医師、コメディカル及び学生の方の参加がありました。

人事面では4月に運動器外傷学講座教授の野田知之が川崎医科大学運動器外傷・再建整形外科学教室の教授に就任し、後任として依光正則が講師として採用されました。運動器知能化システム開発講座助教の山根健太郎が岡山医療センターに異動し、魚谷弘二が帰局いたしました。大学院生の松橋美波が高砂市民病院、辻 寛謙が岡山赤十字病院、久禮美徳が光生病院、上甲良二が住友別子病院、渡辺雅仁が長谷川記念病院、黒住堯巨が岩国医療センターにそれぞれ異動しました。伊勢真人は和歌山県立医科大学リハビリテーション科に国内留学中です。そして片山晴喜、小浦 卓、近藤彩奈、田村優典、浪花崇一が大学院生として帰局し、研究を開始しております。

また、専門研修プログラムにより半年間研修しておりました久保田耕作、赤木俊亮、石丸啓彦、大塚憲昭、西田一平、政田恭孝がプログラムで決められた病院に異動し、新たに篠原康太、安岐涼輔、長谷川 翼、横田真二郎、尾上慶尚、小原利輝が研修に励んでおります。

最後になりましたが、同門の諸先生方の益々のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。

(鳥村 記)

皮膚科学

2021年4月から学術面、人事面についてご報告いたします。

4月9日OKAYAMA Dermatology Collaboration Seminarにて『岡山大学病院における最近の皮膚科診療』の題目で杉原が講演しました。

4月23日AD WEB Liveにて『アトピー性皮膚炎における皮膚バリア機能修復を手段とした治療戦略』の題目で森実が講演しました。

5月15日第49回岡山研究皮膚科フォーラムにて『ストレスに

よるアレルギー性皮膚炎増悪の機序の解明』の題目で浦上が講演しました。同日に開催された第283回日本皮膚科学会岡山地方会では川上、池田、徳田、芦田、赤松が発表しました。

5月21日第2回乾癬診療連携Teams講演会では『当院における乾癬バイオ診療の実際～2021～』の題目で森実が講演しました。

5月27日～28日第94回日本ハンセン病学会総会・学術大会では『LL型ハンセン病新規発症例の治療経過』の演題で篠倉が発表しました。

5月29日～30日第36回日本皮膚外科学会総会・学術集会以て『妊娠中の外陰部類上皮肉腫の1例』の演題で藤井が発表しました。

6月10日～13日第120回日本皮膚科学会総会では『ここまでわかったアトピー性皮膚炎における表皮バリア機能異常』『好中球関連皮膚疾患の共通のメカニズムは？』の題目で森実が講演しました。

『おとなの皮膚感染症』『感染症と中毒疹』の題目で山崎が講演しました。

『CD30の発現を認めるリンパ腫および反応性疾患について』の題目で平井が講演しました。

『免疫チェックポイント阻害剤でCRとなり、中止した悪性黒色腫6例』の題目で杉原が発表し、優秀演題賞を受賞しました。

『Eosinophilic Vasculopathy in a Patient with Idiopathic Hypereosinophilic Syndrome』の題目で神野が発表し、優秀演題賞を受賞しました。

『モガムリズマブ投与後に移植片対宿主病が重症化した成人T細胞白血病の3例』の題目で横山が発表しました。

『DFSPとの鑑別と整容面への配慮を要した顔面のdeep penetrating dermatofibroma (DPDF)の3例』の演題で谷本が発表しました。

6月17日北九州市皮膚科医会研修会（web講習会）では『皮膚細菌感染症の治療戦略』の題目で山崎が講演しました。

人事面では、令和3年4月に新入局員として白井真葉先生（高知大卒）、砂川 滉先生（岡山大卒）、徳田真優先生（香川大卒）、竹中美結先生（自治医科大卒）の計4名を新入局員として迎えることができました。昨年は、コロナ感染対策として、入局を検討されていた研修医の先生方へはリモートでの医局説明会しか出来ませんでした。カンファレンス含め、医局の雰囲気を知りとお伝えすることができず、最終的に入局を断念された先生もおられ、大変悔しい思いを致しました。年度替わりの送別会や歓迎会、毎年恒例の医局旅行やかじろう鍋等も当然出来ないのですが、医局行事として大切だったんだと改めて気付かされますし、コロナが落ち着いた際には注力して参りたいと思っております。

同門の先生方にも直接ご指導頂ける機会は減っておりますが、引き続き何卒宜しくお願い申し上げます。（平井 記）

泌尿器病態学

令和3年4月から令和3年8月までの教室だよりをお送りいたします。

那須保友教授は岡山大学理事（研究担当）・副学長、渡邊豊彦准教授が泌尿器科診療科長を務めています。医局長は4月から和田が選任されましたが、8月から島根大学医学部泌尿器科学講座を主宰させて頂くこととなりました。それに伴い、8月からは荒木元朗講師・副診療科長が着任しております。どうぞよろしくお願い致します。

人事面では、令和3年度は9名の新入局者（男性7名、女性2名）を迎えました。若手の雰囲気やパワーで医局や同門全体が活気づいておりますが、広範な泌尿器科領域と地域性をカバーするため、相変わらず関連病院では人手不足が続いております。引き続き医局員や同門一同、教育や診療を通じて学生さんや研修医と密にコンタクトを取り、ひとりでも多く泌尿器科に興味を持って頂けるよう頑張りたいと思っております。

診療面では、外来医長を佐古智子助教、病棟医長を枝村康平助教が務めております。新型コロナウイルス感染症のため、外来、入院、手術の制限期間が設定されるような状況が続いておりますが、大幅な診療の縮小はなく事に当たっております。手術に関しては、ロボット支援腎部分切除や膀胱全摘は、岡山県内の施設を中心に多数の患者様をご紹介頂き順調に件数が増加しております。尿路変向は回腸導管を体腔内で作成する手技を導入し、ますます低侵襲に手術が可能となりました。ロボット支援下前立腺全摘除術は、コロナ禍の影響で過去には若干の減少傾向を認めておりましたが、現在は件数が回復して手術の決定から約1～2か月で手術が実施できております。令和2年4月より開始しているロボット補助下腎盂形成術、仙骨腫固定術も、多くの患者様をご紹介頂き、小林泰之講師と佐古助教によって順調に件数が増加しております。このように、従来手術方法と比べ手術時間が短く、繊細な手術が可能なロボット手術は、今後ますます増加していくものと考えております。

2009年に立ち上げた腎移植についても、荒木講師を中心に着実に実施件数は増加しております。現在までに生体と献腎移植を合わせ約140件に達し、1年生着率も100%を維持、件数のみならず成績も順調に推移しております。渡邊准教授を中心に開始した過活動膀胱に対するボツリヌス注入療法も順調に症例数を増やしております。基礎研究では渡部新医療研究開発センター教授と定平助教を中心として、がん抑制遺伝子や再生医療、新規医療の研究開発およびその橋渡し研究を進めています。

教育面では学生や大学院生、研修医の教育に力を入れており、令和3年度も複数名の大学院生が卒業し、10名を超える泌尿器科専門医が誕生する見通しです。

私事ながら、岡山大学と関連病院の先生方におかれましては、約20年にわたりご指導を賜り、本当にありがとうございました。岡山大学泌尿器病態学に対しまして、今後とも益々のご指導ご鞭撻の程、宜しくお願い致します。末筆ながら、同窓の先生方のご健康とご活躍をお祈り致します。（和田 記）

眼 科 学

眼科学教室の近況をご報告いたします。人事につきましては、本年4月から6名（滝澤、辻、田中、南川、赤塚、小野）が新しく入局し、岡山大学の『眼科専門研修プログラム』に参加し

ています。上級医の指導の下、毎日様々な経験を積みながら頑張っています。当プログラムの実施にあたり専門研修連携施設の先生方には、引き続きご協力をお願いするかと存じます。今後とも何卒よろしくお願いいたします。

主な学会等の発表や研究会の開催については、4月8日～4月11日にかけて、第125回日本眼科学会総会がオンラインで開催されました。森實がシンポジウムにて、濱崎、細川、柴田が一般講演にて発表しました。学会を通じて臨床や研究に関わる有益な情報や新知見が得られたかと存じます。例年開催してありました岡大眼科学教室同門会総会および岡山大学眼科研究会につきましても、今年度は11月にオンラインにて開催する予定です。

最後になりましたが、患者様をご紹介くださる先生方、関連病院や診療所の先生方にはこの場を借りてお礼を申し上げます。これまで通り急患の受け入れも積極的に行っております。連絡先につきましては、平日9:00-17:00までは眼科医局：電話(086)235-7297、平日17:00以降および土日祝日は眼科病棟(西5)：電話(086)235-6708です。誠に恐縮ではございますが病床に限りがございますので、入院の可能性がある急患については事前にご一報くださいますようお願いいたします。(塩出 記)

耳鼻咽喉・頭頸部外科学

耳鼻咽喉科教室現況をお知らせいたします。

学会関係ではCOVID-19の懸念もありますが、ハイブリット形式で開催され、日本耳鼻咽喉科学会、日本頭頸部癌学会、日本アレルギー学会、耳鼻咽喉科臨床学会、日本小児耳鼻咽喉科学会などで医局員が現地ならびにWebにて多数の演題発表をいたしました。

人事関係では4月より駿河有莉、佐藤明日香を新入局員に迎えることができ、秋定直樹が四国がんセンターより帰局いたしました。

臨床面ではCOVID-19感染に際し、細心の注意を払いつつ外来・手術をおこなっております。今後とも同窓の諸先生がたのご支援をよろしくお願い申し上げます。(片岡 記)

放射線医学・放射線部

令和3年4月～令和3年8月における当教室の活動と現況についてご報告致します。

去る3月をもって金澤 右前教授が定年退官となり、4月より川崎医科大学総合放射線医学特任教授に就任いたしました。現在教室は過渡期を迎えておりますが、平木准教授を中心として教室員が一丸となり、引き続き精力的に診療、研究、教育活動に取り組んでおります。

4月の人事異動としまして、長年にわたり岡山大学病院の放射線治療を牽引してきた勝井邦彰が、川崎医科大学放射線腫瘍学教授に就任いたしました。また、岡山市立市民病院に勤務してました藤原寛康が、川崎医科大学総合放射線医学准教授に就任いたしました。大学から関連病院への異動として、4月

に正岡佳久が姫路赤十字病院へ、坪井有加が川崎医科大学総合医療センターへ、梶田聡一郎が岡山西大寺病院へ、渡邊謙太が川崎医科大学附属病院へ、左村和磨が岡山赤十字病院へ、松田恵治が福山市民病院へ、川田まりあが岩国医療センターへそれぞれ赴任いたしました。また、7月に田中高志が岡山市立市民病院に赴任いたしました。一方、井原弘貴、蟹江悠一郎、横本怜子、大森真理が4月に、檜垣文代が7月にそれぞれ関連病院から帰局しております。また、この春の新入局員として、岡安和寛、大原小百合、白石明日香、河村俊一、櫻井淳暢の5名を迎えました。岡安は岡山赤十字病院、大原は福山医療センター、白石、河村、櫻井は岡山大学病院でそれぞれ後期研修を開始しております。医局役員に関しましては、医局長松井裕輔、副医局長兼外来医長富田晃司、病棟医長宇賀麻由、教育医長児島克英で変更ありません。

学術面では、第80回日本医学放射線学会総会、第50回日本IVR学会総会、第134回日本医学放射線学会中国四国地方会等の主要な関連学会にて当教室・関連施設より多数の優れた演題発表がなされました。

教室関連の各種行事もWeb開催が定着し、円滑に運営されております。5月には恒例の研修医画像セミナーを開催し、初期研修医の先生方を中心として70名以上のご参加を頂き、好評を博しました。

以上、簡単ではございますが教室の近況をご報告させて頂きました。同門・同窓の諸先生方におかれましては、引き続きご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

(松井 記)

産科・婦人科学

増山 寿教授をはじめ教室員一同、臨床、研究、教育へと日々励んでおります。4月以降も日本産科婦人科学会、日本婦人科腫瘍学会、日本周産期新生児医学会などの学会等で教室から多数の演題を発表いたしました。例年6月第2週に行っています同門会総会ならびに学術講演会においては緊急事態宣言(コロナ禍)のため、2年続け、中止となりました。続いて人事の御報告ですが、倉敷市立市民病院の高取明正が岡山赤十字病院に、香川労災病院の大倉磯治が倉敷市立市民病院に、岡山済生会病院の関 典子が姫路赤十字病院に、大阪中央病院の清時毅典が香川労災病院に、愛媛県立中央病院の秋定 幸が岡山済生会病院に、岡山済生会病院の新家朱理が徳島大学に、岡山医療センターの片山菜月が津山中央病院に、姫路聖マリア病院の大前彩乃が姫路赤十字病院に赴任され、姫路赤十字病院の牛尾友紀、オタワホスピタルリサーチインスティテュートに留学していた長谷川 徹、ロツテルダム・スクール・オブ・マネージメント・エラスムス大学に留学していた桐野智江が帰局しました。教室では、小川千加子が産科婦人科講師に、衛藤英理子が周産期医療学講座講師に、谷 和祐が助教に昇任し、春間朋子が岡山済生会病院に、楠元理恵が大阪中央病院に、角南華子が岡山赤十字病院に、川西貴之が岡山市立市民病院に、道満佳衣が岡山赤十字病院に、阿武恵子が岡山中央病院に赴任され、大道千晶は岡山市立市民病院に復職され、岡山赤十字病院の片山典子は開

業されました。

なお4月から教室内役職は医局長 中村圭一郎、婦人科病棟医長 小川千加子、外来医長 早田 桂、周産母子センター産科部門長 衛藤英理子、教育医長 久保光太郎の体制に変更しております。

本年度は当教室に8名の新入局員を迎えました。小川麻理子、栗山千晶、坂田周治郎、澤井雄大、篠崎真里奈、谷岡桃子、西田康平、長谷井稜子が大学で後期研修を開始いたしました。10月から各地の研修病院に赴任します。ご指導宜しく願いいたします。また8月には後期研修4年目の入江恭平、許春花、三苦智裕、横畑理美が産婦人科専門医試験を受けました。

産婦人科医不足は相変わらずで、同門のベテランの先生方には定年後も嘱託医や非常勤医師として現役を続行いただき、厚く御礼申し上げます。現状において「産婦人科施設の集約化」が必須であることは自明の理で、これには行政の関与も不可欠です。

今後も引き続き、同門が一丸となって中国四国地方の産婦人科医療の充実に務めて参ります。御指導ならびに御支援の程よろしく御願ひ申し上げます。(中村 記)

麻酔・蘇生学・集中治療部・周術期管理センター

2021年度も半年が過ぎましたが、麻酔科が担う手術室、ICU診療という急性期領域はコロナウイルス感染症パンデミック第4波の影響が大きく出た時期となりました。これまでに比べて感染患者の重症度が増し、院内診療体制の中でコロナ患者への比重が増加しました。救急医療と外科の手術のどちらも通常の診療体制を維持しつつコロナ診療も行っていく、という理想からはかけ離れた状態でした。

東ICU/CCUは重症コロナ患者受け入れ病床になり、一時的にはコロナ患者のみの受け入れになりました。東ICU/CCUでは計21人の重症コロナ患者が入室、挿管患者10名、死亡2名でした。一方で、総4 ICUでは術後患者、院内急変、院外からの重症受け入れなど、コロナ患者以外の重症患者診療を担いました。

手術室では、コロナ対応の部屋を準備し、全身麻酔症例の術前PCR検査義務化が導入されました。術後入室患者のICU入室制限により手術件数の制限を余儀なくされ、結果的には約10%の減少に留まりましたが、各診療科の方々には件数制限にご対応頂き、ご不便をおかけ致しました。疑い症例や手術中にコロナ感染が判明した症例への対応などで得た貴重な経験は、今後生きてくると考えます。

教室からのご報告と致しましては、香川労災病院 麻酔科部長の北浦道夫先生が6月にご逝去されました。故人は当科を長年支えて下さり大変お世話になりました。ご冥福をお祈り致します。

人事異動としては、6月には谷口新助教が東邦大学附属病院へ、7月には木村 聡医師がスタッフに、越智聡子医師が医員に、岡崎信樹先生が岡山ろうさい病院へ異動になりました。

末筆ではございますが、麻酔科はこれまで以上に患者診療に真摯に取り組んで参りたいと存じます。各診療科の先生方をは

じめ、看護師、コメディカルスタッフの皆様のご理解、ご協力を宜しく御願ひ申し上げます。今後ともご支援の程、宜しく御願ひ申し上げます。(清水 記)

脳神経外科学

感染性コロナウイルス蔓延が長期化する中、国を挙げてワクチン接種の普及が行われています。当科ではワクチン接種の支援は医師の責務と考え、日常診療の傍ら積極的にその支援に関わっております。1日も早い終息を願うばかりであります。

令和3年4月10日に東 徹先生(昭和29年岡山大学卒業)が、令和3年5月11日に菅 健先生(昭和41年岡山大学卒業)がご逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。人事関連では、まず新入局者ですが、廣瀬安章先生(岩国医療センター勤務)、藤田淳太郎先生(広島市民病院勤務)が入局されました。異動・昇任につきましては令和3年4月から令和3年7月の間について記します。令和3年4月には國塩勝三先生が高松画像診断クリニックから岡山博愛会病院勤務、佐藤健吾先生が日本赤十字社医療センターサイバーナイフセンターから岡山旭東病院勤務、亀田雅博先生が岡山大学病院から大阪医科薬科大学勤務、佐々田 晋先生が津山中央病院から岡山大学病院勤務、守本 純先生が新小文字病院から津山中央病院勤務、枝木久典先生、剣持直也先生、木村 颯先生、永瀬喬之先生、皮居巧嗣先生が岡山大学病院から駿河和城先生が岡山市立市民病院からそれぞれ大学研究室に帰局、松田勇輝先生が広島市民病院から、水田 亮先生が津山中央病院から、小橋藍子先生が岡山大学病院(初期研修医)からそれぞれ岡山大学病院勤務となりました。

教室の役職は、医局長は菱川朋人が、外来医長は藤井謙太郎が、病棟医長は平松匡文が、教育医長・教育企画委員は春間純が務めました。

以上、簡単ですが、教室の近況を報告致しました。

末筆となりましたが、同窓の諸先生方の益々の御健康と御活躍をお祈り申し上げます。(菱川 記)

総合内科学

大塚文男教授は、引き続き「全人的医療のできる総合内科医の育成と大学院教育の両立」に取り組みます。令和3年度から総務・運営企画担当から企画・SDGs担当の副病院長を拝命し、本院全体の改善・改革や広報活動に尽力しています。

教室の動きです。臨床面では、引き続き長谷川病棟医長・小比賀外来医長を中心に、各診療科や地域医療機関と連携を取りながら診療を進めています。病棟では、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の第4波によって、ゴールデンウィーク前後はかつてないほどの負担と混乱をきたしましたが、診療科一丸となって切り抜けました。第4波の収束に伴い、本来の当科の特色である多領域にまたがる難治例の診療が再開となっています。令和3年1月から始まったポリファーマシー・カンファレンスはCOVID-19の管理業務の逼迫により一時中断となりましたが、再開・継続しています。外来は、徳増助教を中心とした「不明熱外来」、植田教授を中心とした「漢方臨床教育

センター)、片岡教授を中心とした「女性ヘルスケア外来(内科)」、萩谷准教授による「渡航ワクチン外来」に加えて、令和3年2月より「コロナ・アフターケア外来」を新たに開設しました。これは、COVID-19罹患後の後遺症状に悩む患者を対象としたもので、全国に先駆けて取り組んでおります。社会的な注目度も高く、多数のメディアからの取材依頼に大塚教授自らが対応しています。この間、長谷川医師(高血圧指導医・動脈硬化指導医)、小比賀医師(日本医学教育学会 認定医学教育専門家)を取得しました。また大学病院内・県営接種会場・津島キャンパス会場におけるCOVID-19ワクチン接種の設営に、萩谷准教授を中心として取り組みました。今後も地域医療現場の先生方・患者さまのニーズに応えるべく、大学病院の特徴と強みを活かした外来診療を発信して参ります。

教育面です。教育医長の谷山講師のもと、教育企画委員の徳増助教を中心に指導を行っています。昨年開講した総合診療医学(医学科4年次生)は今年も盛況で、総合診療領域のニーズの高さを改めて感じました。専門医制度関連では、当科では内科専攻医11名、総合診療専攻医3名が、大学病院および連携施設で研修を行っています。

研究面です。リサーチ/ケースレポート・カンファレンスは引き続き定期開催し、大学院生の学位論文取得・英語論文執筆を目標に若手を中心に積極的に活動しています。この期間、COVID-19の蔓延による社会活動の自粛により学会活動は軒並み延期・中止となりましたが、ENDO 2021(3月)、第118回内科学会総会(4月)、第93回日本内分泌学会学術総会(4月)、第65回日本リウマチ学会(4月:研修医として田村医師が近未来のリウマチ医奨励賞 受賞)、第12回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会(5月)、第64回日本糖尿病学会年次学術集会(5月)、第124回内科学会中国地方会(6月)、日本医学会連合第1回社会医学若手フォーラム(6月)、第39回内分泌代謝学サマーセミナー(7月)、第71回日本東洋医学会学術総会(8月)と多くの学会・研究会で学術発表を継続しています。

受賞状況として、萩谷准教授および長谷川講師が病院長賞「楮の木賞」(COVID-ICT)および岡山県クラスター対策班(OCIT)の活動として岡山大学SDGs推進表彰(President Award)優秀賞を受賞しました。また、当科入局の副島佳晃医師が卒業時に黒正賞を受賞しました。大塚勇輝医師は、米国内科学会日本支部主催のVirtual Doctor's Dilemma Competition(臨床研修病院対抗クイズトーナメント)において優勝し、第22回日本病院総合診療医学会学術集会で育成賞を受賞しました。萩谷准教授および大塚教授がActa Medica Okayama 2020 BEST REVIEWER AWARDを受賞しました。助成金獲得状況としては、萩谷准教授が公益財団法人西川医療振興財団 2020年度医学研究活動費助成事業を獲得しています。

人事面では、国際診療支援センター所属の原田洸助教が米国ニューヨークに臨床留学しました。本多助教が瀬戸内(まるがめ)総合診療医学講座から病院助教へ、岡助教が病院助教から瀬戸内(まるがめ)総合診療医学講座へ、灘助教が医員から瀬戸内(まるがめ)総合診療医学講座に異動となりました。

引き続き、各診療科および地域の先生方にご協力頂きながら、地域・社会に貢献できる内科医・総合診療医育成を目指してま

いります。今後とも、御指導・御鞭撻の程よろしく願いいたします。(萩谷 記)

循環器内科学

伊藤 浩教授は臨床・教育・研究および学会活動を精力的に行っており、相変わらず多忙な毎日を過ごしております。

人事ですが、令和3年4月から西本隆史が津山中央病院、小倉聡一郎がイムス葛飾ハートセンターに赴任致しました。同年6月から網岡尚史がケンタッキー大学(米国)へ留学いたしました。それぞれ新天地での活躍を期待しております。令和3年4月から中島充貴が岩国医療センター、森 淳史が香川労災病院より帰局しました。同年7月から西森大裕が岡山労災病院より帰局しました。現在病棟や研究を支えています。

学会・研究活動ですが、日本循環器学会をはじめヨーロッパ心臓病学会など、関連病院含め多数の演題が採択されておりました。コロナ禍のため、各学会の開催方法が変更しておりますが研究活動は変わらず継続しております。日本の学会でも多くの演題発表をしておりますが、第116第118回日本循環器学会中国・四国合同地方会で藤本竜平がYIAを受賞しました。また今年度後半に伊藤教授を会長として日本心不全学会学術集会、日本循環器学会学術集会を開催予定です。コロナ禍に負けず、教室一丸となり準備を進めております。

教室の実務ですが、医局長に吉田賢司、病棟医長に赤木 達、外来医長に三好 亨、教育医長に戸田洋伸の体制で執り行っております。今後も、臨床・研究・教育に励み、やりがいのある楽しい医局を目指したいと思っておりますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしく願いいたします。(吉田 記)

心臓血管外科学

2021年4月から2021年8月の教室の動きをご報告いたします。

2017年に笠原真悟医師が第3代教授に就任し、この8月で4年になりました。連携各科のご協力により、診療実績は毎年増加しております。この場をお借りして各部署様に感謝を申し上げますと存じます。人事面では、衛藤弘城医師が2021年4月より福山市民病院心臓血管外科から帰局しました。衛藤医師は成人心臓外科・血管外科を専門としており、また以前より教育面でも医局の中心となり活動を行なってきましたので、今後のさらなる活躍が期待されます。また枝木大治医師が近森病院での研修を終えて大学院生として帰局しました。鈴木浩之医師は、先天性心疾患治療に興味を持ってくれ、三井記念病院での研修後に入局してくれました。横山翔平医師は、外科後期研修3年目のローテーションで大学に来ました。これら4人の医師は教室の中でそれぞれ活躍してくれています。

臨床面では、小児及び成人先天性心疾患部門は笠原真悟教授をはじめとして、黒子洋介医師、川畑拓也医師、小林純子医師、小谷恭弘の5名のスタッフで診療を行っています。廣田真規医師と衛藤弘城医師が担当する成人心臓外科領域では、今後も大学病院として経皮的動脈弁移植術(TAVI)などの低侵襲手

術や、大動脈疾患の緊急手術を積極的に行なっていきたくてと考えています。現在、血管部門は廣田・衛藤医師が中心となり医師と共に診療を行っております。引き続き関係各科の皆様にはご協力のほど、何卒宜しくお願い申し上げます。

研究面では、以前より行われてきた心臓移植をはじめ、単心室循環に対する補助循環・再生医療、医用工学を用いた新しい人工血管の開発など、6人の大学院生が積極的に活動をしています。この3年間は文科省科研費、その他学外からの研究費も継続的に獲得しております。心臓移植の研究を行った門脇幸子医師、小林泰幸医師は2021年3月に大学院を卒業しました。特に小林医師は、3年の早期卒業となりました。

現在、教室からは7人が海外で活躍しております。甲元拓志医師はMedical College of Wisconsin、本浄修己医師はThe Hospital for Sick Children, Torontoで、また大崎 悟医師は、University of Wisconsinでスタッフとして10年以上にわたり活躍されています。また、奥山倫弘医師はUniversity of Kentuckyで、佐野俊和医師はUCSFで、門脇幸子医師はThe Hospital for Sick Children, Torontoでクリニカルフェローとして勉強中であり、大学院を卒業した小林医師は、7月よりThe Hospital for Sick Children, Torontoにリサーチフェローとして留学しています。

教室で行なっている国際貢献のJICAプロジェクトは新型コロナウイルス感染拡大の影響により活動に制限を来したため現在休止としており、今後の再開にむけてカウンターパートナーと連携を取っています。

今後も教室の広範囲での活動に御理解と御支援を賜りますようお願い申し上げます。(小谷 記)

脳神経内科学

1998年に脳神経内科第2代に赴任した阿部康二教授は、2021年3月をもって退職し、4月から国立精神・神経医療研究センターの病院長に就任しました。岡山大学脳神経内科の在任中、阿部教授は世界へ発信しかつ世界をリードできるような、教育・臨床・研究の各分野での発展を目指して教室員の指導を行い、国内・国際的学術活動において活躍してきました。具体的には、在任23年間に東海林幹夫教授（弘前大学）、松原悦朗教授（大分大学）、池田佳生教授（群馬大学）、松浦 徹教授（自治医科大学）、林 健教授（埼玉医科大学）、太田康之教授（山形大学）の計6人の教授を全国に輩出しました。また特筆すべきこととして新規遺伝性疾患Asidan病（SCA36）の発見、抗酸化薬エダラボンの脳梗塞とALSへの保険適応、ALSの臨床治験主導（計2回）、脳梗塞とALSにおける幹細胞治療、東日本大震災での現地支援、世界脳循環代謝学会の主催、2020年8月コロナ下での日本神経学会の主催、様々な新しい学会の設立（日本Vas-Cog学会、アジアVas-Cog学会、日本脳サプリメント学会、日本化粧医療学会）と活躍してきました。受け入れた留学生は計36名（中国、台湾、ブルガリア、エジプト、セルビア、バングラデシュ）、学位授与は博士課程が計47名、修士課程が13名で、主な原著論文は全824編（Nature 3報、Nature Genetics 4報、Nature Neuroscience 1報、Nature Comm.

1報、Lancet Neurology 1報、Neurology 13報、Ann. Neurol. 3報、JCBFM 27報、Stroke 17報を含む）に及びました。今後は医局員一同、これまでの阿部教授の指導をもとに、それぞれが自ら進運を開拓すべく励む所存です。

4月より山下 徹准教授が科長代理を務めております。森原隆太助教が講師に就任し、柚木太淳と中野由美子がそれぞれ関連病院から帰局して助教に就任しました。新たに入局した中田有美が病棟業務を精力的にこなし、数多くの難しい症例の診療を担当し活躍しております。転出者としては、4月より表 芳夫が岡山医療センターへ、松本菜見子が倉敷平成病院へそれぞれ異動し、今後の活躍が期待されます。松岡千加は広島市民病院、平 祐貴は岡山大学病院総合内科において内科専攻医ローテート中です。スタッフ業務については、医局長は森原隆太が、教育医長は中野由美子が、病棟医長は柚木太淳が、外来医長は武本麻美がそれぞれ担当しています。

臨床面では、このコロナ禍にも関わらず病棟診療においては年間入院患者数400名を超え、様々な神経内科疾患の診療を担当しています。一般外来および専門外来（認知症、脳卒中、パーキンソン、ALS、SCD/MSA、神経免疫疾患、ボトックス治療）のさらなる充実化を目指し、神経内科独自の外来検査を導入し、待ち時間の短縮と効率的な外来診療を目指して努力をしています。特に、患者数の増加が著しい認知症については、外来検査の結果を基に、簡易認知機能検査の開発や治療研究などを基礎研究と並行して推進しています。また、多くの神経難病ALS患者に対してedaravone療法に加え、Muse細胞静脈投与治療の治験を新たに開始するなど新しい治療法開発に積極的に取り組んでいます。このように多様な専門外来の評判を聞いて岡山県外からも多くの患者さんが受診しています。今後もALSや脳梗塞の病態解明や新規治療開発へ向けて更なる臨床研究を継続して行っていく予定です。

研究面では脳虚血グループ、変性疾患／認知症グループ共に多くの論文が出版され、国内・海外での学会発表も活発に行われました。特に2020年9月に岡山大学神経内科と東北大学の共同研究で、新しい幹細胞であるMuse細胞静注投与することでALSモデルマウスの治療効果を見出したことを発表し、国内外から大変注目を集めています。基礎研究で得られた知見に基づいて現在ALS患者に向けた治験が進行中です。今後とも何卒宜しくお願いいたします。(森原 記)

救命救急・災害医学

救命救急・災害医学講座は、中尾篤典教授のもと中国・四国地方における救急医療の最後の砦として、最重症救急患者の診療に従事しています。また、岡山県内の新型コロナウイルスの重症患者に対し、関係各科の先生方、メディカルスタッフ、行政、関連病院のご協力を仰ぎながら、日々対応しております。併せて、宿泊療養施設に入所した軽症患者のオンライン診療を通じて、地域病院の負担減と感染者の安全確保を両立させるべく邁進しております。

研究面では、日々の症例や疑問点を中心に学会発表や英文雑誌にて多数報告しております。また、水素を代表とする医療ガ

スを用いた基礎研究や大規模データベースを用いた臨床研究も盛んで、令和3年度も科学研究費を始めとする複数の研究助成を獲得するに至りました。引き続き、さらなる成果を世界に向けて発信していけるよう取り組んで参ります。

教育面では、学生や研修医に対して、救急医療の臨床的対応のみならず、終末期医療、ACP、臓器提供などに関してもより興味を持ってもらえるよう、講義や実習を通じて問題提起を行い、指導医とのディスカッションや多職種カンファレンス等への参加なども積極的に行っております。また、災害の講義や救急車同乗実習、シミュレーター実習、屋根瓦式の実践などを通じて、自ら考え行動できるよう工夫しております。

今後と致しましては、12月11日（土）に第29回日本熱傷学会中国四国地方会学術集会のオンライン開催、令和4年5月には、日本救急医学会中国四国地方会の主催も予定しております。新型コロナウイルスの流行により、救急医療は院内のみならず、地域の医療機関との連携が不可欠であり、皆様方の御協力無しでは成り立たないことをより一層実感している所存です。急な診療依頼や転科・転院の相談など御迷惑をお掛けすることもあるかと存じますが、引き続き御指導、御鞭撻の程、何卒宜しくお願い申し上げます。（小原 記）

形成再建外科学

2021年7月までの近況についてご報告いたします。

教室人事では、山田 潔准教授（臨床リンパ学講座）が光生病院へ、徳山英二郎助教がとくやまふた・スキンクリニック（開業）へ、渡部聡子助教が河田外科形成外科へ、川本幸司が岩国医療センターへ、白石剛章が岡山労災病院へ、勝部璃子が香川県立中央病院へと、多くのメンバーが岡山大学病院から異動しております。一方で、品岡玲が大学院人体構成学から、濱田龍正が岩国医療センターから、長谷川雄大が住友別子病院から、藤本沙里が呉医療センターから帰局しております。また、慶應義塾大学病院から渡部紫秀先生が、東北大学から林 昌伸先生が性同一性障害の治療を学ぶべく国内留学に来られています。大学院博士課程に橋本慎吾君が入学し、再生医療の研究を開始しております。新入局員につきましては、古谷春乃（岩国医療センター）、小澤 茜（呉医療センター）の計2名を新たに迎え入れました。

臨床は、2020年度に引き続き、COVID-19の影響により、手術は制限されましたが、乳がんや頭頸部がんの悪性腫瘍に関連した再建手術など緊急性の高いものは通常通り多く行っております。小児先天奇形、乳房再建、リンパ浮腫の上級医が交代したことにより、再スタートとなっている面もございますが、引き続き世界の最先端を目指して治療を行っていく決意でございます。

教育においては、当科医学部基本臨床実習中に行われている、ビジュアルアート教育が医学部生教育の観点から注目を浴びております。DOCTOR-ASE（日本医師会発行2021年Spring No.37）に主任教授・木股敬裕のインタビュー記事が掲載され全国の医学部生に紹介されました。

研究におきましては、AMED、基盤Bなど複数の大型研究

費を獲得し、多くの最先端の研究を行っております。そんな中、2021年6月には木股敬裕を会長とし、第45回リンパ学会総会をオンライン開催し、盛況のうちに終わることができました。また第17回Craniosynostosis研究会（世話人 妹尾貴矢）はハイブリッド開催で行われ、多くの参加者と活発な議論を行うことができました。来年度は日本形成外科学会基礎学術集会在岡山で開催されます。中四国で開催されますのは実に24年ぶりということで、当科設立21年での実績が全国に認められつつあります。

我々は、今後も最先端の医療の開発、地域医療への貢献、若い人材の育成を目指して、研鑽を重ねて参ります。同窓の先生方におかれましては、引き続き変わらぬご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。（品岡 記）

老年医学

老年医学分野の令和3年4月以降の近況をご報告させていただきます。

研究面では、国立研究開発法人日本原子力研究開発機構（JAEA）および岡山大学大学院保健学研究科との共同で、「極微量ウラン影響効果試験」を平成19（2007）年度から継続しています。本研究は、ラドンの影響効果の実験的検証（岡山大学成果）及び解析評価から得られるラドンの体内動態のメカニズム（JAEA成果）を双方の成果として得ることを目的としています。令和3（2021）年度、学会・研究会（第74回日本酸化ストレス学会・第21回日本NO学会 合同学術集会、第58回アイソトープ・放射線研究発表会）でその成果を発表いたしました。また、日本呼吸器学会が制定した「肺の日」（8月1日）および「呼吸の日」（5月9日）の両日を中心に開催している、呼吸器疾患の啓蒙を目的とした、2021年度市民公開講座を、第63回日本呼吸器学会中国・四国地方会・第59回日本肺癌学会中国・四国支部学術集會にあわせ、光延がWeb開催（配信期間7月1日～8月8日）いたしました。

教育面では、高齢者の特性を踏まえた医療に関する最新の知識を学習し臨床・研究に生かすことを目的として平成29年度より開講した大学院博士課程選択プログラム「臨床老年医学特論」も5年目を迎えました。学部、大学院での講義を通じて老年医学の教育を行っております。

新型コロナウイルスの感染拡大は、研究、教育、診療に影響をきたしていますが、ITツールなどを駆使しながら、少しでも貢献できるよう努力する所存です。同窓の先生方におかれましては、今後ともご指導・ご鞭撻の程、何卒よろしくお願い申し上げます。（光延 記）

臨床遺伝子医療学

臨床遺伝子医療学分野の2021年度上半期の活動報告をさせていただきます。

今期、遺伝カウンセリング外来を遺伝外来に名称変更しました。遺伝性大腸癌外来と遺伝性難聴外来を開設し、消化管外科、耳鼻咽喉科の皆様の支援のもと運営しています。遺伝性乳癌卵

巣癌症候群（HBOC）診療では、乳腺・内分泌外科、婦人科、消化器内科、泌尿器科をはじめとする各専門診療科の皆様と連携し実践を重ねています。遺伝学的検査が増加し、自費診療対応の検査を含め、脳神経内科や口腔外科、総合内科、耳鼻咽喉科、整形外科、皮膚科、眼科、放射線科、小児科、内分泌内科、病理診断科をはじめ各診療科の皆様との連携のもと、指定難病や特定疾患への病院全体としての取組みに貢献すべく活動しています。がんゲノム医療外来では一貫して、院内外から多くのご紹介をいただき着実に実績を重ねています。

研究面では、当院病理技師で当分野博士課程大学院生の井上博文が、がん遺伝子パネル検査でのゲノムDNA抽出のベストプラクティスの検討（Pathol Int. 2021; 71 (5): 360-364）で学位を取得しました。多機関共同研究の中央西日本遺伝性腫瘍コホート研究では、代表施設として研究体制の拡充と症例登録体制整備を進めています。遺伝性腫瘍のエキスパートパネルを定期開催し、各施設で苦慮するケースの共有や相互のレベル向上を図っています。

人事面では、兵庫県立がんセンター医長の植野さやかを客員研究員として迎えました。臨床遺伝子診療科認定遺伝カウンセラー[®]の二川摩周が大学院博士課程に医療AI応用コース1期生で入学しました。

ゲノム医療の臨床実装や研究では、多くの、広い分野にわたる専門家、多職種の方々の御指導や御協力を頂いております。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。引き続き御指導御鞭撻の程、宜しく願い申し上げます。（山本 記）

自然生命科学研究支援センター光・放射線情報解析部門

自然生命科学研究支援センター光・放射線情報解析部門鹿田施設です。今期も新型コロナウイルスに翻弄された日々でした。新規教育訓練については4月15・16日、19・20日に日本人教職員学生向け、21日に外国人教職員学生向け（英語）を実施しましたが、6月予定分は県の緊急事態措置を受けた活動制限により7月15・16日に延期して実施しました。近年、外国人を含め申込をしながら受講しない方がおられます。教育訓練の機会は数ヶ月おきにしかありませんので、貴重な機会を無駄にすることのないようお願い致します。

前述した岡山県の緊急事態措置は5月16日～6月20日に発出され、それに伴い本学も活動制限レベルを上げたため鹿田施設も対応を行いました。具体的には前述した教育訓練の中止・延期をはじめ、来館者の健康状態確認（問診票）、感染多発地域からの来訪自粛（緊急度の高い修理・点検のためを除く）、施設を利用する講義・実習の中止・延期、施設職員の輪番制在宅勤務などです。6月21日以降は活動制限が緩和されたため、通常の業務体制に戻っています。なお、来館者への健康状態確認（問診票）は引き続き実施していますので、ご協力ください。

安全取り扱いについては、今年4月1日より電離放射線障害防止規則が改正され、眼の水晶体の等価線量限度が50mSv/年および100mSv/5年と引き下げられました。それに伴い眼部被ばく線量測定器の利用希望を承っておりますので必要な方はお申し出ください。

現在、鹿田施設からの迅速な情報提供を目指しウェブページ（<http://hikari2.med.okayama-u.ac.jp/>）の改定を行っています。手続フォーム、教育訓練資料をはじめ、毎年発行している施設ニュース（pdfのみ発行）等を入手できます。また、英語ページを新たに作成し、外国人教職員・留学生への情報提供も重視していきます。（寺東 記）

動物資源部門

動物資源部門鹿田施設では、教育活動として、令和3年6月から7月にかけて、初心者向けマウス/ラット実技講習会の定期講習会を開催した。マウス6クラスおよびラット2クラスを開催し、計47名の学内研究者の参加があった。なお、同講習会のフォローアップとして、過去の受講者より申し込みがあった場合、手技の確認・指導を行っている。昨年度公開を開始した動物実験手技動画と併せ、ぜひ活用いただきたい。また4月には同講習会の臨時個別講習会の申し込みがあり、4名の受講があった。

施設運用においては、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により従来使用していたディスプレイの予防衣の入手が困難となり、昨年6月頃より主に布製の白衣・予防衣の使用に切り替えた。布製予防衣使用への移行にあたっては、当施設利用者各位より100枚以上の白衣の寄付があり、この場を借りて感謝いたします。

人事面では、技術職員（特別契約）の橋本春菜が令和3年3月31日付で退職し、4月1日付で島根大学研究・学術情報機構総合科学研究支援センター実験動物部門技術職員として転出した。令和3年4月1日付で、山田 進を技術職員（特別契約）として採用した。（平山 記）

薬 剤 部

人事関係では、4月1日付けで菊岡 亮、永廣 梓、金尾佳美、河合花菜子の4名の薬剤師が、事務補佐員として森田晶子が入局した。

業務関係では部員一同COVID-19感染拡大防止に努めながら業務を展開している。院内だけでなく岡山県、岡山市からの依頼もあり、適宜ワクチン大規模接種会場に職員を派遣し、業務にあっている。4月より院内の入院患者内服処方箋や注射処方箋にも検査値の表示を行い、処方鑑査を適切に行う上で活用している。また現在の社会状況の中、集合しての研修実施が難しいため、部内でe-learningを利用し、隔月でのリスクマネジメント関連の研修も4月より開始した。

学会活動として、2021年5月12日～14日に当教室の千堂年昭前教授が年会長として開催予定であった第14回日本緩和医療薬学会年会は、COVID-19感染拡大防止のため、完全Web開催で実施となったが、2000人を超える参加登録者もあり盛会裡に終了した。本学会でも研究成果を2演題発表し、佐田 光薬剤師が優秀演題賞を受賞した。

学術論文として、2021年は現在のところ英文原著論文に4報、和文原著2報、総説・解説5報の研究成果を掲載している。科

学研究費補助金は奨励研究に江角 悟、武田達明、岩田直大、白水翔也の各薬剤師の研究が採択された。

教育関係では、薬学部5年次の長期実務実習が開始され、令和3年度第II期（5月24日～8月6日）16名（岡山大学薬学部）を受け入れた。また、保険薬局からの研修生を4月より2名（学会研修施設のため）、8月より1名受け入れを開始し、地域医療への貢献も行っている。（鍛治園 記）

卒後臨床研修センター 医科研修部門

岡山大学医学部同窓会・鶴翔会の皆様、日頃より大変お世話になっております。

2021年4月に36名の新研修医が入職しました。新体制となった今年度は、前田病院長・センター長、伊野副病院長・医科部門長、これまでのスタッフ（佐藤、大川、小川、三好）と新スタッフ（安井助教〈肝・胆・脾外科〉・枝廣助教〈精神科・神経科〉）並びに2年目研修医（40名）が彼らを迎え、4日間のオリエンテーションの後にそれぞれの医師人生がスタートしました。今年度は、臨床研修の一環として院内職員のコロナワクチン接種業務や県営集団接種会場での予診業務に従事し、貴重な経験を積むことができました。6月のオープンホスピタルは、今年度もコロナの影響でオンライン開催としましたが、おかげさまで学内外より60名が参加。7月の全国病院合同WEBセミナー（18大学病院参加）では、研修医3名が当院の研修を全国の医学生に紹介しました。2022年度採用研修医試験（定員42名）には昨年より19名増の110名の応募がありました。これもひとえに、当院のみならず各協力型臨床研修病院・施設の指導医の先生方による、熱意溢れる素晴らしいご指導の賜物と考えており、心から感謝申し上げる次第です。また、2年目研修医を中心とするアカデミック・レジデントへの挑戦には目を見張るものがあり、中でも4月の日本内分泌学会学術総会では副島研修医が「KO Rounds Runners-up賞」を、日本リウマチ学会総会・学術集会では田村研修医が「近未来のリウマチ医奨励賞」をそれぞれ受賞しました。

今後もオンサイト・オンライン両方式での病院見学にも随時対応し、当院プログラムにおける3つの魅力である「①多数の協力型病院」との連携を通じた「②オーダーメイド研修」並びに当院の特色である「③科学の視点をもつ臨床医の育成」を全国の医学生に周知してまいります。引き続き、ご指導・ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。（佐藤 記）

地域医療人材育成講座

平素より地域医療人材育成講座に対してご支援・ご協力いただき誠にありがとうございます。当講座では大学の講義のみでは分かりづらい地域医療に関して実習を行い、実際に多職種が地域のために尽くしている姿を通して、将来の医師像を学生時代より考えることができるように取り組んでおります。現在は教授の佐藤 勝、小川弘子、助教の渡邊真由、野島 剛の4名体制で当講座の基本理念である「地域で学ぶ、地域で育つ、地域を支える」を学生とともに日々考え実践しております。当講

座では毎年、岡山県、兵庫県、鳥取県内の病院や診療所で医学科1年生、3年生の地域医療実習及び5-6年生の選択制臨床実習を行い、ご指導いただいております。今年度もCOVID-19による多数の罹患者を認めましたが、その様な状況下にも関わらず、急な日程変更もありましたが各病院、各診療所の先生方におかれましては、地域医療のためにと学生指導をお引き受けいただき本当にありがとうございます。学生からは地域における実際の医療を体感することで、多くの知見が得られたとの報告があがってきております。学生の意識から一医師になるという意識に変わってきていると思っております。

また、地域枠学生・医師に対する様々な取り組みも行っております。地域枠学生には定期的なミーティングを開催し、交流や知識習得を図り、リーダーシップ、他者との協力などの医師として必要な能力も育んでおります。地域枠卒業医師に対しては、キャリアプラン支援を行い、総合的な診療の力を育みつつ、専門医取得も行うように支援しております。総合的な診療の力、専門医取得に関しては配置病院、講座の先生方のご理解、ご協力により可能となっております。今後とも皆様に地域医療人材育成講座に対しご理解・ご協力いただければ幸いです。よろしくお願い申し上げます。（野島 記）

CKD・CVD地域連携包括医療学講座

本講座は、2011（平成23）年11月に開講したCKD・CVD地域連携・心腎血管病態解析学講座の仕事を引き継ぎ発展させる目的で、2016（平成28）年11月から3年間の設置、さらに2019（令和1）年11月からもう3年の設置となりました。腎臓専門医と循環器専門医との連携を通じた慢性腎臓病（CKD）重症化や心血管疾患（CVD）合併の予防のための病診連携、県や市など自治体との連携、および一般市民の方への啓発活動、の3本柱を活動目標としております。現在、内田治仁教授（腎臓内科）と吉田賢司講師（循環器内科）より構成されています。

内田は引き続き、NPO法人日本腎臓病協会（JKA）の副幹事長、岡山県生活習慣病対策推進会議CKD・CVD対策専門部委員等を務めております。また厚生労働行政推進調査事業の「腎疾患対策検討会報告書に基づく慢性腎臓病（CKD）に対する地域における診療連携体制構築の推進に資する研究」研究班の研究分担員として、日本全国における今後のCKD対策に努めています。吉田は循環器内科の医局長4年目として多忙を極めております。

岡山県内各地で様々な活動を行う予定でしたが、COVID-19のため引き続き自粛あるいは形式を変更して行っています。病診連携におきましては、岡山市CKDネットワーク（OCKD-NET）セミナーを2021年9月にWebと現地のハイブリッド開催となりました。OCKD-NETでは病診連携患者の前向き追跡検討を継続して実施しております。県や市など自治体との連携に関しましては、岡山市、美作市、矢掛町、笠岡市、井原市、新見市、瀬戸内市などとのCKD対策事業を援助しています。

研究活動ですが、臨床研究としてCVD進展リスク因子の解明・重症化予防診療システムの開発を目的とした多施設共同CKD・CVDコホート研究（Kakusyo 3C study）の解析を行い

順次報告予定です。基礎研究としまして、内田は腎臓病・血管病の検討を、吉田はヒト心臓内幹細胞から心筋細胞への分化制御機構の解明を、それぞれ継続して実施しております。研究の成果は各学会にて報告しております。

末筆となりましたが、今後とも先生方の御指導、御鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。(内田 記)

救急外傷治療学講座

平成26年11月に開講した本講座は、社会医療法人雪の聖母会聖マリア病院を母体とした寄付講座です。聖マリア病院は、年間救急車受け入れ台数1万台を超える西日本最大級の救急病院で、一次から三次まで内外因・成人小児を問わず全ての患者を受け入れ、地域救急医療に大きく貢献しています。

現在は山田（講師）と山本（助教）の2名と少数ではありますが、臨床・教育・研究に勤しんでおります。臨床では、高度救命救急センターのスタッフとして、中尾篤典センター長のもと、岡山県南西部の最後の砦としてCOVID-19重症例も含め救急患者の受け入れに努めております。山田は外傷診療と災害医療、山本は小児救急と小児集中治療の専門性を発揮しながら重症救急患者の診療に当たっております。教育では、学生や研修医だけでなくコメディカルや救急救命士の指導にも力を入れており、医師ピックアップ出動の要請にも応需して病院前診療においても緊密に連携し、患者予後改善に貢献しております。山田は日本DMAT研修インストラクター、山本はPALSインストラクターとして、それぞれ後進の育成にも助力しております。研究では、国内外の学会で積極的に発表し、論文数も着々と増えてきております。山田は水素・細胞を用いた基礎研究を、山本は水素・ラットの小腸を用いた基礎研究をそれぞれ行っており、臨床研究だけでなく基礎研究にも積極的に取り組んでおります。今後はさらに研究成果を充実させていきたいと考えております。

救急医療・集中治療・外傷診療・災害医療・小児診療と専門性を有した講座として、臨床・教育・研究に引き続き邁進していく所存です。今後ともご指導ご鞭撻のほど何卒宜しくお願い申し上げます。(山本 記)

陽子線治療学講座

津山中央病院での陽子線治療は、平成28年4月28日に自由診療として開始、7月1日に先進医療適応となりました。岡山大学は津山中央病院と共同でがん陽子線治療センターを運用しております。大学病院では担当者の異動に伴い、吉尾と丸川、放射線医学講座の井原、杉山が診療にあたっています。今後も各診療科・センターの専門家の先生方とご協力して最適な放射線治療を提供してまいります。

陽子線治療は令和3年4月時点で脳腫瘍、頭頸部癌、食道癌、原発性肺臓癌（縦隔腫瘍や気管癌を含む）、転移性肺臓癌、原発性・転移性肝臓癌、胆管癌、膵臓癌、前立腺癌、直腸癌術後局所再発、小児腫瘍等に対して行っています。陽子線治療の保険適応は診断時20歳未満の小児腫瘍（限局性の固形腫瘍）に始

まり、平成30年4月に、頭頸部癌の一部（口腔・咽喉頭の扁平上皮癌を除く）、前立腺癌（限局性）、骨軟部腫瘍（手術不適応）に対して適応拡大されました。その他の対象疾患は先進医療で運用され、技術料として自費にて288.3万円（津山中央病院の場合）必要で、入院・薬剤・検査等は公的保険が適応されます。

陽子線治療を通して、患者さん、同窓の先生方、関係者の皆様のお役に立てればと考えておりますので、引き続きよろしくごお願い申し上げます。(吉尾 記)

運動器外傷学講座

運動器外傷学講座は運動器外傷に関する治療の開発を目的としており、開設6年目を迎えました。現在、運動器外傷に対する治療法の臨床および基礎研究を積極的に行っております。岡山県だけでなく、中四国および全国の外傷治療の促進に取り組んでいます。スタッフは中田英二（講師）、依光正則（講師）の2名で活動中です。

臨床では、救急部と連携し、多発外傷や高エネルギー外傷など重度外傷や、骨盤骨折・寛骨臼骨折、偽関節など、他院で治療に難渋している症例を当院に受け入れ、治療を行っています。基礎研究では、大学院生を指導し、組織機能修復学講座（宝田教授）と連携し、iPS細胞を用いた骨欠損の組織再生などに取り組んでいます。また、学会活動としては、日本骨折治療学会を中心として多くの学会で積極的に発表を行っています。現在、コロナ拡大の状況下であり、救急対応や学会等の制限も少なからず影響を受けていますが、当講座では状況に応じて積極的に臨床研究・基礎研究に取り組んでおります。

今後とも先生方の御指導・御鞭撻のほどよろしくごお願い申し上げます。(中田 記)

地域救急・災害医療学講座

本年度は中尾篤典教授（兼任）および上原健敬が所属し、活動させていただいております。

コロナ禍も長期化し、岡山県内での人の移動も少なくなった結果か、重症外傷患者の搬入は減少しておりますが、臨床においてはCOVID-19患者をはじめとして救急患者の初期診療および集中治療管理にも関わりました。例年申し上げていることではございますが、平素より患者様のご紹介ならびに後方連携について多大なるご協力を賜りありがとうございます。この場を借りまして厚く御礼申し上げます。今後とも患者様のご紹介ならびに逆紹介につきましてご高配賜りますようお願い申し上げます。

研究面ではWeb開催の学会が続いておりますが、各種学会での研究発表を行っております。また、外傷後の骨欠損治療に関する基礎研究も他の研究室と協力して開始しております。結果のご報告にはまだまだ時間が必要ではありますが、鋭意進めて参ります。

教育活動では本年もWeb開催となりました骨盤輪・寛骨臼骨折症例検討会の事務局として研究会の開催および運営を行いました。また、初期研修医向けに外傷ベーシックセミナー、専

門医向けに夏季セミナー、と整形外傷領域に関する講演会の企画・運営を行いました。

今後とも益々臨床・教育・研究活動に取組み講座運営に取り組んで参りたく考えております。今後とも宜しくごお願い申し上げます。(上原 記)

岡山県南東部（玉野）総合診療医学講座

玉野市と岡山大学総合内科学への連携で開講している講座です。玉野市のご理解のもと開講5年目を迎えており、引き続き玉野市を中心とした岡山県南東部における地域医療に多面的な貢献を行うことを目標のひとつとして活動いたしました。

玉野市民病院は今年度から地方独立行政法人玉野医療センターの一翼として新たに出発しており、同院においては引き続き内科診療を担当いたしました。総合内科医として、離島を含めた地域の病院・医院と連携しつつ診療を行う中で、担当教官の専門である伝統医学（漢方医学）領域、循環器科領域の診療を積極的に行いました。循環器科領域においては、心臓超音波検査の実施など診療内容の充実を図っております。訪問診療にも参加し、地域の実情に合った医療を考える大変よい機会となっております。

同院では内科専門医を目指す専攻医の受け入れが行われており、その指導にも携わりました。また、地域医療体験実習（3年生）を行う学生の受け入れも行われ、当講座の教員が実習指導に加わるとともにその評価も行いました。医療現場を肌で感じることでできる実習であり、学習意欲の向上につながるなど貴重な経験になったという学生の言葉が多く聞かれます。新型コロナウイルスの影響が続く中、専攻医・研修医の受け入れにご協力いただきました関係者の皆様に深く御礼申し上げます。

岡山大学においては、総合内科・総合診療科での診療を担当いたしました。教育面では総合内科においてこれまで同様に学生の臨床実習を担当いたしました。伝統医学の卒前・卒後教育として定期的に勉強会を開催し、その普及に努力いたしました。また、選択実習において総合内科・総合診療科を選択した学生には、より深く伝統医学に触れられるような実習を行っております。(植田 記)

岡山県南西部（笠岡）総合診療医学講座

いつも同窓会の皆様方には大変お世話になっております。本講座は、平成29年から笠岡市と総合内科学講座の連携のもと開講された寄付講座で、開講から5年目となりました。笠岡市立市民病院ひいては笠岡市民の皆様のお役にたつべく日々奮闘しております。人事としては引き続き堀口繁が准教授を、安部真が助教を務めさせていただいております。

診療面では笠岡市立市民病院にて、火曜日と水曜日に健診業務、外来業務、内視鏡業務をつとめさせていただいております。また、月曜日、木曜日、金曜日にも総合内科から医師を派遣させていただいており、笠岡市の医療環境のさらなる充実にご協力できるものとかがえております。4月に新しく院長に着任された宮阪實先生の指導の下、寄付講座としても、新たな診療体制

構築の一助となるべくスタッフと連携しながら診療にあたっております。昨年はCOVID-19の影響を大きく受けましたが、今や、院内の感染対策も充実し、健診業務及び内視鏡業務成績の回復も見込まれております。

教育面では、ローテーションで研修に来られる研修医の先生方に診療の指導を行っております。4月からの新体制に伴い、藤井病院から多くの研修指導医の派遣をいただいております。協力しながら研修医の救急、内視鏡検査の処置と入院患者診療における知識の習得のサポートを行っております。笠岡市立市民病院では離島医療も含め、救急医療、高齢者医療にも力を入れており大変貴重な研修の機会を提供可能なシステムを構築しております。

研究面では、高齢の患者様が大半を占めるという現状から、他の総合診療医学寄付講座と連携しながら共同研究を推進しております。

また新たな取り組みとして、今年の3月29日に岡山大学医学部・大学院医歯薬学総合研究科・岡山大学病院と笠岡市・笠岡市立市民病院における地域医療に関する協定書の調印式が執り行われ、岡山大学と笠岡市及び笠岡市立市民病院が共同して地域医療に熱い思いを持った医師を育て、島嶼部を含む笠岡の医療を守るべく岡山大学医学生に修学資金の貸付を行うこと、また本寄付講座を継続することについて協定が取り交わされました。

引き続き、地域の特色を生かした診療、教育、研究をつなげてまいりたいとおもいますので、同窓会の先生に於かれましては、当寄付講座ならびに笠岡市立市民病院をよろしくごお願い申し上げます。(堀口 記)

高齢者救急医療学講座

高齢者救急医療学講座は、高齢化の進行によって生じる救急医療の諸問題とその解決法を研究テーマとして、2017年11月に開講し、3年間継続されてきました。教員は、私（青景聡之）と藤崎宣友の2名で運用しております。昨年度は新型コロナウイルス感染症の広がりの中で、高齢者救急医療の問題点はより顕在化してきているように感じています。全国調査によると、高齢者の孤立、受診の遅れ、発熱患者の救急車たらい回し、これらはコロナ前と比べて増加しています。しかし井原市の救急医療は、救急車の応需率は83%と全国平均よりすぐれており、コロナ前と変わりませんでした。これもひとえに諸先生方のご協力の賜物と心より御礼申し上げます。

一方で、定期的に行ってきた市民講座は、コロナ禍の中で残念ながら昨年度は行われませんでした。そのため、情報発信ツールを「井原市民病院だより」へシフトさせ、本講座の研究報告を年4回行ってきました。我々が昨年度特に力をいれた点は、アドバンス・ケア・プランニング（ACP）の啓蒙です。高齢者にとって必ずしも「最善・最良の医療＝人工呼吸器・透析・侵襲度の高い手術」ではありません。特に救急医療現場において、本人の意思・生き方・生き様を十分に尊重しながら、治療を選択することは容易ではありません。啓蒙活動により、井原市民病院内で少しずつ、ACPについての会話が医療スタッフ・

患者・家族間で行われるようになったと実感しています。

今後は、我々の研究活動が、救急医療へどのような変化をもたらすか、井原地区の消防局データと井原市民病院の受診患者の診療記録を用いて解析していきたいと考えております。

大舌井原市長と井原市民病院・合地院長には、井原市民講座や井原市民病院だよりを通して、研究と情報発信のために多大なご協力をいただきました。この場を借りて深く感謝申し上げます。

これからも、研究結果の発信をさらにスピードアップして進めてまいります。今後とも、何卒お力添えの程宜しくお願い申し上げます。同窓・同門の諸先生方には引き続き御指導御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。 (青景 記)

瀬戸内（まるがめ）総合診療医学講座

本講座は、平成31年4月に香川県丸亀市のまるがめ医療センターと総合内科学の連携のもと開講された寄付講座で、開講から3年目となりました。引き続き、外来業務を主とする臨床支援に加えて院内感染対策とポリファーマシー改善活動を継続的に行っています。研究面では、「瀬戸内マリリエリア」寄付講座群の主力として、インフルエンザにおける高齢者と若年者の臨床症状の違いに関する論文を発表しました。これからも主に感染症・老年医学をテーマとした多施設共同研究を精力的に行っていく所存です。教育面では、内科専門医・総合診療専門医の連携病院として、若手医師の研修施設としてさらに連携を強めていきたいと考えております。人事面では、本多寛之助教に代わり、新たに灘隆宏助教・岡浩介助教を迎え、ますます充実した活動を行ってまいります。

当講座では、今後もまるがめ医療センターを中心とした中讃地域における地域医療の実践を基盤としながら、臨床教育・地域医療研究を進めていくことで、若手医師が地域医療に従事しながら継続的なキャリアアップ（学位・専門医取得）を実現する体制を構築することを目指して活動してまいります。

(萩谷 記)

災害医療マネジメント学講座

本講座は、平成30年7月に鳥取市の寄付により設置され、4年目を迎えました。前任者が退職し、令和3年4月より岡山大学病院の臨床工学センターに所属していた、臨床工学技士の平山が助教となりました。医療機器の専門として、災害時の在宅人工呼吸療法や血液透析の大きな課題に対して、近年の技術を駆使し、産官学連携を推進して解決していきたいと考えております。

令和3年7月には鳥取県で豪雨被害が出たため、遠隔地からの支援・情報収集や、現地での避難所スクリーニングを行いました。幸いにも大きな被害はございませんでした。この活動は昨年度の取り組みである、避難所のマニュアルの実証の機会にもなりました。

今年度、予定の取り組みとしては、鳥取市民への市民公開講座を通じた防災の啓発活動や、市立市民病院の院内防災訓練の

支援、防災リーダーに対する技能維持研修、保健師に対する災害対応研修に取り組む予定です。また、岡山県からの受託事業である地域医療BCPの作成や岡山県庁の新型コロナウイルス感染症対策室の支援で、患者搬送コーディネーターとして本部、臨時医療施設や宿泊療養、自宅療養などの支援を行っております。また、岡山大学病院の院内防災対策マニュアルの改訂と、院内防災訓練の運営・企画に取り組んでいます。研究面においては、厚生労働省科研費を2件（代表、分担）、科学技術復興機構1件（分担）が採択されました。これらの成果を発信し、学術的にも貢献できたらと考えております。

我々は、中尾博之教授（医師）、渡邊助教（薬剤師）、平山助教（臨床工学技士）という多職種での構成という利点を生かして、多角的に理論災害医学の構築に寄与していけたらと考えている所存でございます。

引き続き、ご指導ご支援を賜りますようお願い申し上げます。 (平山 記)

くらしき総合診療医学教育講座

本講座は、2020年4月に、総合内科学講座と倉敷成人病センターの連携のもと、倉敷エリアにおける地域医療現場での教育・臨床・研究を基盤とし、円滑で持続的な医師・医療人の育成を使命とする寄附講座です。三好智子が准教授として、赤穂宗一郎が助教として、着任しております。

倉敷成人病センターでは、研修医教育を担当しており、一般外来の指導、内視鏡の指導に加え、抄読会、初期研修医や専攻医・指導医と共に印象に残った症例の情報交換や臨床研究も行っております。教育活動としては、総合内科・総合診療科での外来指導・発表指導を行っております。他病院からの内科専攻医についても下部消化管内視鏡検査を中心とした技術的な指導を行っております。また、ヒトの心理や行動に焦点を当て、人間を全人的により深く理解しようとする行動科学という医学科学年縦断的プログラムを運営しており、社会でのコミュニケーション・医療倫理・研究倫理・医療現場におけるコミュニケーションなど、医学科1～5年生への授業を担当しました。また、指導医養成として、岡山大学新任教員FD、夏の医療系学部合同FD、卒後臨床研修指導医養成講習会のファシリテータとして参加し、学外では亀田総合病院 麻酔科FDと総合周産期母子医療センターFDも行いました。更に、医療以外の学ぶ場としての、医療者教育ジャーナルクラブやファイナンシャルセミナー、指導者のためのリーダーシップ講座の開催なども行い、医療者の多角的なスキル獲得を支援しております。学術活動としては、三好准教授が医学教育学会でコミュニケーションのオンライン教育について、全日本病院学会でコロナ禍での医療者のストレスについて、発表を行いました。

本講座は、初期研修医および専攻医の育成、多職種連携教育、臨床研究、医学教育研究などを通し、地域医療に貢献していく所存です。今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。 (三好 記)

周産期医療学講座

本講座は、2021年7月に福山市からの寄付で開設され、福山府中二次保健医療圏及び井笠圏域における周産期及び産婦人科医療に関わる医師の育成、効果的な医療提供体制に関する研究、地域住民への普及・啓発を行うことで、将来に亘り持続可能な周産期および産婦人科医療体制の構築に寄与することを目的とする寄付講座です。産科婦人科増山寿教授が本講座教授を併任され、衛藤英理子が講師として着任しております。

産婦人科医の過重労働は社会的にも大きな問題とされ、働き方改革の中でも改善を要する課題です。持続可能な周産期医療体制の整備を進めることが全国的に求められている中で、福山府中二次保健医療圏における産婦人科医師数は全国平均に比して少なく、分娩取り扱い医師数も今後減少する試算が出ています。隣接する井笠圏域でも分娩医療機関が少ないことから、ハイリスク妊産婦を圏域内で診療できない状況が発生しております。さらに、子宮がんや卵巣がんといった婦人科悪性腫瘍診療において、圏域のがん検診受診率は全国平均に比して非常に低く、婦人科腫瘍専門医が不在で専門的な医療の提供が十分でない現状が続いています。このような中で、公的医療機関の分娩機能の充実による効率化を図り、地域の周産期母子医療センターを中心とした安全・安心に出産できる体制を整備し、また婦人科腫瘍診療の拡充も図りながら、圏域における効果的な産婦人科医療体制を構築することが本講座の役目です。

また、本講座は教育・研究事業にも積極的に取り組む所存です。圏域の産婦人科医療提供体制の課題と解決策に係る調査・研究、圏域の基幹的病院（福山市民病院、福山医療センター、中国中央病院など）を実践フィールドとした産婦人科医療を担う医師の育成、圏域の産婦人科医療に関する地域住民を対象とした公開講座の実施等に力を注いで参ります。開設されたばかりの本講座をよろしくお願ひ申し上げます。（衛藤 記）

検査部

総合内科大塚文男教授が検査部長を併任しています。昨年度は技師長、副技師長を含めた7名が退職になり2名が再雇用になりました。今年度の検査部執行部は、新技師長、新副技師長が様々な業務に対応します。臨床検査技師は、小畑智実技師、宮本昌征技師（パート職員より）、平松 舞技師、横山雪花技師、芦野秀通技師の5名が新規採用されました。3月に行われた大学定例記者会見では、飯尾副技師長（当時主任）が「臨床検査技師の取り組み（PCR検査）」について発表しました。業務上については、中央採血室のパート職員の増員が認められたため採血待ち時間の解消を行うことができています。教育関係では、本学保健学科学生の臨地実習を受け入れています。表彰関係では、藤森 巧技師が岡山県臨床検査技師会学術業績表彰、松永真由美技師、糸島昌恵技師が2020（R2）年度永年会員表彰を受賞しました。（東影 記）

手術部

同窓会の皆様におかれましては益々ご活躍のことと存じます。

4月より岡山大学病院の新しい執行部が発足しましたが、手術部では手術部長産科婦人科学増山、副部長小児麻酔科岩崎、看護部長水原が継続して務めることになりました。また、欠員がありました副看護師長は5人体制（松村・小林・佐伯・松下・藤井（新任））に戻り充実した陣容となりました。

2020年度はCOVID-19へ対応するため手術枠の制限が行われた影響などから、手術件数は8,639件（内麻酔科管理症例6,444例）と昨年度の約一割の減少となりました。ハイブリッド手術、ロボット支援下手術をはじめ重度の合併症を持つ患者の手術や、複数の診療科による高難度の合同手術などの件数はかえって増加しており、COVID-19感染第4波によるICU制限および手術制限（5/17～6/7）解除後は徐々に手術件数は回復しています。

5月に第15回全国国立大学手術部会議の中国・四国ブロック会議がメール会議の形で開催され、特定行為研修（術中麻酔管理領域）修了者の活用方法、手術枠の割り当て方法、手術部で行われる倫理カンファレンスなどについて情報交換を行いました。本会議でも議題として取り上げられた、本院における看護師特定行為研修は、術中麻酔管理領域で手術部看護師が2020年度に1名が研修を終了し、2021年度より2名が新たに研修しております。研修修了者の働き方については多くの施設で模索されており、全国国立大学病院手術部会議でも今後討議される予定です。

ワクチン接種の拡大にも関わらず未だCOVID-19感染症の収束には今しばらく時間が必要なようです。今後予想される第5波の状況下でも必要な手術を安全に実施できるよう各診療科と連携を深め、対応に努めて参ります。今後とも皆様のご指導、ご協力をよろしくお願い致します。（岩崎、水原 記）

輸血部

輸血部では、安全な輸血療法と血液製剤の適正使用を第一の目標として、日々業務に励んでいます。昨年度末までに準備を進めたクリオプレシピテートの運用が始まり、診療科の先生方から依頼が徐々に増えて参りました。導入に際しては機器購入などハードルがありましたが、関連診療科の先生方にサポート頂き無事運用開始に至っています。適応のある患者さんに対しては、是非使用をご検討下さい。

輸血拒否患者に対する基本方針についても、今春より新方針の運用が開始となりました。「緊急時の相対的無輸血」の方針を新たに盛り込んでおりますが、これまでの岡山大学病院の方針を大きくは変えず、無輸血治療を希望される患者さんが門前払いになることないように留意した内容になっています。判断に苦慮する症例に対しては無輸血治療検討委員会で検討する体制も整いました。輸血に関連する医療安全の向上につながることを期待しています。

細胞療法関連では、キメラ抗原受容体T細胞（CAR-T細胞）

療法が順調に症例を重ねています。血液腫瘍内科だけでなく、小児科の急性リンパ性白血病や脳神経外科の中枢神経悪性リンパ腫症例への治療も実施されました。本年度に導入される新しいCAR-T製品についても施設監査を終え、実施を待っている状況です。輸血分野のみならず、今後も適応拡大が期待される細胞療法に関して、診療科をサポートして参りたいと思います。

人事面では、長く輸血部業務に尽力してくれた松田真幸が本年8月に高知医療センターに赴任致しました。現在は、近藤匠、木村真衣子、住居優一、浦田知宏の4名が輸血部医員として活躍しています。ご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

(藤井仲 記)

血液浄化療法部

血液浄化療法部は、和田 淳部長（腎・免疫・内分泌代謝内科学教授）のもと、スタッフ医師2名（木野村 賢、田邊克幸）、医員6名（川北智英子、加納弓月、大西康博、内山奈津実、高橋謙作、中島有理）で診療にあたっています。入院中の慢性維持透析患者の透析管理、新規の透析導入、急性腎不全患者の透析管理、難治症例に対する血漿交換等の体外循環治療について、看護師、臨床工学技士と協力して診療に取り組んでおります。

昨年度の血液透析及びアフェレシス療法のための血液浄化療法部への受け入れ件数は、新型コロナウイルス感染患者の受け入れという特殊な状況もあり、近年では初めて減少致しましたが、血液浄化療法を必要とする入院患者の延べ人数自体には大きな減少はなく、大幅な受け入れ制限は行わずに診療することができました。しかし、今年度の新型コロナウイルス第4波では、県内でも多くの透析患者が感染し、関連病院の先生方も並々ならぬご苦労があったことと存じます。当院の血液浄化療法部でも、個室隔離ができない中で複数の感染患者を受け入れることになり、感染対策とベッド調整にスタッフ一同苦慮しながら何とか乗り切ってきました。透析患者へのワクチン接種も進んでおり、感染増加が起らないことを期待する一方、やはり透析施設での徹底した感染対策は継続せざるを得ないものと思っております。今後も入院病床や血液浄化療法部での感染患者の対応状況によっては、透析患者の受け入れ調整が必要となりますが、可能な限り当院で血液浄化療法を必要とする患者の受け入れに対応し、安全な治療を提供できるよう取り組んでまいりますので、同門の先生方、関連病院の先生方におかれましては引き続きご支援をお願い申し上げます。（田邊 記）

光学医療診療部

昨年度はコロナ禍においていかに安全に検査を行うか対策に追われました。待合室でのソーシャルディスタンスの確保や受付でのビニールカーテンの設置を行い、正しいPPE（personal protective equipment）装着を徹底しました。また、コロナウイルス肺炎患者の内視鏡処置を想定したシミュレーションを感染制御部の医師、看護師のアドバイスをいただきながら定期的に行うことでスタッフの感染に対する意識を高めるようにしました。最近では、スタッフ一同、感染対策にもかなり慣れ、常

に感染防御に気を配りながら検査を行うことができています。また、不要不急の内視鏡検査については延期・中止を余儀なくされたため、検査件数は減少しましたが、昨年冬ごろより徐々に内視鏡検査数は回復傾向にあります。引き続き感染防止に注意しながら件数回復に努めて参ります。

鎮静に関する院内の方針が大きく変わり、こちらも対応を迫られました。鎮静委員会の麻酔科医師のアドバイスをもとに、スタッフの間で議論を重ね、それぞれの検査・治療に対応した鎮静方法を考案、試行錯誤しながら処置を行っています。

これからもより良い内視鏡診療を目指しスタッフ一同精進して参りますので引き続きご指導、ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。（加藤 記）

高度救命救急センター

当高度救命救急センターをご支援くださり、心より御礼申し上げます。

昨年から続いております新型コロナウイルス感染症患者の急速な増加に伴い、岡山県内の医療は危機的な状況に追い込まれました。救急医療においては搬送困難例が多発し、本来あるべき迅速な救急医療体制の維持が困難な状況となりました。そのような環境下にありましたが、応援診療科と尽力頂いている整形外科、脳神経外科、口腔外科にも感謝申し上げます。

岡山大学病院においては重症コロナ感染症患者様の受け入れと、入院後の集中治療管理に加え、搬送困難症例をできる限り受け入れる体制で臨んで参りましたICUでの重症患者様の受け入れ、集中治療管理については麻酔蘇生科の先生方と協同し、宿泊療養施設のオンライン診療から院内COVID-19病棟の中等症患者様の受け入れに関しては総合内科を始めとした各診療科の先生方にご協力頂き、病床状況の厳しい中、多くの患者様を受け入れることができましたこと感謝申し上げます。

また、日頃よりお世話になっております近隣医療機関の先生におかれましても日常の忙しい勤務に加え、当院センターからの多くの患者様の転院を快く受け入れていただきましたことを深く感謝申し上げます。

教育面におきましては学生実習の一時中止などありましたが、現在では再開されております。以前と同じような環境ではありませんが、コロナ禍での救急医療について学ぶ良い機会になっていると思います。また、Webでの開催が多数ではありますが、学会活動や講習会の機会も増えており参加者も増えてきております。

未だ感染者数の増加の波が収まらない状況が続いておりますが、新型コロナウイルス感染患者への対応も当初と比べると迅速になってきており、岡山大学病院の総合力に対応していけると確信しています。1日も早く新型コロナウイルス感染症が「収束」し、やがて「終息」に向かうことを切に願っております。

今後とも当センターへのご支援・ご協力の程何卒よろしくお願ひ申し上げます。（上田 記）

周産母子センター

コロナ禍がわが国の周産期医療に甚大な影響を及ぼしている中、当センターには県内外から多数の症例をご紹介いただいております。

当センターは地域周産期母子医療センターであり、合併症妊娠や習慣流産・不育症、周産期合併症などのハイリスク妊娠・分娩管理だけでなく、正常妊娠例や生殖補助医療（ART）にも積極的に対応しているのが特色です。分娩時大出血などの産科救急には、高度救命救急センターや麻酔科、放射線科などと協同で母児救命に取り組んでいます。また先天性心疾患に代表される胎児異常症例につきましては、小児循環器科、心臓血管外科、小児外科、脳神経外科、小児麻酔科など関係各科と協同で診療に従事しております。

当センターには産科部門（周産期および生殖内分泌）とNICU（新生児集中治療室）部門があり、増山 寿産科婦人科教授がセンター長、鎌田泰彦が副センター長・准教授、産科婦人科の早田 桂が産科部門長、小児科の吉本順子がNICU部門長を務めております。産科部門は、周産期専従医および生殖内分泌専従医を中心に産婦人科専攻医とともに診療にあたっております。NICU部門は、塚原宏一小児医科学教授の指導下で、新生児専従医の鷺尾洋介准教授（小児急性疾患学講座）、渡邊宏和、森本大作、佐藤剛史を中心に運営しております。

現在の病床数は、入院棟4階東病棟に産科（母体）18床、NICU 6床、新生児室 12床。4階西病棟に産科（母体）4床がそれぞれ配置されています。NICUが常に満床状態であることは喫緊の課題であり、母体搬送依頼をお受けできないなど、地域の先生方に多大なるご迷惑をお掛けしております。今後の安定した周産期医療の供給のため、NICUおよびGCU（回復期治療室）の拡充準備を引き続き進めて参ります。

地域の周産期医療の中核の一つとして診療にあたりるとともに、日本周産期・新生児医学会の母体・胎児専門医の基幹研修施設、新生児専門医の指定研修施設として専門医の育成にも力を注いでおります。同窓の先生方におかれましては、引き続きご支援とご鞭撻の程、宜しく願い申し上げます。（鎌田 記）

腫瘍センター

当センターでは、田端教授と久保の腫瘍内科医2人体制で、他部署との連携をとりながら、がん治療を多方面からサポートできるよう活動しております。

腫瘍センターでは平均して月900人の患者様が外来化学療法を受けられております。2020年8月より病床数を26床から28床に増床し、COVID-19の感染対策にも十分留意しながら治療を行っております。診療面では、通常の薬物療法や、治験以外にも、遺伝子パネル検査の出口戦略として国立がん研究センターを中心に全国のがんゲノム医療中核拠点で行われている「遺伝子パネル検査による遺伝子プロファイリングに基づく複数の分子標的治療に関する患者申出療養」に当院も参加しております。中国・四国地方では当院が唯一の参加施設となっており、遠方から多くの患者様をご紹介いただいております。治療に際して

は臓器横断的な腫瘍学に関する知識が求められることから、腫瘍センターが中心となり担当させて頂いております。患者申出療養のみならず、希少がんや治療抵抗性となった患者さんのがん遺伝子パネル検査を含めた治療の相談なども引き続きお受けしておりますので、是非ご紹介頂ければ幸いです。

今後も、歯科医師、薬剤師、看護師、歯科衛生士、がん相談事務員など他職種からなるチーム医療を実践していきたいと思っております。診療科・職種の枠を超えて質の高いがんのチーム医療を実践できる場、さらには地域で求められるがん医療に対応できる人材育成のための研修の場の提供を目指して活動を充実させていく所存であります。同窓の先生方におかれましては、今後もご支援とご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

（久保 記）

内分泌センター

内分泌センターでは内科・外科Cフロア、西7階病棟を拠点に内分泌外科・内科スタッフ一丸となって、全身多臓器にわたる種々の内分泌疾患に対して院内関連各科との垣根を越えたスムーズな連携により日々の診療にあたっております。同窓の先生方を始め中四国の数多くの医療機関から内分泌疾患の患者様をご紹介頂き、センターカンファレンスなどの場で活発な意見交換を行いながらチームで取り組むとともに、専門医や学生・研修医教育にも尽力しております。

学会活動では、米国内分泌学会、日本外科学会、日本内分泌学会、日本乳癌学会、ヨーロッパ乳癌カンファレンス、日本臨床腫瘍学会、日本内分泌学会中国地方会、中国四国甲状腺外科研究会、岡山内分泌同好会など、国内外の内分泌代謝領域の学会・研究会において数多くの学会発表を行っております。

最後になりましたが、今後とも同窓の諸先生方の御指導・御支援を何卒よろしくお願い申し上げます。（稲垣 記）

臓器移植医療センター

4月より前田嘉信病院院長がセンター長に就任され、新たな体制となりました。コロナ禍で全国的に脳死下の臓器移植件数が減少するなか、2021年1～7月の診療実績は肝移植8例（生体6例、脳死2例）、腎移植8例（生体7例：初の月3例を含む、脳死1例）、肺移植2例（脳死2例）でした。

学術面では、2021年6月24・25日に、第39回日本肝移植学会学術集会（会長：八木孝仁）をウェブ開催致しました。コロナ禍のなか、ウェブ開催にも関わらず多数の先生方にご参加頂き、盛会裡に終えることができました。偏に皆様方の日頃からの温かいご指導ご鞭撻の賜物とこの場を借りて深謝申し上げます。

2021年8月には、臓器移植に携わる2名の医師が、島根大学の教授に就任しました。まず、昨年、国内留学（東京女子医大）から帰局した泌尿器科講師の和田耕一郎が、出雲の地における腎移植医療の再開を掲げて、島根大学泌尿器科学講座の教授に選出されました。また、2006年から肺移植を支えた呼吸器・乳腺内分泌外科准教授の山根正修が、島根大学呼吸器外科学講座の初代教授に選出され、当センター助教・富岡泰章と元助教・

伊賀徳周の3名で異動しました。2名の新教授の誕生により、中国地域の移植医療の益々の発展が期待されると共に、大学の枠を越えて連携を深めていきたいと思っております。

人事面では、4月に助教の杭瀬 崇（肝移植）と塩谷俊雄（肺移植）が異動し、オランダで臨床経験を積んだ高木弘誠と、スペインで臨床経験を積んだ田中 真が新たに助教となり活躍中です。同時に腎移植でも山野井友昭が帰局しチームに新しい風を吹き込んでおります。また8月の富岡泰章の異動に伴い、松原 慧が助教となり今後の活躍が期待されております。

未だコロナ禍の収束は見えませんが、日本屈指の多臓器の移植施設として移植医療の発展に貢献できるように活動して参る所存ですので、引き続きご指導ご鞭撻のほど何卒宜しくお願い申し上げます。（杉本 記）

超音波診断センター

超音波診断センターは、2011年4月に開設され10年目を迎えました。中央診療棟2F東棟から西棟へ移転し、新しいセンターにて業務を開始して1年が経過しました。

大塚文男センター長（総合内科学教授）、大西秀樹副センター長（消化器内科）、高谷陽一助教（循環器内科）のもと、関係各位のご支援・ご協力により、循環器領域・消化器領域の他にも血管領域（頸部、下肢、末梢血管等）や体表領域（乳腺、甲状腺、関節等）など広範囲にわたる超音波検査を行っております。

診療面においては、コロナウイルスの影響により感染対策として、検査時にスタッフはマスクとゴーグルの着用、患者様はマスクの着用を徹底していただき日々検査を施行しています。

研究面においては、学会の演題登録を前年度同様多数行っておりますが、今年度はコロナウイルスの影響で各学会がweb開催となっており、日本循環器学会学術集会等オンラインで発表、講演を行いました。また9月に日本超音波医学会でオンライン発表の予定です。

教育面では、以前より携わっていた講演会などの開催が難しくなりましたが、オンラインにて多くの講演会、研究会を開催しています。

現在、超音波専門医2名、超音波検査士6名（消化器領域、循環器領域、血管領域、体表臓器領域）が資格を有し検査技術や知識向上に努めています。また、産休・育休からスタッフ2名が復帰しました。生理検査室と協力し心電図認定技師2名が超音波検査（循環器領域）の習得に励んでおります。

超音波診断の向上に伴い、臨床現場での検査の需要が大変増加しております。スタッフ一同、患者様のために質の高い検査を行えるよう研鑽してまいります。（竹内 記）

糖尿病センター

当センターでは、岡山県からの受託事業である「岡山県糖尿病医療連携推進事業」の事務局に加え、平成26年度から「糖尿病看護認定看護師チーム岡山」と「CDEJ（日本糖尿病療養指導士）チーム岡山」の事務局、平成31年度からは岡山市より受

託しました「岡山市糖尿病・肥満対策事業」の事務局も担当しています。岡山大学病院での糖尿病診療では、多職種によるチーム医療の深化、インスリンポンプ、リアルタイム持続血糖測定器の導入、肥満外科手術等の先進糖尿病治療の推進に取り組んでいます。

「岡山県糖尿病医療連携推進事業」では、県内での糖尿病診療レベルの向上と医療連携体制の構築及び県民への普及啓発を目的とした活動を進めています。令和3年7月現在で315施設の糖尿病総合管理医療機関（かかりつけ医）が岡山県知事及び岡山県医師会から認定されており、多職種からなる「おかやま糖尿病サポーター」（約1,850名）も参画した地域密着型の糖尿病診療・連携体制（「おかやまDMネット」）の構築を推進しています。

また、国策として進められている糖尿病性腎症重症化予防対策に関しましては、岡山県では平成30年3月に「岡山県糖尿病性腎症重症化予防プログラム（岡山方式）」を策定しました。各市町村毎に取り組みを実施しておりますが、令和3年度から可能な部分については県下統一した形で当該プログラムを推進し、県全体の、また、各市町村における本プログラムのアウトカム評価を可能とするシステムを構築しました。

人事では、令和3年3月で前任の片山晶博（医師）が退任し、4月から助教として新規に和田嵩平（医師）が採用されました。

最後になりましたが、同窓の先生方におかれましては、新型コロナウイルス感染症の影響で困難な時期が続いておりますが、引き続きご協力・ご支援の程何卒よろしくお願い申し上げます。（和田 記）

IVRセンター

IVRセンターは、がん・総合部門、脳神経部門、循環器部門、小児循環器部門、麻酔部門の5部門から構成されております。またセンター専任の看護師、診療放射線技師、臨床工学技士、医療秘書がおり、医師と力を合わせて優れたチームワークを展開しています。依然コロナ禍が続いておりますが、IVRセンター内では感染対策を徹底し必要な医療を安全かつ適切に患者様へ提供することが出来ております。当センターでの最近の取り組みといたしましては、竹中祐樹臨床工学技士を中心に、スタッフの業務効率化、感染リスク低減の目的でIVRにルーチンで使用する物品のキット化を模索しています。またカテーテルのリユースを目指す企業の取り組みに関連して、使用済み電極付きカテーテルを試験的に買い取り回収してもらうといった全国的にも先進的な取り組みも行っております。

人事面では、2021年3月末日をもって初代IVRセンター長の金澤 右先生が退職され、同4月より放射線科 平木隆夫先生が新たにIVRセンター長に就任いたしました。金澤先生は2013年4月のIVRセンター開設に大きく携われたのみならず、現在の多科、多職種が関わる診療体制の構築に多大な貢献をなされました。この場をお借りして金澤先生の功績に心からの敬意と感謝を申し上げます。今後平木センター長を中心に、当院のIVR分野の更なる発展を目指して一層努力していく所存です。

最後になりましたが、今後ともIVRセンターの運営にご理解、ご協力を賜りますようお願い申し上げますとともに、同門の先生方の益々のご健勝をお祈り申し上げます。(中川 記)

ジェンダーセンター

人事面では大きな変化はありません。COVID-19の影響で流行地域に在住の方の手術が中止、延期になる事例が続いております。キャンセルされた枠をできるだけ有効活用するために、近隣に在住の方を中心に手術の繰り上げ実施を行っており、その対応に追われています。

日本精神神経学会のガイドラインに準拠して毎月開催している岡山大学ジェンダークリニック性別適合手術適応判定会議は、引き続き Microsoft Teams を使ったWEB会議で行なっています。会議後の非公式な交流は行えない等様々なデメリットもありますが、ジェンダークリニック立ち上げを検討している遠方の病院、大学等からの参加もあり、これはこれでメリットがあります。対面での会議が復活したとしても、ハイブリッドの開催が継続されるかもしれません。

日本精神神経学会の性同一性障害に関する委員会ガイドラインの改訂作業が続いています。これは性同一性障害 gender identity disorder という疾患名が、DSM-5では性別違和 gender dysphoria、ICD-11では性別不合 gender incongruence と変更されたこと等に対応するため行われています。当ジェンダーセンターからは難波センター長と松本がワーキンググループのメンバーとして改訂作業にあたっています。

受診や手術の実施にあたっては流行地域の方々にはまだまだご不自由をおかけする状況が続くと思われそうですが、できうる限り必要な医療を必要な方に届けるべく尽力したいと考えております。(松本 記)

炎症性腸疾患センター

炎症性腸疾患 (IBD) センターは、2016年9月に設立され、2018年10月より中央診療部所属となり、現在に至っております。診療体制に関しましては、センター長である平岡佐規子、副センター長の近藤喜太 (消化管外科併任) を中心に、消化器内科、消化管外科、小児科、小児外科をはじめ各科との連携を行い、診療にあたっております。専門外来は、外科 (近藤) と小児科 (津下充) は月曜に、内科は毎日行っております。(月曜: 平岡 (PM) / (衣笠秀明)、火曜: 安富絵里子、水曜: 竹内桂子 (AM) / 井川翔子 (PM)、木曜: 平岡 / (原田馨太)、金曜: 岡田裕之 (前センター長) / (山崎泰史 / 川野誠司); 2021年8月時点)。看護師・薬剤師・管理栄養士とも協力し、患者さんの病状・ニーズに応じた適切な治療選択ができるよう努めております。IBDはストレスのかかる状態で病気の再燃のリスクも高く、また再燃した際の免疫抑制系の治療に関してもコロナ禍でもあり気を遣う状況です。COVID-19の関係で、トリアージなどの必要性はまだありますが、緊急の紹介にも対応できるように努めてまいりますので、お困りの患者様がおられる際は、ぜひご相談ください。また、病状が安定した方は逆紹介させて

いただくこともあると思いますが、その節はよろしく願いいたします。コロナ禍の中、病病・病連携の重要性を改めて感じております。

今後もIBDの専門機関の中心として恥じないよう、皆で切磋琢磨してまいります。ご高配のほどよろしくお願い申し上げます。(平岡 記)

運動器疼痛センター

リウマチ性疾患治療部門では、西田、那須が作成に関与した日本リウマチ学会の関節リウマチ診療ガイドライン2020が4月に出版されました。欧米のガイドラインにはない非薬物治療・外科的治療アルゴリズムを提唱し、関連CQに対するシステムティックレビューを行い、GRADE法に基づく推奨を行いました。日頃のご診療の参考にいただければ幸いです。

慢性疼痛治療部門は、学生教育にも力を入れ、痛みリエゾン外来のメンバーが2016年から2年生に対する教養講義「痛みの発生メカニズムと医療」を行っています。学生時代から、慢性疼痛診療におけるチーム医療の重要性を理解し興味を持ってその後の学生生活を送ってくれていると実感しております。辻 寛謙先生は、慢性痛とサルコペニアについて研究され学位を取得し4月から岡山赤十字病院医長として赴任されましたが、客員研究員として当センターで活躍しております。高尾真一郎先生は、神経障害性疼痛に応用できる血清マーカーについて解析し、慢性痛と骨粗鬆症の痛みの研究を行っています。昨年同様、コロナ禍でも地域との診療連携を図るべく、毎月1回岡山大学病院、川崎医科大学附属病院、岡山赤十字病院、光生病院で多職種合同WEBカンファレンスを行い、情報共有および連携強化を図っています。

また、本年も厚生労働省「慢性疼痛診療システム普及・人材養成モデル事業」に採択され、多職種が参加可能なハイブリッド研修会を8回シリーズで企画しております。内容は、疼痛に関連する幅広い内容で、また、全国でご活躍の第一線の先生方を講師の先生としてお招きする予定ですので是非ご参加ください。

- 8/18: 東京大学 笠原 諭先生: 慢性痛とADHDについて
- 9/1: 大阪国際がんセンター 田淵貴大先生: 喫煙に関連する症状、痛みも含めて
- 9/15: さんむ医療センター 石川哲大先生: 骨粗鬆症リエゾンサービス
- 9/22: 東北福祉大学 武村尊生先生: 慢性痛に対する心理的アプローチ
- 9/29: 仙台ペインクリニック 伊達 久先生: 慢性疼痛診療ガイドライン作成にあたって
- 10/13: 渋谷セントラルクリニック 大友博之先生: 医食同源について
- 11/10: 岡山大学 高尾真一郎先生: 骨粗鬆症と痛み
- 11/17: 愛知医科大学 新井健一先生: 慢性痛に対する漢方治療 (西田 記)

核医学診療室

核医学診療室では5名の診療放射線技師が常駐し、SPECT/CT装置2台、SPECT装置2台にて、核医学検査を行っています。令和3年2月から令和3年7月の核医学検査件数は約1300件となっています。コロナ禍で検査件数は減少していますが、前回報告時よりは増加してきています。全ての核医学検査に、放射線科診断専門医がレポートを作成しています。

核医学診療室では、その他に放射性同位元素を用いた放射線治療も行っております。子宮頸癌などに対するIr-192を用いた高線量率密封線源治療、前立腺癌に対するI-125を用いた低線量率密封小線源治療、甲状腺癌転移巣に対するI-131を用いた放射性ヨード内用療法、去勢抵抗性前立腺がんの骨転移に対するRa-223療法などを継続して行っています。

今後とも臨床各科の皆様方のご指導およびご協力のほどよろしくお願い致します。
(児島 記)

結石治療室

結石治療室では、おもに尿路結石症に対する体外衝撃波結石碎石術を行っています。この治療は尿路結石に対する最も侵襲の低い治療であり、入院せずに無麻酔で施行が可能です。

尿路結石の治療は、近年めざましい進歩を遂げています。特に内視鏡の進歩は著しく、細径化によって多くの症例が経尿道的内視鏡下手術や経皮的腎結石碎石術で対応可能となりました。そのため体外衝撃波結石碎石術は件数として減少傾向にあります。しかしながら、大学病院の性質上、他院での治療困難症例を受け入れることが多く、このような難治症例では複数の治療法を組み合わせる治療を行うことが必要となります。体外衝撃波結石碎石術は、以前の簡便な治療という位置づけから、今後は内視鏡手術の補助的役割という位置づけへ変化しつつ、引き続き尿路結石治療の重要な一翼を担い続けるものと考えます。

今後とも積極的に体外衝撃波結石碎石術を含め、総合的な結石治療を推進してまいりますので、皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。
(渡辺 記)

てんかんセンター

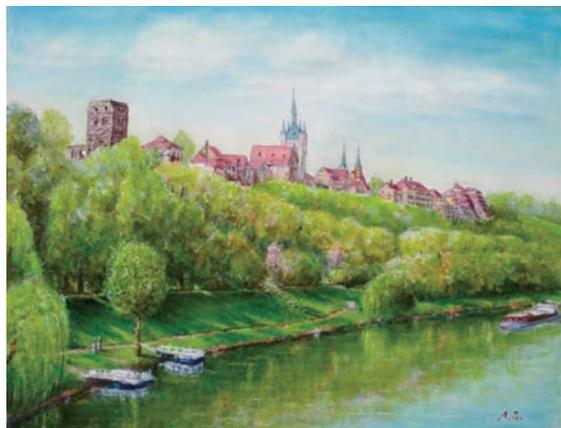
岡山県のとんかん診療拠点である岡山大学病院てんかんセンターでは、伊達 勲センター長（脳神経外科）のもと、秋山倫之副センター長（小児神経科）、脳神経外科、小児神経科、精神科神経科、脳神経内科の脳神経系診療科、関連診療科・部・病棟が連携し、包括的かつ高度なてんかん診療を行っています。

新型コロナウイルス感染症の流行が続いておりますが、てんかんセンターならではの長時間ビデオ脳波同時記録検査は、安全面に配慮しながら積極的に行っております。難治てんかんに対する外科治療に関しても積極的に取り組んでおり、岡山県内のみならず、中四国・近畿から多くの患者をご紹介いただいております。てんかん症例カンファレンス（主に外科症例）は、感染対策をとりつつ、月に二回の定期開催を続けております。

県内の診療連携としては、月1回の症例検討webカンファレンスを継続しており、岡山県てんかん診療ネットワーク（県内の診療連携機関が参加）では、てんかんに関する教育資料の配信も引き続き行っています。当てんかんセンターは、今年度も岡山県の診療拠点施設に選定されましたので、今後も診療連携の拡充に努めていく所存です。

教育・啓発活動に関しては、会場開催での講習会は行えない状況が続いておりますが、介護福祉士、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士を主な対象としたてんかん講習会を8月末にweb開催により行いました。

今後とも同窓の先生方のご指導、ご支援をよろしくお願い致します。
(秋山 記)



下山 敦士

海外への留学者一覧

令和3年10月1日現在

分野名	氏名	卒年次	留 学 先	期 間
分 子 医 学	植 木 靖 好	平 6	Indiana University, Indianapolis, USA. E-mail: Uekiy@iu.edu	2000. 10～未定
	関 次 男	平 6	Department of Medical Education California University of Science and Medicine (CalMed) School of Medicine, U.S.A. E-mail: SekiT@calmedu.org	1998. 7～未定
	浅 野 恵 一	平30院	Icahn School of Medicine at Mount Sinai, New York, U.S.A.	2018. 4～未定
病 理 学 (免疫病理)	内 野 かおり	令 3 院	University of Montreal, Canada	2021. 6～2年間
消 化 器・ 肝 臓 内 科 学	中 川 裕	平 1	Columbia Univeraity in the City of New York, U.S.A.	
	恩 地 正 浩	平 19	Institut für Molekulare Biotechnologie GmbH, Vienna, Austria	2015. 10～未定
血 腫 呼 吸 内 科 学	梅 村 茂 樹	平 11	Georgetown University, Washington, U.S.A.	2018. 9～
	荻 野 敦 子	平 12	Dana Farber Cancer Institute Lowe Center for Thoracic Oncology, Boston, U.S.A. E-mail:ogino8186@gmail.com	2009. 7～未定
	小 山 幹 子	平 12	Fred Hutchinson Cancer Research Center, Seattle, U.S.A.	
	藤 井 詩 子	平 18	McGill University, Montreal, Canada	2018. 4～
	清 家 圭 介	平 23	University of Michigan Medical School, Ann Arbor, U.S.A.	2020. 1～
	内 山 美 友 紀	平 24	Graduate Institute of International and Development Studies, Geneva, Switzerland	2020. 9～
	池 川 俊 太 郎	令 2 院	Dana Farber Cancer Institute, Boston, U.S.A.	2021. 1～
腎・免疫・ 内 分 泌 代 謝 内 科 学	杉 本 光	平 1	Beth Israel Deaconess Medical Center, Boston, U.S.A. E-mail: hikarusugimoto@yahoo.co.jp	1998. 9～未定
	渡 辺 晴 樹	平 19	The Feinstein Institutes for Medical Research, U.S.A.	2020. 9～2023. 8
	三 瀬 広 記	平 20	MD Anderson Cancer Center, Texas, U.S.A.	2019. 6～
	山 村 裕 理 子	平 23	University of Glasgow, U.K.	2019. 1～未定
	林 啓 悟	平 24	Harvard TH Chan School of Public Health, Boston, U.S.A.	2021. 1～未定
小 児 医 学 科 学	畑 山 一 貴	平 27	Women and infants Hospital in Rhode Island, U.S.A.	2019. 10～2021. 10
消 化 器 外 科 学	加 藤 卓 也	平 19	National Cancer Institute, U.S.A.	2019. 6～未定
	賀 鳥 肇	平 21	University of Washington, U.S.A.	2019. 6～未定
	金 谷 信 彦	平 22	Brigham and Women's Hospital, Boston, U.S.A.	2019. 2～未定
呼 吸 器・ 乳 腺 内 分 泌 外 科 学	富 山 浩 司	平 12	Univeraity of Rochester, NY, U.S.A.	
	植 村 忠 廣	平 6	Allegheny General Hospital Pennsylvania, U.S.A.	
	目 崎 久 美	平 22	University of Tronto, Tronto General Hospital, Canada	2018. 4～
	難 波 圭	平 22	Memorial Sloan Kettering Cancer Center, U.S.A.	2019. 12～
	三 浦 章 博	平 23	Center for Human Development, U.S.A.	2020. 10～
	山 本 治 慎	平 23	University of Tronto, Canada	2021.4～2023.3(予定)
	突 沖 貴 宏	大学院生	Northwestern University, U.S.A.	2020. 5～
整 形 学 外 科 学	中 道 亮	平 19	The Scripps Research Institute, San Diego, U.S.A.	2018. 2～未定
	堀 田 昌 宏	平30院	The University of Edinburgh, Edinburgh, U.K.	2019. 6～2021. 9
泌 尿 器 病 態 学	光 井 洋 介	令 1 院	Cleveland Clinic, U.S.A.	2021. 6～未定
	河 田 達 志	大学院生	Medical University of Vienna, Austria	2021. 9～1年間
麻 酔 生 学 蘇 生 学	佐 野 美 奈 子	大学院生	The Hospital for Sick Children, Sick Kids, Toronto, Canada	
脳 神 經 外 科 学	金 恭 平	平 22	The University of Alabama, Alabama, U.S.A.	2019. 2～
循 環 器 内 科 学	網 岡 尚 史	平 22	Univeraity of Kentucky, Saha Cardiovascular Research Center, U.S.A.	2021. 5～未定
	江 尻 健 太 郎	平31院	Johns Hopkins Bloomberg School of Public Health, U.S.A.	2021. 9～未定
心 臓 血 管 外 科 学	甲 元 拓 志	平 1	University of Wisconsin Medical School, Wisconsin, U.S.A.	
	本 淨 修 己	平17院	The Hospital for Sick Children, University of Toronto, Toronto, Canada	2004. 12～未定
	大 崎 悟	平18院	University of Wisconsin Hospital and Clinics, Madison, U.S.A.	2006. 8～未定
	小 林 泰 幸	平 24	The Hospital for Sick Children, Canada	2021. 7～
	奥 山 倫 弘	平29院	Univeraity of Kentuckey, Lexington, U.S.A.	2018. 2～未定
	佐 野 俊 和	平30院	The University of California, San Fransisco, U.S.A.	2018. 5～未定
	門 脇 幸 子	大学院生	The Hospital for Sick Children, Tronto, Canada	2019. 7～



岡山医学会・鶴翔会・岡山大学関連病院長会合同総会（書面総会）の報告

岡山医学会・鶴翔会・岡山大学関連病院長会の令和3年度合同総会は、新型コロナウイルス感染症感染拡大防止の観点から中止を決定し、新任教授講演会および岡山医学会賞授賞式をZoomによるウェブ配信にて行いました。岡山医学会、鶴翔会、岡山大学関連病院長会及び一般社団法人鶴翔会の運営に必要な議題及び関係資料並びに新任教授講演会抄録・令和2年度度岡山医学会賞受賞者13名の紹介を鶴翔会会報号外として作成し、令和3年6月21日から順次、会員（8,484名）宛てに郵送し、ご意見、ご提案がある場合は7月9日（金）までにFAXによる提出をお願いしました。

その結果、岡山医学会、鶴翔会、岡山大学関連病院長会及び一般社団法人鶴翔会各会の全ての会の運営に必要な役員、令和2年度決算について異論等の意見は無く、承認されましたことを報告します。

お忙しい中、議題及び関係資料をご確認いただきました皆様に誌面をお借りしてお礼申し上げます。

※鶴翔会の決算報告等は、鶴翔会報号外（令和3年6月）に掲載済みの為、省略します。

事務局からのお知らせ

- 本誌p.10にてご案内しております創立150周年記念講演（講師：濱田博司先生）につきましては、オンデマンドでご視聴いただけるよう準備をしております。
- 令和4年4月より、同窓会費を全国のコンビニエンスストアにてお支払いいただけるよう準備中です。
- 令和4年4月より、鶴翔会ホームページがリニューアルいたします。同窓会報のバックナンバーの閲覧（最新号～過去5年間まで）、ご住所・ご勤務先の変更のお届けフォーム等を新たに開設予定です。詳細は次号132号の誌面にてお知らせいたします。

ご寄付・ご寄贈いただきました

次の方々より、鶴翔会へご寄付をいただきました。ご厚意に対し深く御礼申し上げます。

塚原宏一	先生	(他教員)	15,000円
大萩順蔵	先生	(昭21)	〃
松岡巖	先生	(昭30)	〃
小林敏成	先生	(昭31)	〃
野喜正夫	先生	(昭32)	〃
八重垣環司	先生	(昭33)	〃
大本堯史	先生	(昭37)	〃
山名征三	先生	(昭39)	〃
清水信義	先生	(昭41)	〃
谷崎眞行	先生	(昭42)	〃
中島豊爾	先生	(昭47)	〃
高倉範尚	先生	(昭48)	〃
難波義夫	先生	(昭48)	〃
堀井茂男	先生	(昭48)	〃
山本祐司	先生	(昭48)	〃
古田知久	先生	(昭50)	〃
吉野公博	先生	(昭52)	〃
松井秀樹	先生	(昭53)	〃
三島康男	先生	(昭54)	〃
大石正博	先生	(昭62)	〃
片岡仁美	先生	(平9)	〃
森実真	先生	(平12)	〃
黒田新士	先生	(平14)	〃
竹下篤範	先生	(会員)	〃
次田靖生	先生	(会員)	〃
寺岡暉	先生	(会員)	〃
森谷行利	先生	(会員)	〃
兼森美帆	先生	(会員)	〃

次の方々より、書籍をご寄贈いただきました。ご厚意に対し深く御礼申し上げます。



山本泰久先生（昭30）
「卒寿の記」



阿部康二先生（名誉会員）
退任記念業績集

おひとり“3,000円”の年会費が鶴翔会の活動を支えています！

鶴翔会会員の先生方には、益々ご健勝でご活躍のこととお慶び申し上げますと共に、平素から岡山大学医学部及び鶴翔会に対して、ご支援ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

鶴翔会では、総会、会報の発行、会員名簿などの同窓会としての一般的な活動だけではなく、医学科学生に関係する大学行事への協賛、3年生授業の医学インターンシップの支援、卒業生への記念助成など医学科の教育研究の支援活動をおこなっております。こうした活動は会員の皆様からの会費に支えられております。会費納入に皆様のご理解ご協力をお願いします。

鶴翔会では多様な会費納入に対応しています。先生方のライフスタイルに合わせてお選び下さい。毎年お手を煩わせております手間を省いていただけるものと存じます。

○ 会報に同封の払込用紙

会報に同封の「払込取扱票」をお使いください（手数料は鶴翔会負担です）。

下に示す金融機関の口座にお振り込みいただいても、また、鶴翔会へ直接お持ちいただいても結構です。

○ インターネット・モバイルバンキング

先生方がご利用の金融機関のネットバンキング申込をされていまして、デスクのパソコンから、何時でもお振り込みできます。振込口座は下の金融機関の口座です。

○ 自動引き落としサービスもご用意しています

毎年払い込むのが面倒…というお忙しい先生方に便利です。手続きをご希望の方は鶴翔会事務局まで、電話・FAX・e-mailなどで、お気軽にお問い合わせください。手続用紙をお送りします。

○ お得な会費制度もいっぱい！

一時に25年間分の会費（75,000円）を終身会費としてお納め頂きますと以後の会費は納めて頂くことはありません。振込用紙の金額欄を75,000に訂正してお振り込みください。

満77歳になられたときは、お申し出により会費が免除になりますので、お申し出ください。

【振込金融機関名、口座番号等】

中国銀行 清輝橋支店（チュウゴクギンコウ セイキバシシテン）

普通預金 1591434 鶴翔会会費口（カクショウカイカイヒグチ）

ゆうちょ銀行

※ ゆうちょ銀行からの振込の場合

ゆうちょ銀行（ユウチョギンコウ） 記号、番号 15410、38020041
鶴翔会会費口（カクショウカイカイヒグチ）

※ ゆうちょ銀行以外からの振込の場合

ゆうちょ銀行（ユウチョギンコウ） 店名 五四八（ゴヨンハチ）
店番 548 番号 3802004
鶴翔会会費口（カクショウカイカイヒグチ）

【お願い】

○ お振込に際しては、同封の払込取扱票により振込金額をご確認いただくと共に、会員番号（払込取扱票の氏名右側の番号）及び氏名を必ず入力してください。

○ 鶴翔会会費についてのお問い合わせは、鶴翔会事務局へお願いします。

電話：086-235-7060 FAX：086-235-7052 e-mail：dosokai@md.okayama-u.ac.jp

令和3年度卒年次別会費納入状況

令和3年8月末現在

卒年次	会員数	請求者数	納入者数	納入率	卒年次	会員数	請求者数	納入者数	納入率	卒年次	会員数	請求者数	納入者数	納入率
昭16以前	25			-	40	56	44	27	61%	10	105	97	33	34%
17	2	0	0	-	41	73	61	37	61%	11	96	89	29	33%
17専	2	0	0	-	42	71	61	30	49%	12	99	91	29	32%
18	4	1	1	100%	43	78	68	35	51%	13	100	96	14	15%
18専	5	1	0	0%	44	74	58	28	48%	14	94	76	18	24%
19	2	0	0	-	45	73	68	29	43%	15	92	74	23	31%
19専	6	2	0	0%	46	84	73	38	52%	16	98	77	20	26%
20	6	1	0	0%	47	80	73	41	56%	17	100	76	24	32%
20専	9	2	2	100%	48	93	87	44	51%	18	98	80	20	25%
21	5	1	1	100%	49	103	90	47	52%	19	97	78	20	26%
22	5	2	0	0%	50	75	70	39	56%	20	91	73	21	29%
23	12	6	2	33%	51	108	99	55	56%	21	104	86	24	28%
23専	11	4	2	50%	52	101	92	45	49%	22	94	83	22	27%
24	8	5	1	20%	53	73	65	34	52%	23	107	87	24	28%
24専	27	14	5	36%	54	119	112	47	42%	24	98	79	21	27%
25	10	5	0	0%	55	113	106	54	51%	25	95	87	31	36%
25専	30	16	5	31%	56	107	99	50	51%	26	105	89	22	25%
26	14	10	6	60%	57	126	116	56	48%	27	105	97	21	22%
26専	16	8	2	25%	58	113	106	46	43%	28	114	106	15	14%
27	18	12	5	42%	59	123	118	54	46%	29	120	110	11	10%
27専	8	5	2	40%	60	112	103	38	37%	30	112	102	17	17%
28	27	16	4	25%	61	112	104	47	45%	31	122	112	5	4%
29	22	13	7	54%	62	118	112	48	43%	令2	119	117	2	2%
30	25	13	7	54%	63	129	123	64	52%	3	110	109	36	33%
31	33	23	10	43%	平1	107	97	51	53%	学部卒計	6,484	5,646	2,096	37%
32	35	24	12	50%	2	120	113	47	42%	長期滞納者(S)請求 2,346件 納入者 77件 3%				
33	35	29	17	59%	3	111	97	45	46%	備考. 上記一覧表は本学部卒業者の状況であるが、他大学卒業後本学大学院の修了者及びその他会員の状況は次のとおり。				
34	49	32	15	47%	4	117	106	52	49%	卒年次	会員数	請求者数	納入者数	納入率
35	55	44	20	45%	5	110	105	33	31%	大学院卒	1,500	993	245	25%
36	48	39	22	56%	6	120	114	43	38%	その他	1,729	1,547	670	43%
37	45	36	14	39%	7	108	93	28	30%	合計	9,713	8,186	3,011	37%
38	54	45	22	49%	8	101	96	27	28%					
39	51	42	22	52%	9	97	95	29	31%					

注：
 ① 会費の前納制度として、一時に25年分・75,000円（終身会費）の納入方法の制度もありますので、ご利用ください。（会則第10条附則）
 ② 会則第10条の規程により、満77歳に達したときは、会員の申し出により会費を免除することができますので、お申し出ください。

鶴翔会だより 『教育研究を進めるもの』

公益財団法人岡山医学振興会 代表理事
(昭和54年卒、名誉教授)
山田 雅夫

燈火親しむべき候、鶴翔会の皆様には、ますますご清栄のことと拝察申し上げます。新型コロナウイルス感染症の終息への道筋が未だに不透明な中、皆様のご懸命のご尽力に敬意を表します。

岡山医学振興会では、皆さまからのご支援をいただき、今年度も教育研究助成の公募・選考を進めております。厚くお礼を申し上げますとともに、今後とも、岡山の医学振興のため、引き続き、あたたかいご支援を賜りますよう、改めてお願い申し上げます次第です。

さて、大学の教育研究をめぐる環境は平成16（2004）年の国立大学法人化の前後から大きく変わってきました。私が教授になってしばらくのころ、本学部では大学院の重点化・部局化が急がれておりました。その申請には外部評価が必須だということで、故二宮善文教授とともに当時の難波正義医学部長（前当財団代表理事、現理事）に命じられ、生理系、病理系、社会医学系、内科学系、外科学系、病院系の外部評価委員会をお招きして、評価委員会を開催し、報告書まで3か月の突貫工事で仕上げました。その甲斐あって平成13（2001）年、大学院医歯学総合研究科が設立されました。その後、津島で本学の国立大学法人化の準備が本格化し、その制度設計のなかで目標・評価の座長を担当し、引き続き2度の大学機関別認証評価の自己評価書及び第一期・第二期中期目標・中期計画期間に関わる達成状況報告書と現況調査票の執筆と取りまとめを評価センター長として務めました。いずれも大学にとっても初めての取り組みで、大学として為すべきことを、多くの教職員の皆様と相談しながら、緊張感の中にも充実した時間を過ごしたと思っています。

背景には、平成3（1991）年の大学設置基準の大綱化があり、その年から東京大学を皮切りに始まった『大学院重点化』政策があります。平成11（1999）年に大学設置基準で自己点検・評価が義務化され、更に平成14（2002）年度の学校教育法の改正後は大学機関別認証評価を定期的な受審するようになり、前述の国立大学の法人化に伴って中期目標・中期計画が策定されるようになると、大学の理念・目標、学部・研究科の理念・使命が明記され広く社会に公表されるようになり

ました。

研究の高度化についても、今では当たり前となった教授選考の公募制、教員選考での論文の格付け調査（インパクトファクター、サイテーションインデックス）、急速に進んだ学位論文の欧文化、学位取得における論文博士（乙学位）から課程博士（甲学位）への転換など、これらの変革は大きな原動力になったことは間違いありません。

自己点検・評価、これをさらに進めた内部質保証は、社会に対する説明責任を果たすため、大学として為すべきことではありますが、一方で大学本来のミッションである教育・研究の根幹が細ったのではないかとの思いが、アカデミアには根強くあります。例えば、若手の教授にも、部局の管理・運営の大役が割り充てられ、矢継ぎ早に迫られる各種書類提出等に追われ、研究の最前線の担い手である中堅から若手の研究時間が確保できず、若手の自由闊達な取り組みにより自身の研究を高め、研究業績を積み、研究資金を獲得するのが難しくなる。そうすると、これらの教員は、大学院生の研究指導でも中心的役割を果たしているのに、大学院生の教育研究も思うように進まなくなる、といったことが危惧されます。

この部分への対応は、多くの場合、若手研究者個人のがんばりや、各講座（教育研究分野）での手厚い応援・協力体制、さらに主任教授の卓越した研究力・マネジメント能力によって、超多忙を前提として、なんとか持ちこたえているのが現状かもしれません。

このような現状を鑑み、岡山の教育・研究・医療の最前線を側方から支援するため、岡山医学振興会へのご寄付を賜りますよう、改めてお願い申し上げます。

岡山大学病院医科系診療科別役付職員一覧

病院長（兼研究（医科）担当） 前田 嘉信
 副病院長〔総務運営担当〕 森実 真
 同〔企画・SDGs担当〕 大塚 文男
 同〔診療（医科）・防災担当〕 増山 寿
 同〔教育（医科）担当〕 伊野 英男
 同〔医療安全管理担当〕 塚原 宏一

令和3年10月1日現在

診療領域	診療科	科 長	副 科 長	医 局 長	外来医長	病棟医長	教育医長
内 科	総合内科・総合診療科	大塚 文男	花山 宜久	萩谷 英大	小比賀 美賀子	長谷川 功	谷山 真規子
	消化器内科	岡田 裕之	高木 章乃夫	川野 誠司	岩室 雅也	松本 和幸	原田 馨太
	血液・腫瘍内科	前田 嘉信	松岡 賢市	西森 久和	大橋 圭明	藤原 英晃	浅田 騰
	呼吸器・アレルギー内科	木浦 勝行	松岡 賢市	西森 久和	大橋 圭明	藤原 英晃	浅田 騰
	腎臓・糖尿病・内分泌内科	和田 淳	江口 潤	木野村 賢	竹内 英実	松本 佳則	江口 潤
	リウマチ・膠原病内科	和田 淳	松本 佳則	木野村 賢	竹内 英実	松本 佳則	江口 潤
	循環器内科	伊藤 浩		吉田 賢司	三好 亨	赤木 達	戸田 洋伸
	脳神経内科		山下 徹	森原 隆太	武本 麻美	袖木 太淳	森原 隆太
感染症内科	草野 展周						
外 科	消化管外科	藤原 俊義	寺石 文則	黒田 新士	重安 邦俊	田邊 俊介	前田 直見
	肝胆膵外科	八木 孝仁	榎田 祐三	黒田 新士	高木 弘誠	吉田 一博	藤 智和
	呼吸器外科	豊岡 伸一	杉木 誠一郎	枝園 忠彦	岡崎 幹生	山本 寛齐	三好 健太郎
	乳腺・内分泌外科	土井原 博義	平 成人	枝園 忠彦	平 成人	枝園 忠彦	高橋 侑子
	泌尿器科	荒木 元朗		荒木 元朗	佐古 智子	枝村 康平	荒木 元朗
	心臓血管外科	笠原 真悟		小谷 恭弘	廣田 真規	川畑 拓也	衛藤 弘城
	小児外科	野田 卓男			納所 洋	谷本 光隆	納所 洋
	小児心臓血管外科	笠原 真悟					
感覚・皮膚・運動機能科	整形外科	尾崎 敏文	西田 圭一郎	島村 安則	雑賀 建多	中田 英二	藤原 智洋
	形成外科	木股 敬裕	難波 祐三郎	渡邊 敏之	妹尾 貴矢	松本 洋	妹尾 貴矢
	皮膚科	森実 真	山崎 修	平井 陽至	横山 恵美	三宅 智子	梶田 藍
	眼科	森実 祐基		塩出 雄亮	藤原 美幸	細川 海音	濱崎 一郎
	耳鼻咽喉科	安藤 瑞生	假谷 伸	片岡 祐子	菅谷 明子	牧野 琢丸	前田 幸英
脳・神経・精神科	精神科神経科	山田 了士	寺田 整司	井上 真一郎	岡久 祐子	竹之下 慎太郎	藤原 雅樹
	脳神経外科	伊達 勲	安原 隆雄	菱川 朋人	藤井 謙太郎	平松 匡文	春間 純
	麻酔科蘇生科	森松 博史		清水 一好	松崎 孝	金澤 伴幸	谷 真規子
小児・産科・女性科	小児科	塚原 宏一	岡田 あゆみ	馬場 健児	藤井 智香子	榮徳 隆裕	吉本 順子
	小児循環器科	大月 審一					
	小児神経科	小林 勝弘	秋山 倫之	秋山 倫之	柴田 敬	土屋 弘樹	秋山 麻里
	小児血液・腫瘍科	塚原 宏一					
	小児麻酔科	岩崎 達雄					
	小児放射線科	松井 裕輔					
	小児心身医療科	岡田 あゆみ					
産科婦人科	増山 寿	中村 圭一郎	中村 圭一郎	早田 桂	小川 千加子	久保 光太郎	
放射線科	平木 隆夫		松井 裕輔	富田 晃司	宇賀 麻由	児島 克英	
救命救急科	中尾 篤典	内藤 宏道	内藤 宏道	塚原 紘平	藤崎 宣友	小崎 吉訓	
病理診断科	柳井 広之		都地 友紘			西田 賢司	
緩和支援医療科	田端 雅弘	片山 英樹					
臨床遺伝子診療科	平沢 晃	河内 麻里子	山本 英喜	河内 麻里子		山本 英喜	

鶴翔会会報 投稿内規

項目	字数（程度）	内容
ご挨拶	800	(学内) 学長・学部長・病院長就任、定年退任、教授就任 (学外) 学長・教授就任、関係機関の長就任等
謹弔		名誉教授・名誉会長・会員などご逝去のとき
医学部（病院）の動き		医学部・附属病院の変革、新設部門などについて
会員の近況		受賞・表彰、近況報告等
学会・研究会だより		学会・研究会等報告、開催通知
支部だより	1600	各支部の支部総会報告
同期会だより	1600	同期会報告、開催通知
関連病院だより		岡山大学関連病院長会 新規入会病院紹介
学生だより	1600	西医体報告、解剖実習体験記等
海外だより	2000	海外留学、在住時の体験記や海外旅行記等
歴史の広場		岡山大学医学部にまつわる歴史について
随想	1600	
会員のこえ		会員の意見・感想等
教室だより	800	医学部・大学院・病院診療施設の現況報告
岡山より		事務局より報告事項
編集後記		会報担当幹事又は事務局が担当
挿絵		

1. 字数はあくまで目安です。
 2. 4月号のメ切は1月末、10月号のメ切は7月末です。
 3. 上記以外の内容であっても受け付けております。ただし、特定の個人への誹謗中傷等、掲載に相応しくないと
思われるものについては、編集委員会において審議後、掲載をお断りする場合があります。
 4. 原稿、挿絵はデータ（一太郎、word、JPEG等）にて下記メールアドレスまでお送りいただければ幸甚ですが、
紙原稿やお写真を下記宛てご郵送いただいても結構です。
- ※メールにてお送りくださった場合、必ず当方より原稿受領及び御礼の返信をさせていただきます。当方からの返信がない場合は、メールが正しく届いていない可能性がありますので、お問い合わせ願います。

原稿送付先・連絡先

鶴翔会

〒700-8558 岡山市北区鹿田町2-5-1

TEL：086-235-7060 FAX：086-235-7052

E-mail：dosokai@md.okayama-u.ac.jp

編 集 後 記

会報131号をお届けします。

緊急事態宣言下での東京オリンピックが終了しましたが、新型コロナウイルス感染症の第5波の広がりは続いており、岡山県も9月12日までの予定で現在緊急事態宣言下にあります。諸先生方におかれましては、対応に日々尽力されておられますことに、心から敬意を表し、感謝申し上げます。

オリンピック中の連日の猛暑のあとは、特に西日本を中心に2週間近く前線が停滞し雨ばかりの日が続くなど毎年のように異常な気象を経験するようになりました。日本だけでなく諸外国からも異常高温や、大規模な洪水のニュースが連日報道され、地球環境の変化を感じざるを得ません。

大学の教育・研究活動は岡山県における緊急事態宣言や蔓延防止等重点措置の発令により、相当の影響を受けており、オンラインでの講義や実習に振り替えるなどの対応がなされてきました。幸いなことに医学部高学年における臨床実習は一時期を除いて病院内で行うことができいております。学外での臨床実習も緊急事態宣言時などを除きますと、多くの施設で予定通りお受けいただいておりますことに深謝申し上げます。

大学院につきましては、大学全体で今後の改革・改

組の計画が進行中です。学修者主体の大学院の教育・研究を目指すため、教員組織と教育組織の分離（教教分離とよばれています）に基づく特色ある学位プログラムの構築が予定されており、研究大学の名にふさわしい活動と業績が期待されているところです。時代が求める最先端AI研究開発人材の養成をめざした大学院コースも誕生しました。

医学部創立150周年を記念して多くの皆様からご支援をいただき種々の事業を行うことができましたし、まだ進行中のものもあります。改築なった旧生化学講堂では研究会やセミナーも開かれるようになり、順調な使用状況となっています。1年延期になりました記念式典は11月3日（祝日）に、参加人数を限定して開催準備が進んでおります。今年は是非無事に開催出来ますよう祈念したいと思います。

前回の同窓会報でお知らせいたしましたように、長年鶴翔会の事務局長を務めて下さいました妹尾行恭様に代わって本号からは田口博之様が事務局長となり、本号の編集を担当されています。皆様には本会報への今後も変わらぬご支援の程、よろしくお願い申し上げます。

（伊達 勲）

発 行 鶴翔会（岡山医学同窓会）
会報幹事 伊達 勲
鶴翔会会報編集委員 前田嘉信、
大橋俊孝、森實祐基、木浦勝行、
伊達 勲、頼藤貴志、豊岡伸一、
山田了士、森実 真、柳井広之、
久保俊英（岡山医療センター）、
武内恵太（医学科5年生）、
吉野明日香（医学科5年生）
〒700-8558 岡山市北区鹿田町2-5-1
電 話 (086) 235-7060・7061
F A X (086) 235-7052
E-mail : dosokai@md.okayama-u.ac.jp
<http://www.okayama-u.ac.jp/user/mdosokai/>
印 刷 友野印刷株式会社
電 話 (086) 255-1101
F A X (086) 253-2965

乱丁・落丁はお取りかえします。

鶴翔会会員向けサービスのご案内

○ 岡山大学勤務医師責任賠償保険サービス

鶴翔会では会員の方々を対象に、(株)損害保険ジャパンの団体勤務医師賠償責任保険を取り扱っています。パンフレットを鶴翔会ホームページに掲載していますが、ご連絡をいただければお送りいたします。

特徴・メリット

- 個人で保険に加入するより、断然保険料がお得（20%も割安）
- 会員の先生であれば勤務先に関係なく利用できます
- 期間中に、勤務先を異動しても保険は有効
- 契約は1年更新

※加入又はパンフレットを希望される場合は、必要書類をお送りしますので、鶴翔会事務局までご連絡ください。

鶴翔会事務局まで TEL：086-235-7060 FAX：086-235-7052
e-mail：dosokai@md.okayama-u.ac.jp

裏表紙の写真

医歯薬融合型教育研究棟（融合棟）

医歯薬学の学際的教育施設として平成27年（2015年）に竣工。

系統解剖・法医解剖施設をはじめ、同棟の新設によりOSCE、CBTやシミュレーション教育の環境が整備された。



鶴翔会

岡山医学同窓会報